パンドラ - lateral -

兼明レテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パンドラ-ｌａｔｅｒａｌ-

【Ｎコード】
Ｎ５９１３Ｉ

【作者名】
兼明レテ

【あらすじ】
アメリカを中心に暗躍する冷酷非道、容姿端麗、一発必中な暗殺者――ヤオ。人間らしい心を持てない彼は、少女との出会いにより少しずつ変化していく。一方、アメリカではマフィアの勢力抗争が始まろうとしていた。暗殺組織、マフィア、警察……抗争はどの結末を辿るのか。『パンドラ』シリーズ２作目でありハードボイルドガンアクション。歪み《ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ》はいつしか外壁《ｌａｔｅｒａｌ》へ……。

SCRAP-1-

暗闇に、影が揺れる。
そんなことを気にもとめずに蝋燭(ろうそく)の灯りは闇を穿ち続けていた。甘ったるい匂いは脳を溶かし、人の動きや思考を緩慢(かんまん)にさせていく。それは蛾なのか蝶なのか――。羽虫が火に近づき、数回飛行を繰り返した後羽を黒く焦がしていきながら落下した。
傍らでは耳覆いたくなるようなグロテスクな音が絶えず発せられている。妊婦のように腹を膨らませた中年の男が、天蓋(てんがい)付きのベッドの上で人型を弄(もてあそ)んでいた。汗ばんで赤みを帯びた怠惰な身体によってされるがままになっているのは、美女でも美少年でもない。肌が爛れかけている性別不明の死体そのものだった。
緑色を深く帯びたその人型は、首を水仙のようにガックリと折り曲げ俯(うつむ)き、両腕はだらしなくぶら下げたままだ。ボサボサの長髪は顔を覆い隠してしまっており、やはり性別は判断できない。
”マザー・ピッド”。肥満体はそう呼ばれている。妊婦のような腹から”マザー”という単語を連想したのだろう。確かに彼は驚くほど腹が出ていた。孤児院などから子供を高値で買い取っては、凄惨な苦痛を与えて死体に加工し、欲求のはけ口として使用しているらしい。
有り余るほど金がある人間は余興が好きだ。あの豚野郎も、余興のつもりなのだろう。暗闇に揺れる影は、そんなことを考えながら一部始終を見届けていた。吐き気を催しても、口元を手で覆うことは許されない。一切の気配と動作を絶つ。それが今”影”であるその人物に課せられたことだった。
肥満体はいつまでもその動きを止めない。永遠に続くのではないかと思うほど、この気分の悪い状況は終わらないでいる。いつしか甘ったるい匂いは腐敗臭に侵食され蹂躙(じゅうりん)された。しかし脳が溶けそうでいる現状に変わりはない。麻薬だろうが死臭だろうが、人を不

快にさせる香水であることに違いはないのだ。
　こんなくだらない事のために人が殺されたのだと思うと余計に気分が悪い。こんなくだらない命の意見で世界が動いているのかと思うと、息をすることすら厭ってしまう。このだらしなくぶよぶよした肥満体は、紙切れの束を持っているだけで世界に優遇されている。
　切れ長の目が一層細められたとき、部屋のドアが乱暴に開け放たれた。”影”は天井からそれを眺めている。マザー・ピッドは一瞬たじろいだが、侵入者を一目見ると嫌らしい笑みを浮かべて死体を押しのけた。死体は、関節のネジがとれかかったマリオネットのようにだらしなく倒れる。その音は最早人間が倒れたときに発するそれではなく、水でも詰めた袋が叩きつけられるような音だった。
　――侵入者の姿は、天井の小さな隙間からでは確認できない。
　マザー・ピッドはその外見にそぐわず高い声音で侵入者を制する。――しかしそれはとてもじゃないが制止に聞こえず、卑猥な揶揄（やゆ）としか聞き取れなかった。ベッドに腰掛け侵入者を見やる視線は、本当にどうしようもないほど吐き気を誘う。
「お嬢ちゃん、どうしたんだい？　まあまあそんな怖い顔しなさんな。もう少し大人しくしてたら他のおじちゃん達が遊んであげたんだがねェ……。そんなに僕と遊びたいのかい、お嬢ちゃん？　ほら、こっちへおいで。大丈夫、僕は他のおじちゃんと違って痛いことはしないよ。痛いことは、ね」
　侵入者――話の内容からして少女のようだが――は大きく動こうとしなかった。もちろんマザー・ピッドの元へ行こうともしない。それは依然として侵入者の姿が確認できないことも示している。
　”影”は心の内で舌打ちをしたが、そのことに気がつく人間などいるはずもない。天井に開いた自然すぎる覗き穴から誰かが様子を伺っている……などと考える切れ者は、この館に存在しない。皆己の怠惰に従うまま、薬と女に溺れている。公安すら金で丸め込む札束の在処。悲痛な叫びとて、金でかき消す巨悪の巣だ。
　マザー・ピッドはそのままの姿でベッドから立ち上がった。

道化のように目を歪ませ、口元は薄笑いを浮かべて。不健康な色白の肥満体は立ち上がると余計にその醜悪さを際だたせた。マザー・ピッドは一歩一歩、豪奢な絨毯（じゅうたん）の敷かれた床を嬲（なぶ）るように歩いていく。侵入者はそれに併せて一歩一歩後退しているかもしれないが、それを確認する術はない。

”影”はただ、計画に支障をきたすことだけを危惧していた。ただでさえ侵入者の出現は想定外だというのに、ここで標的に居なくなりでもされたら……。

「そうだ、いい子だ。ほら、ベッドへおいで」

――その心配は、マザー・ピッドの発言により姿を消した。

侵入者は自分の意志で足を進め、ベッドへと歩いていく。狭い視界に姿を現した侵入者は、やはり少女の姿をしていた。白い粗末なワンピースのようなものを着せられている彼女は、一言も言葉を発しないまま口元を固く閉ざしていた。長い黒髪はあまり櫛（くし）が通っていないようで、あちこちにはねたり絡まったりしている。露出した腕や足には殴られたような痕と、手足を拘束されていた証拠のアザが残っていた。どうせは彼女も売り飛ばされた孤児か何かだろう。変態に嬲られ、殺され、人間としての形を保てないほどに分解されてまた売られるのがオチだ。

”影”はそのことについて一切同情しなかったが、少女の動向は目を凝らして眺めていた。もとい、眺めていなければならなかった。下手に動かれては仕事の邪魔だ。

少女はぺた、ぺたと小さな足を進めてマザー・ピッドの目の前で立ち止まった。両手は背中で組まれ、頭は垂れている。やはり一言も発しようとはしないし、その兆しもない。何だかよく分からないが、浮世離れした存在感が彼女を引き立てていた。

マザー・ピッドが赤くアザの残る右手首を掴んでベッドへ誘おうとする。しかし彼女はその場から動こうとしなかった。細く痩せこけた体で必死に抵抗をしているのは、マザー・ピッドの憎々しげな表情から見て取れる。

「お嬢ちゃん、下手な抵抗はよすんだ。大人しくしてれば、痛いことはしないんだよ。お嬢ちゃんはそれを分かってな――」
マザー・ピッドが「分かってない」と発音するのと同時に、少女は自由のきく左手首を瞬時に振り上げ、そして横に薙いだ。
マザー・ピッドは品のない悲鳴と共に、多少血が流れている鼻先を押さえてのたうち回っていた。少女の左手には鈍く光を反射する欠片のようなものが握られている。
それが”ガラスの破片”だと気づくのは、少女がマザー・ピッドを押し倒して左手を振りかぶったその時だった。

SCRAP-2-

「なめるんじゃねェよ、お嬢ちゃん」
低く、ドスの利いたその声は、先ほどまでの声音とはうって変わっていた。
マザー・ピッドは振り上げられた左手を乱暴にねじ上げると、天井に音が届くんじゃないかと思うほどギリギリと締め上げた。少女は痛みに顔を歪めたが、声はあげない。マザー・ピッドはこれでもかというほど眉間に皺(しわ)を寄せ、かぶりつくように少女を怒鳴りつける。
「こんな細せェ腕してなぁ、お嬢ちゃん。オレを殺すつもりだったのかぁ！　すげェなあ！　こんなモンで、タマとれると思ってたのかぁ！　金で買われた薄汚ねェガキのくせしてよぉ！　モノ以下の野郎が暗殺者気取りたぁ笑わせるぜ！」
少女は肩をすくめて俯いたままだった。泣いているのかもしれないが確認する術はない。白い爬虫類のような肥満体が激昂するたび、ベッドはギシギシと悲鳴をあげた。その音を容易く掻き消してしまえるほどマザー・ピッドの怒声はけたたましい。そして鳴りやむことを知らない。
そう、彼女はひとつだけ過ちを犯してしまった。
マザー・ピッドにガラスの破片で切りかかるまで、そこまでは及第点だったのだ。暗殺者とまではいかないが、筋は良かった。しかし肝心の時に、彼女は迷った。そして恐れた。その人間らしい感情が彼女の刃を鈍らせ、鼻先をかすめる程度で終わらせてしまったのだろう。上手くいけば、喉元をかっ切るくらいできただろうに。だがまあ所詮は素人。人間である証でもある。
――そして俺は素人ではない。人間もとうに捨てた。だから、これから仕事をしなければならない。
”影”は無言の自嘲を頭に浮かべ、瞬時に溶かして消した。

黒い革の手袋をはめた両手は埃っぽい天井裏を撫でるように調べ、とある場所を発見した。決して音を立てないように、決して気配を探られないように、”影”は事前に準備しておいた取り外し可能な一カ所を無音で開け、そこに両膝を引っかけるようにして頭から降りていく。まるで蝙蝠（こうもり）のようだが、いつものスタイルなので仕方がない。

マザー・ピッドの背後ギリギリで天井からぶら下がっている謎の人物を目にして、少女は余程驚いたようだった。しかし声を発しない彼女のおかげで、マザー・ピッド本人はそれに気づかない。黒いスーツに黒いネクタイ、黒い革製の手袋を嵌めた東洋人らしき男が唐突に天井から現れたのだ。普通の精神ならば驚かないはずもない。

”影”はいつしか影ではなく、黒い”誰か”へと変貌していた。

少女は未だガラスの破片を握りしめたまま、その手をねじり上げられている。白い肥満体は狂ったように罵声を浴びせ続けては、時折少女を殴った。しかし少女は黒い”誰か”から視線を離すことができないまま、無言で驚愕（きょうがく）の意を示している。マザー・ピッドもさすがに何かおかしいということには気がついたのか、罵声と握られた拳を止めて背後を振り返ろうとした。

――しかしそれは叶わなかった。

「てめェ……どこの回しモンだ……」

マザー・ピッドの肩と同化してしまっている首筋には、偃月刀（えんげつとう）を模したダガーナイフが添えられている。黒い”誰か”は蝙蝠のように天井からぶら下がったまま、ぶよぶよと段を重ねる首に白銀の刃を固定していた。首の皮一枚といったところでピタリと静止しているそれは、蛇の牙を思わせる。

”誰か”は温度のない口調でマザー・ピッドの問いに答える。

「どこでもあり、どこでもない。大方見当はついているはずだ」

「――ＢＢクラブの野郎かァ……！」

マザー・ピッドが腹の底からうねりだした声を合図に、”誰か”は天井の穴から蛇が移動するような滑らかさで地に足をつけた。そ

の間もダガーナイフは一切動いておらず、依然としてその首筋を狙っている。少女はその”誰か”とはっきり視線を合わせ、あんぐりと口を開き続けていた。適当に切りそろえられた黒髪の下にはぞっとするほど冷たい目がある。黒く、蛇のように恐ろしくて、糸のように細い――。

少女は鴉でも蝙蝠でもない、その”蛇”を思わせる誰かを見続けるほか無かった。

「殺し屋さんよォ……アンタ、名前はなんて言うんだ。いいだろちょっとくらい、教えてくれたってよ」

「……ヤオ。悪いがコードネームだ」

「チャイニーズか……ふ、ふひ……ふひひひ……」

マザー・ピッドは薄気味悪い笑みを浮かべ、しまいには肩を震わせて笑い始めた。手首を掴まれていた少女は解放され、逃げるように二、三歩後ずさる。

黒い”誰か”――ヤオは一切動じなかったが、まだダガーナイフに力を込めるつもりも無いようだ。何がおかしいのか白い肥満の裸体は腹を抱えて笑い続けている。

「こんな仕事についてるってこたぁ……アンタ、ロクな人生歩んでないんじゃないのか？　この世の贅沢を知らない、そうだろ？　……なぁ、いくら欲しい。言ってみろ。なに、遠慮はするな。一生遊んで暮らしていける金はもちろん、クスリや女も好きなだけやる。ガキが良いならガキにしようか。暗殺なんてやめてオレのボディーガードやらないか。どうだいい話だろう。お前みたいな東洋人が味わったことのない贅沢だぞ……どうだ……！」

マザー・ピッドはダガーナイフが首筋に添えられていることすら忘れて、ヤオを振り向いた。そして一瞬言葉を失った。

暗殺者が思っていた以上に顔立ちの整った若い男であった、ということもある。しかしそれ以上に、汚らわしいモノを見下す蛇のような目があまりにも機械じみていたからだ。

無表情の仮面をかぶった白い顔は、マザー・ピッドと視線が合う

やいなや少女へと視線を移した。整った唇を薄く開く。
「……おい、ガキ。そのガラス片は新種のアクセサリーか？」
少女はハッとして右手を見やった。尖ったガラス片は赤黒く変色した血で汚れていた。前歯で下唇を噛みしめると悔しげに首を横に振る。ヤオはその様子を冷ややかに観察した後、きっぱりと言い切った。
「だったらこの豚を殺れ。もともと殺すつもりでそのガラス片を持ってきたんじゃないのか？　いいさ、お前にやるよ。俺はこいつが死ねばそれで仕事終了なんだ」
マザー・ピッドは「話が違う」とでも言いたげに焦り喚いていたが、ヤオは彼に一瞥もくれないまま少女を見ている。もとい、睨んでいる。
少女は自分の右手が傷つき血が滴るほどガラス片を握りしめ、しばらくマザー・ピッドを眺めて震えていたが、しまいには俯いて首を横に振った。

SCRAP-3-

「――くだらないな」
ヤオの手に力がこめられる。白い首筋を映し込む刀身は、今にもその首を切り落とそうとしていた。マザー・ピッドが小さく悲鳴をあげる。ヤオの黒い瞳に何かが灯る――
「……！」
「――このガキ……っ！　離せ……！」
――しかし、少女はヤオの右腕に抱きつくような形で、ダガーナイフが首を切り落とすことを阻止した。
マザー・ピッドはその隙にヒィヒィと慌てふためきながら逃げていく。ひしとしがみついて離れない少女を乱暴に引きはがそうとするも、白いワンピースが風に煽(あお)られるカーテンのようにはためくだけだった。右腕を振り回しても少女は離れようとしない。
「くそっ……殺されたいか……！　さっさと離れろ！」
――刹那、ガチャガチャと物々しい音が部屋を埋めた。
「ふひ、ふひひ……殺し屋ァ……もう逃げられないぞォ……！　そのお綺麗な顔面が穴だらけになるか、それともオレのコレクションに入るか選びなァ！」
マザー・ピッドはこれでもかといった具合に重装備を施された男共の後ろで汗だくになりながら笑っていた。まったく逃げ足と狡猾(こうかつ)さでは右に出るものはいないな、などとため息をつきながら、ヤオは未だ右手に貼り付いていた少女を引きはがすと細首を後ろから掴みあげて持ち上げた。そして突き出すようにして男達の眼前へと突き付ける。細い手首足首は作り物のようにぶらんと揺れた。
「いいか、よく聞けこのクソガキ。これから俺はこんだけの人数を相手にしなきゃならない。お前のせいで、だ。分かるな。口はなくても耳はあるだろ？　――その代償は支払ってもらう。動いたら殺す。動かなかったなら生き残る可能性も……まあ適当に期待してろ。

大好きな神さまにでも祈ってるんだな」
少女は一切動かなかった。
一体どのような表情を浮かべているのか見当もつかないが、ヤオにとってはそんなもの心底どうでもいいことだ。相手が外道ならば少女は死ぬ。それだけのこと。――まあ屍体嗜好ならば迷わず撃つかもしれないな……などと、ヤオは表情筋ひとつ動かさずに少女の哀れな行く末をシミュレートしていた。
マシンガンやらショットガンを携えた男達はニヤニヤしたりヤオを指さして笑ったりと様々だったが、マザー・ピッドはひとり肩を震わせ怒りを露わにしている。
「”こんだけの人数を相手にしなきゃならない”だァ？　お前は現状が分かってねぇ。これから蜂の巣になるんだ！　まあバラす前に少し遊んでやるよ、お前綺麗な顔してるからなぁ！」
ガチャ、と銃を構える音がオーケストラのように一斉に鳴り響いた。
銃の数は計り知れない。確かにこれだけの人数なら蜂の巣は一瞬でできあがるだろう。少女は先ほどの言いつけをしっかり守り一切動こうとしない。所詮は４０キロ前後の体重だ。ハンデを背負っての訓練は６０キロまで経験している。――その上相手は”素人”だ。
男達はトリガーに指をかける。引き絞られたのなら最後、ボロ雑巾のようになってお終いだ。ならば、引き絞る前に行動してしまえばいい――
ヤオは男達の足下に深くしゃがみ込むと、左手を大きく薙いだ。前列で今まさにトリガーを引こうとしていた男達は額に何かが刺さった状態で立ちつくしていた。少女は眼前ギリギリの床に頭を打ち付けないかと冷や冷やしながらも一切の動きを絶ち続けている。
ヤオは扉の向こうに続く、長い廊下を後ろ向きに走っていく。銃を持った男達に決して背を向けないように。少女の体は荒々しい動きに併せてぶらぶらと揺れた。恐ろしいほど早く流れていく豪奢な絨毯。壁や床には銃弾が火花と共に跳ねている。しかしヤオは尋常

ではない俊足と反射神経で全て避けていた。
「おい、なにやってんだお前等！　さっさとぶっ殺せェ！」
肥満の裸体はいきり立って部下にけしかけていた。
少女は依然首の後ろを掴まれ、持ち上げられたまま銃弾が頬を掠めていくのを硬直して耐え続けるしかなかった。すぐ左では銃が火を吹いている。その腕は確かで、マザー・ピッドの姦しい部下達は次々に倒れていく。マザー・ピッドはしまいには足下で脳漿（のうしょう）を垂れ流している部下から銃を奪い上げると、苛立ちながら狙いを定めた。
銃口は黒い誰かではなく少女に向いている。
「ふ、ふひひ……死ねェ！」
マザー・ピッドの手は汗ばんでベタベタになっているのが見て取れる。橙色の電灯がくっきりと陰影を落とし、ハイライトを際だたせている。少女が抜き差しならない事態に唇を噛んだとき、少女を捕らえている背後の男は何の躊躇（ためらい）もなく少女を盾に使った。
――銃声。
少女はぎゅっと目を瞑る――

SCRAP-4-

「――――ぁ」

ぼんやりとした眼が暗闇を捉える。首の骨がずきずきする。何だか息苦しく、喉がつっかえているようだ。少女は微睡みからうまく覚醒できないまま、目を薄く開いたり閉じたりを繰り返していた。

――ああ、やはり喉が痛い。凄く、痛い。

細い指で喉元を確認してみると、あるはずの物が無くなっていた。

「これだろ」

多少苛つきを含んだ声は、ガシャ、という音を少女の耳朶(じだ)に落とした。

少女が悪夢から覚めるように起きあがると、耳元に放り投げられた何かを見た。出来損ないの金属片を思わせるそれは捩りきられたかのように無惨な姿をさらしている。辺りは暗く、その錆び付いた金属片は光沢を放とうとさえしない。少女はその金属片が先ほどまで自分の喉を締め付け、声を奪っていたものの成れの果てだと確信した。

顔に深く影を落としている男は、少女を見下ろして吐き捨てた。

「へたに薬飲ませたりするよか古典的な拷問器具の方が好きなんだ、あのテの豚は。――さて、俺はさっきお前を盾にするつもりで銃弾と向かい合わせた。豚はお前に照準を合わせていたからな。こっちの弾もロハじゃない、無駄撃ちはごめんだ。で、お前は見事趣味の悪い首輪でそれを受け止めた。声は戻って、お前は生きてる。神さまってのは末恐ろしいな。……これでお前は自由だ。俺を邪魔した事はその強運に免じてやる。さっさと消えろ」

男――ヤオはぶっきらぼうに言い切ると、暗闇の奥にくすぶっている仄かな明かりに視線を向けた。

ここはどうやら森のようで、真っ黒な森を抜けた先には街がある。その街は幻影のようにぼんやりと姿を霞ませていた。少女はぼうぼ

うと草が茂っている地面にへたり込んだままその明かりを眺めている。脚が動かないのか、それとも動かそうとしないのか、少女は何か言いたげに唇を開閉するだけで立ち上がろうとはしなかった。

「私……家、無い。ここ、知る……無い……」

所々切れて血を滲ませている唇が紡ぎ出したつたない単語は、およそ英語の文法など気に留めない順序で並べ立てられた。少女の泣きそうな表情を見るやいなや、ヤオは苦虫でも噛みつぶしたような顔をして少女に銃を突き付けた。

「言っておくがな、俺は王子様でも英雄でもないんだ。お前が腐りきった孤児院で、腐りきった院長に夜ごと聞かされていた話の中にしかいないんだ、そのボランティアが趣味の人間はな。俺は暗殺者。ａｓｓａｓｓｉｎだ、分かるか？　人助けは仕事じゃない。英語が分からないんだか知らないが、言いたいことくらい分かるだろ？

お前、（you）　消える（disappear）、　ここから（here）」

ヤオは親指を突き立てた右手で自分の背後を示した。

銃を持った左手はそのままだ。少女はしまいにぐず、と鼻をすすり、泣き出した。銃を突き付けられているのが怖いのか、はたまた別の理由か。ヤオは顔をしかめて眉間を指で押さえた。左手の人差し指は「トリガーを引かせろ」と疼いている。人差し指の要望通りトリガーをめいっぱい引き絞って少女を殺しても良かったが、こんな事に銃弾をひとつ減らすのも釈然としなかった。

ヤオは銃を降ろし、ため息と共にじゃがみこむ。俯いて泣きじゃくっている少女とある程度同じ位置にまで視線を持ってきて、少女の頭蓋（ずがい）を鷲づかみにした。ぐい、と面を上げさせると大層鋭い視線で瞼（まぶた）の腫れた無惨な顔を睨め付ける。そして、言い捨てた。

「なぁ、お前は何がしたいんだ。俺も仕事を邪魔されて大層ご立腹なんだよ。お前があの時邪魔しなきゃ俺は今頃帰って酒でも飲んでる。分かるだろ？　殺されたくないんだったら消えろって言っているんだ」

少女は黙っている。その頭を掴みあげている左手に力が入った。

蛇の目はいつしか凶暴な獣のそれとなって少女を睨み付けていた。
「――いいか、最後だ。もう一度言う、これで最後だ。次で消えなきゃ殺す。いいか」
少女はやはりビクともしない。
ヤオの人差し指がトリガーにかけられる。
「おいガキ、今すぐだ。今すぐ俺の前から消えろ！」
「　Ｊ、Ｊａ（ヤ、ヤー）！」
少女は冷水でも浴びせられたかのように体を跳ね上がらせ、ドイツ語で”ＹＥＳ”と答えて走り去った。
白かったワンピースは夜風になびき、その裾を翻らせている。泥と血がこびりついてしまっているそれは闇夜に溶けるのが早かった。一陣の風がザ、と木々を鳴らし、ヤオの黒髪を流していく。漆黒の暗殺者は心底鬱陶しげに舌打ちすると、灯りが仄めく方へと一歩踏み出した。短い雑草の絨毯がサク、と音を鳴らして風にながれていった。
（……今晩のうちに豚を始末するのは無理だな。とりあえずホテルでも探すか）
ヤオはこの場が森深い山奥で無かったことを幸運に思った。市街地まではそう遠くない。一泊する程度ならばビジネスホテルで事が足りる。豚は今頃躍起になって侵入者を捜しているだろう。警備も増えてるに違いない。今は時が悪い。
――これも全てあのクソガキのせいだ、とヤオは一層顔をしかめた。
未だに手にしたままだったハンドガンをホルスターの中にしまい込み、木々のベールを足早に切り抜けていった。

SCRAP-5-

ある程度足を進めると、辺りは高層ビルの乱立するビジネス街へと移り変わっていた。せっかちな自動車が排気ガスをまき散らして過ぎ去っていく。至る所に光源があり、もう夜も深いというのに街は眠りに落ちる気配もない。日本人(リーベンレン)も夜を潰して働き詰めるらしいが、アメリカの人間もなかなかだ。

深夜1時のマンハッタンは様々な人種の人間で溢れかえっていた。

――このうちの何人が天寿を全うできるのだろうか。何人が「正義」という言葉を振りかざしながら生きていくのだろうか。……何人が社会の裏に溺れるのだろうか。

冷たい風がヤオを吹きつけ、細い目はさらに細められた。虹彩は漆黒。光は灯らず、目の下には隈(くま)が刻まれている。蛇、もしくは凶暴な爬虫類を思わせるそれは、やはり人間らしい感情など孕んではいなかった。何者も認めず、立ち入らせず、近寄らせない。そんな雰囲気は、おそらくその目つきが大きく関係している。

ヤオは手頃なホテルを見つけ、そこで一晩明かすことにした。シャワーとベッドさえあれば何だって良かったが、ボロすぎるのも好ましくはなかった。マザー・ピッドはヤオを金で釣ろうとしたが、残念なことにヤオの口座には腐るほど金がある。札束を自由の女神のてっぺんまで積み上げてくれるのなら話は別だが、”一生遊んで暮らせる金”程度には見向きもしなかった。

よく磨かれたガラス製の自動ドアを抜け、小さめのフロントで部屋の有無を確認する。受付人である若い男はいやにニコニコしながら「お部屋は御座います」と答えた。男は体をくねくねさせたり傾けたりと接客態度に難があったが、ヤオは今晩の寝床さえ確保できればいいという結論にいたり気に留めなかった。

「お部屋は5階、506です。お荷物はこちらでお預かり致します」

「結構だ、自分で持つ」

ヤオは男の態度に軽い苛立ちを覚えながらも足早にフロントを立ち去った。
踵（きびす）を返した背後で男が何やら必死に呼び止めようとしているが気にしない。受付は済ませた。咎められるいわれはない。３つ並んでいるエレベーターのうち一番右のドアが開いた。ヤオは大股で乗り込むと”５”のボタンを押す。左手には小さめのアタッシュケースをぶら下げていたので、右の指で押した。黒い革手袋はエレベーター内の光を弾いて艶やかに光沢を放っている。
――ふと奇妙な違和感を感じたが、違和感の正体を早々に理解してしまうと辺りを見渡すこともしないまま5階への到着を待った。５０６のプレートを探し当て、カードキーを差し込む。すぐさま閉めてやろうと思ったが、もうどうでも良くなってしまったのでさっさと室内に入ってネクタイを外した。
ベッドに座り込み足を組んで一息ついたとき、やっとドアが閉まる音がした。
ヤオは真っ黒なスーツの上着をベッドの上に無造作に投げると、不自然な時間差を孕んでいるドアに一瞥もくれないまま一言、言った。
「俺は”消えろ”と言ったんだがな、無様なのは体たらくだけじゃなくておつむの中もなのか？」
ドアの前で泥まみれのワンピースを両の手でぎゅっと掴んだ少女が俯いたまま立っていた。
ワンピースを巻き込んで握られている一枚の紙は、どうやら英語で「この人間は私の兄です」と書いてあるらしい。加えて斜め右上に伸びた太い矢印。この少女はフロントでヤオの背後に立ってこの紙を提示し、妹を装って受付の男を欺いたのだ。
ヤオは自分の太股に肘を置き、額を押さえた。深い深いため息を吐き、頭を横に振る。まるでやる気がないといったように。
少女はドアの守護神にでもなったつもりなのか、一歩も動かないまま俯いていた。

「はー……、厄日だな、今日は。衣食足而知栄辱……ってやつか。おっかない話だ。――おいガキ、自殺したいんならよそへ行け。俺に構うな、付きまとうな、姿を現すな。　Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ（さようなら）」

ヤオは少女がドイツ語を話していたのを思い出し、わざわざドイツ語で別れの挨拶をした。

しかし少女はドアノブに手をかけようとしない。いつまでもワンピースを掴んだまま立ちつくしている。もしかしたら音無く泣いているのかもしれないが興味のない話だ。むしろほとほと迷惑である。

ヤオは気だるげにベッドから立ち上がる。重みを失ったそれはギッ、と軋んだ。少女とは反対方向へと足を進めると、部屋の大きさに比べれば立派な窓を全開にした。ここは5階なので、覗き込むと地面まではそこそこ高さがある。

ヤオは窓を開け放ったまま大股で少女に近づくとボサボサで泥のこびり付いた髪の毛を掴みあげて乱暴に引きずった。少女は上擦った声で何か喚いているが異国の言葉など知る由もない。冷たい風の流れ込んでくる窓まで連れてくると、押し込むような形で少女の上半身を外気にさらした。少女の黒髪はビル風に流され、窓ガラスの向こう側でなびいている。細い指は必死に窓の縁を掴んで離さなかった。

「どうした、自殺志願じゃないのか。5階なら頭からいけば死ねるだろう。俺のことは心配するな。偽名でチェックインしてあるからこの場でお前が死のうが痛くもかゆくもない」

ぐい、と少女の頭を押し出す。汚らしい泥色に染まってしまったワンピースが僅かながら翻る。細い腰がへの字に曲がり、今にも頭から真っ逆さまに落ちてしまいそうだった

SCRAP-6-

――刹那、少女は突然とんでもない奇声を発して暴れ出した。
「Ｈｉｌｅｆｅ（たすけて）！　Ｈｒ（やめて）　ａｕｆ！　Ｈｉｌｅｆｅ（たすけて）！」
「このガキっ……！」
少女は泣きわめきながら部屋の中へと舞い戻った。
肩で息をして、うずくまるような形で泣き伏せっている。ヤオは盛大に舌打ちをした後、窓を閉めて再度ベッドに腰を沈めた。腕を組み、脚を組んで少女から視線を外している。忌々しげに歪められた眉間と両の目には”優しさ”やその類の感情は一切無く、心の底から疎ましく思っているといった表情だった。
ヤオは視線を向けないまま少女に問いかけた。
「そう言えばお前はあの豚を殺そうとしてガラスの破片を持ったんじゃないのか？　何故殺らなかった。絶好のチャンスだっただろう」
少女はゲホゲホ咳き込んだあと、恐る恐る返答を唇に浮かべる。
「首輪……鍵、欲しいかった。もし殺した、鍵……無い。鍵、無い、困る」
「……はっ、『やっぱり人殺しはできないから』みたいな理由じゃなくて安心した。なるほど、俺の邪魔をしたのも鍵が見つからなくなると困るからか。とことん見下げ果てた利己主義精神だな、殊勝、殊勝。もう首輪はとれたんだ、心おきなく行動できるだろう？」
「あの男、友達、殺す……した。先生、暴力、されて、友達、連れてく、された。……だから、私はあの男、殺す、したい」
拙（つたな）い英単語は明らかな殺気を孕んでいた。少女はそのつぶらな瞳を一生懸命に見開いて、眉間に皺を寄せ、細い指でカーペッドを引っ掻いた。
ヤオはその様子をさも退屈そうに眺めやると、一切の躊躇（ちゅうちょ）を含まずに言い切った。
「確かにお前のお友達とやらを殺してオモチャにしたのはあの豚だ

ろうな。だがまあ、そのお友達とやらを”売り捌いた”のは孤児院の院長……お前の言葉を使うなら先生だ。夢を見るのもいいがな、孤児院なんてお前が思ってるほどお綺麗なものじゃない。腐るほどいるガキを国から支給されるカスみたいな金で養えると思ってるのか？　安定した収入源とそれを可能にする”商品”が揃ってるから孤児院があるんだ。お前等は商品。煮るなり焼くなりご自由に。お代は随時交渉で。ま、お前は商品のくせに消費者に牙を剥いた欠陥品ってところだな」

少女は、凍り付いたように動かない。

ヤオはその様子に眉ひとつ動かさないまま続きを並べ立てた。

「たまに突然元気が無くなるガキもいたんじゃないのか？　裏であくどいことやってるような院長だ。そいつ自身がガキ使って楽しんでたって不思議じゃない。とにかく、お前の思っていた平和な日常や優しい先生は夢物語だったってわけ――」

ヤオが全てを言い終えるよりも早く、少女の細い腕はテーブルの上に置かれていたガラスの灰皿に伸びていた。

しかしそれは白い指が触れるよりも早く、独りでに二分してしまった。――否、テーブルに深々と刺さり込んだクナイが灰皿を真っ二つにしていたのだ。

少女はしばらく無惨にもガラスの何かに成り下がった灰皿を唖然と見ていたが、はっとして顔をあげた。クナイを的確な軌道に乗せて投げた暗殺者が身震いしても足りないほど恐ろしい目で少女を見下ろしている。

少女は最早息すらできなかった。

「いい度胸だ、クソガキ。お前、その『困ったら殺そう』って考えは上出来だ。ただお前はやっぱりまだまだなんだ。――今も一瞬ためらっただろ。そんなんじゃ豚は殺せない。豚どころか虫も殺せないだろうよ」

少女はしばらく唖然（あぜん）としていた。唖然として、そして緊張の糸が切れた途端にまたもや泣き出した。床にへたり込んだまま顔をぐし

ゃぐしゃにして。
ヤオは少女に一瞥もくれずに白いYシャツをベッドに脱ぎ捨てた。異常なほど不健康そうな痩身だが、暗殺者である以上必要最低限の筋肉は持ち得ている。少女は唐突にシャツを脱いだヤオを見て自身を両の腕で抱きかかえた。顔面蒼白で、あれだけ滝のように流れ出ていた涙もピタリと止まってしまっている。
ヤオはサイドテーブルの上に置かれていた薄いプレートのようなものを眺めながら顎を撫でると、それをベッドに放り投げて顔をあげた。その時、完全に怯えきっている少女を見てこの世の全ての憎しみをかき集めたような顔で吐き捨てた。
「お前、まさか『犯される』なんてバカな勘違いしてるわけじゃないだろうな。俺はこれからシャワー浴びて適当に食って寝る。お前のことは薄汚いオブジェか何かだと考えて行動する。これ以上泣かれると面倒だ。――それ以前に、お前みたいなクソガキなんて願い下げだ」
ヤオはそう言うと踵を返してシャワールームに足を向けた。一歩踏み出したとき、背後の少女に視線を向けないまま忠告する。
「俺の私物に触れるな、変な行動をするな、他人を呼ぶな。死にたいなら窓から落ちろ。間違ってもその泥まみれの体でベッドにあがったりするなよ」
果たして口早に繰り出された英語を少女は理解したのだろうか。ヤオはふと「理解していなかったら」の事態を危惧したが、先ほどの孤児院の話をある程度理解していたようなので大丈夫だろうと結論づけた。
「……何でこんな事になってんだ、俺は」
ヤオは疲れ果てたと言わんばかりに脱力的な声でぼやいたが、それはシャワーがタイルを打ちつける音によって掻き消されてしまっていた。シャワールームの壁に左手をついて力無く頭を垂れる。黒い髪から水滴がポタポタと滴っていく。ヤオはただ頭からシャワーのお湯をかぶり続けていた。浴槽のふちにまとまり無く置かれたク

ナイや針、ダガーナイフなどを一瞥してゆっくり瞳を閉じる。そして誰に言うわけでもなく独りごちた。

「――くそ、本当に厄日だ」

ザァ、と耳朶に反響する雨のようなシャワーの音が煩わしかった。

SCRAP-7-

ヤオはシャワールームから出たあと、上半身に何も纏わないまま冷蔵庫に入っていた食べ物を口にしていた。ベッドに横たわり、上半身は枕にあずけている。左手でハンドガンを持ってそれを眺めながらベーグルサンドを頬張っていた。

少女は部屋の隅っこで体育座りをして、膝と胴の間に顔を埋めていた。ヤオがシャワーを浴びている間大人しくしていたらしく、ヤオの私物もホテルの備品も一切その位置を変えてはいなかった。

ヤオはそのことについて何も言及せず、シャワールームから出た後、本当に少女をオブジェのように扱った。

少女はほんの少しだけ面を上げて、膝の隙間からヤオを眺めている。

恐ろしいほど細い体をしていながら、少女ひとりを軽々と振り回すことのできるその腕。尋常ではない脚力。一体華奢（きゃしゃ）な体のどこにそんな力があるのだろうと少女は疑問に思っていた。

加えて初めて見る東洋の顔立ち。それは本当にこの世のものかと思われるほど整っていたが、その顔立ちの魅力を完全に掻き消していたのが漆黒の瞳だった。目の下は隈が穿たれ、細く切れ長な目は蛇を思わせる。睨まれたらそれこそ捕食されてしまいそうだ。

しかし時折見せる伏し目がちな表情は本当に綺麗だ、と少女は思っていた。

ヤオはベーグルサンドを完食すると、ペットボトルの水を少量口にしてから完全に横になってしまった。布団すら被らず、上半身はやはり何も纏っていない。少女に背を向け、右腕を折り曲げて、その二の腕を枕のようにして頭を乗せていた。

少女は唐突に背筋を這い上がってきた寒気に一瞬震えたが、変わらず膝と胴の間に顔を埋めている。少し沈黙が流れた後、ゴトッ、と重たい音が部屋に響いた。少女は訝しげに顔をあげてみると、枕

のように折られていた右腕が肘から下だけを動かして彼女に銃を向けていた。横向きになっているヤオの体を防壁のようにして、”向こう側”から銃を向けている。少女の姿など一切見えていないはずなのだが、銃口はしっかりと少女を捉えていた。

少女はぽふ、と膝に顎を乗せると悲しげに眉をひそめる。孤児院のこと、友達のこと、先生のこと、そんなことばかりが脳裏に浮かぶ。温かかったかつての”家”にはもう帰れないのだと思うと目頭が熱を持った。もしかしたら自分は売り飛ばされたまま好き勝手に殺された方が幸せだったのではないか、という考えすら浮かんだ。

それはないと頭を横に振る。――刹那、ベッドの方からまたもやゴトッという重たい音が聞こえたので、これ以上大きく動くことを止めた。

こんな目にあって、暗殺者に殺されかけて、人として扱ってすらもらえない。

「――とことん見下げ果てた利己主義精神だな」。

その言葉が唐突に胸を突き刺した。

……そうだ、自分は人を殺そうとしてしまったんだから、人として扱ってもらえないのは当然かもしれない。いや、当然なんだ。これは罰だ。

――少女は結論に達すると膝を抱えた。

「おいクソガキ、お前、本当に豚を殺すつもりか？」

いきなり、一切の感情を打ち消した抑揚の無い声が少女の耳朶を揺らした。

少女はあまりにも突然の問いかけに一生懸命頷いたが、ヤオは少女とは反対方向にある壁を向いて横たわっている。だというのにヤオは少女の音無き返答を理解したようだった。

「あの豚はな、見た目通りのウスノロで腰も重い。銃だって持てないんじゃないのか。……ただな、あの腐った脳みそはそれなりに皺が多い。お前みたいなガキがちょっとやそっとの手品引っさげてかかったって取れるタマじゃない。殺りたいなら、裏の裏の裏……の

裏くらいか。それくらい考えとかないと無理だ、お前にはな」
ヤオは何も持たない右手を体の向こう側でひらひらさせた。
少女は悲しげに眉をひそめたが、それはさすがに伝わらない。目の前のテーブルで真っ二つになっている哀れなガラス細工を一瞥し、きゅっと唇を噛んだ。オレンジ色の光がガラスに反射している。テーブルにはくっきりとした陰影を落とし、まるで影絵の舞台のような雰囲気を醸していた。
少女はテーブルに突き刺さっているクナイに腕を伸ばしたが、ゴトッという音に併せて漆黒の銃口がこちらを向いたので、おずおずと乗り出していた体を収めた。
「――言っておくが、」
ヤオは恐ろしいほど低い声で少女に告げる。
「俺がお前を殺さないでいる理由は三つある。ひとつ、お前如きに消耗品を使うのは釈然としないから。ふたつ、殺す価値が無いから。みっつ、お前は恐らく明日死ぬだろうから、だ。お前がどうしようもない腰抜けのチキン野郎だったなら、明日逃げ出して人間らしく扱ってくれるド変態でも探すんだな。お前にほんの少しでも”殺意”があるんだったら死にに行け。――どっちを選ぶかはお前次第だ」
少女の生唾を飲み込む音が部屋に響いた。膝を抱えていた両手に力が込められる。口の端をきゅっと締めると、ヤオの後ろ姿に問いかけた。
「もし私、殺す、成功する。……成功する、した時……私、どうする？」
ヤオはしばらく黙った後「勝手にしろ」と口にした。しかし直後にその言葉を打ち消して、半ば揶揄（やゆ）を含んだ口調で答えを返した。
「お前みたいな中途半端なクソガキが豚を殺せるとは思ってないが、もし成功したら……か？　そうだな、その時は暗殺者にでもなれ。ド変態よか人間らしく扱ってくれる」

SCRAP-8-

――刹那、ドアの向こうでドタバタと音がした。
靴音は複数。現在は午前2時半、子供達がはしゃいで走り回っている時間でもない。そのうえ穏やかではない怒声なんかも薄いドア一枚隔てて聞こえていた。
ボーイの制止を促す声が怒声に掻き消されていたが、一発の銃声を期に一切聞こえなくなった。
ヤオは気だるげに起きあがると、ハンドガンを右手に持ち替えた。左手にはダガーナイフが。柄の後ろには赤い紐飾りが揺れている。立ち上がり、靴のつま先を数回カーペッドに打ち付ける。上半身はやはり何も纏わず、手に持っている得物以外に武器らしいものは一切見受けられない。
それでもヤオは「こんなもんか」と言った。
ヤオがドアに視線を置いたのと同時に、十数名の男達がバタバタと部屋に乱入してきた。荒々しく開け放たれたドアはとんでもない音を部屋にもたらす。ビジネスホテルといえども他の客も目を覚ます騒音っぷりだ。
銃を構えた明らかに堅気(かたぎ)ではない男達は、ヤオに対して勝ち誇ったような笑みと嘲笑を謳った。
「ヘイ、アサシン！　そんな赤ん坊みてぇな格好でお嬢ちゃんと一緒たぁ、お楽しみ中だったのか？　悪ぃがショウタイムはこっからだ！　マザー・ピッドはお怒りなんだ。お前の生首とぶち込む体をご要望なんだよ！」
ひとりが吼えたのと同時に、他のメンバーが下品な笑い声と共に合いの手を入れる。
少女は極力縮こまってその様子を見ていた。相手は十人以上。ハンドガンとダガーナイフだけでどうにかできる数ではないことを少女は知っている。ヤオの肉付きの薄い背中を不安げに見やるも彼の

真意は計り知れなかった。
――ただ、ナイフを握る左手が一瞬青筋を立てた気がした。
「おぅ中国人（チャイニーズ）、そんな素敵なドレスで何をするっていうんだ？　Yシャツを着る時間くらいはやってもいいぜ。マザー・ピッドはなるべく体に傷はつけるなと言っていたからな」
「――ふたつ、言わせろ」
ヤオの声色は明らかに怒りと苛立ちを含んでいた。しかし頭の悪そうな男達はそれが意味することなど気づくはずもない。ヤオの要望に余裕を持って対応する。
「ああいいぜ、言ってみろ。レディの前だ、紳士的にな！　ジェントルメンだぜ、分かるか中国人？」
「まず、シャツを着てないのは寝てたからだ。ガキに興味はない。それと二つ目。――鼻だけ達者の豚野郎に抱かれるくらいなら圧搾機にでも入ってやるよ。お前等のボスに伝言だ、あの世で伝えろ。”ご自慢の鼻でトリュフでも探してるんだな”ってな」
――部屋がフラッシュした。
耳を穿つような銃声が立て続けに鳴り響く。少女は恐ろしくて頭を抱えていたため、その銃声が誰ものものなのか知ることはできない。ただ、人の倒れる音がいくつか聞こえた。
「……ンのクソ野郎！　お前等、やっちまえ！」
「――滾出（きえろ）去」
数人の男がトリガーを引く。
けたたましい銃声が鳴り響くも、硝煙の中にヤオの姿はない。薬莢（きょう）がカーペッドにバウンドして転がる。
――男達がハッとして足下に視線を落とした時にはもう遅く、膝がパックリと割れていた。ダガーナイフが男達の膝を薙（な）いだのだ。ヤオはしゃがみ込んだままダガーナイフを一振りして血糊を落とすと、そのまま両手を軸にして回し蹴りを喰らわせる。一瞬遅れて、糸の切れたマネキンが崩れるかのように、男達は床へと転がった。ヤオのかかとからチラリと光る刃先には赤黒い血がへばり付いてい

た。
「お、お、おい！　相手はひとりだろうが！　何やってんだてめぇらはよぉ！」
血を垂れ流すだけのマネキンとなった男達を踏み越えて、次の男達がヤオを捉える。そのうちひとりがショットガンを構えた。
「これで死んじまえよぉぉお！」
トリガーが引かれる。しかし粉々になったのは黒髪の中国人ではなく、首と膝頭を銀杏のように割られた哀れな男だった。血と肉片が部屋に飛び散り、天井まで赤く染めた。血の雨の中、ヤオの姿は無い。無鉄砲にトリガーを引き続けた男達のうちひとりが声ともとれないような小さい悲鳴を吐き出して銃を落とした。他の人間がそれを振り向くと、喉仏にクナイの刺さった体がガクガクと痙攣（けいれん）しながらだらしなく倒れ込む。
――ヤオの姿は、無い。
男達が一瞬たじろいだその時、すでに首と胴体は別れを告げていた。
部屋には十数人分の死体と、ガタガタと震えながら丸まっている少女と、奥歯をガチガチと鳴らしているリーダー格の男がいる。血と硝煙の臭い、そして鬱陶しいほど転がっている薬莢がオプションとして死体の海を彩っていた。
リーダー格の男は一歩後退し、怖じ気づいたのか情けない悲鳴と共に振り返る。そのまま走り去ろうとしたとき、額に何かが当たった。

SCRAP-9-

「最期の言葉くらい、聞いてやってもいいぞ？」
コツン、と音を立てて男の額に銃口がぶつかった。
その先には暗黒を携えた瞳と、その瞳を楽しげに歪ませている中国人の姿が。男は両手を顔の横まであげて降伏の意を示したが、ヤオが銃を降ろす気配は一向に感じられない。男は冷や汗を吹き続けたまま、苦笑いを浮かべるようにして言葉を吐いた。
「あ、あんた強ぇよ中国人！　なぁ、見逃してくれよ、な？　ガキはやるよ、あんたにやる！　なぁいいだろ？　頼むよぉ！」
男はへつらいながら捲し立てた。ヤオの眼力に気圧され、一歩一歩後ずさっていく。銃口はそれを追うようにして近づいていく。
ふとヤオは漆黒の瞳をより一層細め、整った口元を微かに吊り上げた。男は疑問を持ちこそすれ、その行動に何の言及も質問もしなかった。
怯えた小動物のような顔で必死に命を乞う。
「おれ達だってマザー・ピッドに言われただけなんだ！　あの変態の豚野郎に付いていくのだって嫌だったんだよぉお！　な、な？　頼むよ、この通りだ！」
男が目を見開いて「な？」と言いつけ加えると、ヤオは鼻で笑ってハンドガンを下げた。それだけではなく、ハンドガンとダガーナイフをベッドの上に放り投げる。男はそのふたつが美しい放射線を描いた過程を見届けると、理解できないものを見るような目つきでヤオを振り返る。
ヤオは空いた両手の平を肩口の横で上向きにして、やれやれと言うように肩をすくめた。
「太多口」
「――あ？」
男が頭の悪そうな顔でそう発音したが、それはすぐさま短い悲鳴

へと続いた。白目を向いて倒れたそのうなじにはクナイが深々と刺さり込んでいる。ヤオは絶望を凝縮したかのような死に顔を浮かべている体を一蹴りすると、自分の正面で息を切らしている少女を一瞥した。

「太多口（しゃべりすぎだ）。ガキに殺られているようじゃ形無しだな。――おいクソガキ、躊躇（ためら）いは見られたが及第点だ。景品にそのクナイはお前にやるよ。豚の所までたどり着けたなら、こいつみたいに首突き刺してやれ」

ヤオが男の首筋からクナイを引き抜いて少女に放り投げたとき、ボーイが銃声の収まったとみて恐る恐る部屋の前へと近づいてきた。血の池地獄と化している室内を見るが早いか悲鳴をあげて尻餅を付く。ヤオが彼を振り返ったときにはもう気絶でもしてしまいそうな勢いだった。

ボーイは尻餅を付いたまま後退し、廊下の壁へと突き当たる。涙を溜め、歯を鳴らし、全身が震えて恐怖を体現している。

ヤオはめんどくさそうに頭を掻くと、ベッドの傍らに置いてあったアタッシュケースから財布をとりだして分厚い紙幣の束をボーイに投げつけた。

「ここで見たことは一切口にするな。そしてお前も忘れろ。掃除もお前ひとりでやれ。――お前の名前は……ジャック、か。瀬戸際が似合いそうな名前だな。俺はこれから着替えたらすぐここを出る。お前がうまくやれ、いいな？」

ジャック、とネームプレートに書かれたボーイは一心不乱に頷いた。その手に札束を握りしめてはいるものの、表情は依然として恐怖に蹂躙（じゅうりん）されている。それもそのはず、黒髪の中国人は念を押す言葉に併せてボーイのこめかみに銃口を押しつけていたからだ。ごり、と骨と金属の摩擦する嫌な音が聞こえた。

「で、ではご用の際は私をご氏名ください……」

「ああ、言われなくてもそうするさ、ジャック。お前が妙な愛国心や正義感を持っている刑事とかじゃなくて良かった。――じゃあ頼

んだぞ」
ヤオはボーイのこめかみから銃を下げると一切の表情を断ち切ったまま部屋のドアを閉じる。
少女は依然としてクナイを持って立ちつくしたままだったが、ヤオに睨め付けられて逃げるように部屋の隅へと戻っていった。
部屋は数え切れないほどの死体と血臭。そしてヤオ自身相当な返り血を浴びている。つま先を数回床に打ち付けると、かろうじて無事なYシャツとスーツの上着を一瞥し、ため息をついてシャワールームへと入った。
しばらく沈黙が流れ、ザ、とシャワーの音がくぐもって部屋に流れる。少女は再び耳にするその音をBGM代わりにして手に持っているクナイをまじまじと見続けた。赤黒い血がこびり付いているが、それは得物らしくギラギラと光沢を放っている。見たこともない形の武器だった。東洋では一般的なのだろうか、などと考えながらも、女の腕で自由自在に操るには少し重量感があることを懸念していた。もう少し軽く、小さくて、投げたり刺したりするよりは、斬るほうがいい。かといってヤオが持っているダガーナイフはどう見ても重いだろうし、細針では扱いが難しい。
少女はしばらくの間クナイを様々な角度に向けながらほんの少しだけ顔をしかめていた。
「それが珍しいか」
ふと耳に入った声に、少女は面を上げた。
気づけばBGM代わりだったシャワーの音は止んでおり、ヤオの白肌を染め上げていた返り血も綺麗さっぱり無くなっていた。血の海を気にも留めず、ベッドに放られていたシャツに袖を通す。黒い革靴は赤い水滴がいくつも貼り付いていた。
少女は問いかけられた内容を反芻し、慌てて返答する。
「この剣……見たこと、無い。……珍しい」
「剣なんて大層なものでもない。日本で使われてた玩具の一種だ。女の暗殺者が使用していたらしいがな。――ま、それで誰かひとり

くらい刺し殺してボロ雑巾みたいに撃たれろ。俺は今から豚に引導を渡してくる。居場所が割れたならもう待つ必要も無いからな。金輪際お前とは関わらない。もちろん、邪魔をすれば殺す。お前が仇討ちに行くなら俺に迷惑がかからないようにやるんだな」

いつしかヤオは黒いスーツをかっちりと着込み、サイドテーブルに置いていたクナイや細針を全て仕舞い込んでいた。アタッシュケースを手に持ち、フロントへと電話をかける。少女はその間も部屋の隅に座りこんでいたが、ヤオは最早一瞥すらくれない。冷酷で残虐で、それでいて姿形だけは美しい暗殺者は、少女に別れの言葉ひとつ告げないまま血の海と化している部屋を後にした。

しばらくして、ジャックと書かれたネームプレートをつけているボーイが泣きそうな表情でドアを開けたとき、部屋の中に生きた人間は居なくなっていた。

SCRAP-10-

「――はい、こちらの場所が特定されたようなので今から再度任務に取り掛かります。ええ、公僕はおそらく居ないでしょう。……はい、では後ほど」

ヤオは仮面のような表情をそのままで携帯電話を閉じた。

黒い森の深くに、到底自然発生したとは思えない淫靡な匂いがする。木々の奥でくすぶっている仄かな灯りがさながら売春宿の電光めいていた。”表の世界　”であるのがあのくすぶっている灯りならば、鼻を掠める匂いの原因はさながら”裏のどぶ沼”と言ったところか。

近寄りたくないことに変わりはない。”裏”というのはどうにも物騒だからだ。

ヤオは生い茂る雑草を踏み荒らして匂いを辿った。館の場所は記憶していたが、わざわざ脳の引き出しを開けて情報を引きずり出すより匂いを辿った方が早かったからだ。

ホテルで襲撃を受けた。相手は自分の位置を知っている。だというのに奴らが暗闇に乗じて暗殺の真似事をしようとしないのは、何かしらの企みがあるからに違いない。

マザー・ピッドはＦＢＩやホワイトハウスにまで顔の利く男だが、率先して公僕の手を借りようとはしなかった。理由はひどく単純で変態的な――死体収集という目的があるからだ。”上手な死体の作り方”を心得ていない真っ当な人間をけしかけては、穴だらけのボロ雑巾が御前（ごぜん）に差し出されるだけだ。言わずもがな、マザー・ピッド直属の部下は”上手な死体の作り方”を心得ている。

――ホテルを襲撃したショットガンを持つような奴らが”直属”の部下だったのかは甚だ疑問ではあるが。

ヤオはつま先をトントン、と数回打ち付けた。肩を大きくまわし、腕の袖を引っ張る。スーツの襟を正し、手袋をしっかりとはめ直し

た。これらは全て道具の確認であり、戦闘準備に他ならない。
不作法な暗殺者もどきが一匹も出現しないまま、ヤオは館の豪奢(ごうしゃ)な扉を前にしていた。公僕は恐らくいない。――しかしマザー・ピッドは馬鹿でも間抜けでもない。暗殺者が再度訪れることくらいは理解しているだろう。その再訪をベッドの上に横たわって待っているわけはない。
だとすれば館は奈落そのものだ。扉を開け放てば銃口が丁重にお出迎えしてくれることだろう。
「……正面は、無理か」
ヤオは細工の美しい扉を人差し指で触れ、そして考え直したように指を離した。この重たい鉄の板を開けはなった時が最期、蜂の巣かはたまた穴あき頭か。扉の向こうに張っている連中が”やり方”を心得ていれば、額の風通しが良くなるだろう。
(脳漿(のうしょう)が垂れ流されたまま、豚のベッドへと直行か。――死んでもごめんだな)
ヤオは眉をひそめて顎を撫でると、何かを思いついたのか「ふむ」と呟く。右手にはハンドガンを握り、左手にはダガーナイフを。クナイも細針も全て仕込んである。大丈夫、抜かりはない。
ヤオは重苦しい扉を足で押し開けると、間髪入れずに走り出した。組織内で右に出るものはいない俊足で。
「客だぁあ！　お出迎えしてやんな野郎共ぉおぉ！」
銃声が飛び交う。扉はボツボツと穴が空き、豪華な装飾は跡形もない。狭くもないが広くもない廊下には溢れんばかりの人間と銃口。飛び散る薬莢、立ちこめる硝煙。
男達は目標物が蜂の巣になったことを確認すべく、一旦トリガーを引く指を休めた。頭を狙ったから体は無事だろう。そして、これだけの銃撃を受けて生きていられるはずもない。
目障りな硝煙が引いていくのを、固唾(かたず)を呑んで待っている。
「や、やったか……？」
「ベタな科白(せりふ)だな。――その言葉、小悪党が死ぬ前に口にする常套(じょうとう)

句だぞ」
――瞬間、廊下に敷き詰められていた人間の過半数が頽れた。まるで泥人形が波にさらわれてしまったかのように。その脳天にはクナイが深々と刺さり込んでいた。
呆然と立ちつくしている他のメンバーも銃弾や細針に額を穿たれて倒れていく。仲間が瞬く間にやられていく中、男達はその元凶を見つけだそうと必死だ。しかし廊下には影ひとつない。
「クソ！　どこにいやがるんだぁああ！」
男が咆吼をあげ、無鉄砲にトリガーを引き続けても手応えはない。獣じみた声と銃声は廊下に反響してとんでもない騒音と化したが、それも一発の銃弾によって静まった。銃弾はあるものの、銃声は聞こえない。
ふと、マシンガンを抱えた男が転がっている死体を見て共通点に気が付いた。弾痕も、クナイも細針も全て頭頂部ないし額に突き立てられている。
「――おめぇ等！　上だ、天井を撃てぇえぇえ！」
言葉として成立しているのか怪しいがなり声を皮切りに、生き残っている男達は必死に天井を穴あきにしていく。とにかく至る所に。そのうち天井が消えて無くなるんじゃないかと思うほど穴あきにしても、漆黒の暗殺者は現れない。血液の一滴もこぼさない。
男達は肩で息をしながら周囲と頭上を見渡したが、どこから飛んでくるのかも分からないクナイの餌食となるほか無かった。マシンガンの男は唇を食いちぎる勢いで噛みしめ、仲間が出来の悪い人形のように崩れていくのを見ているだけだった。
天井に銃弾の雨を打ち付けても鼠(ねずみ)はあぶり出せない。
気づけば、マシンガンの男はひとりで息を切らしていた。
辺りは一面血の海。そして弾痕の海。その上に死体が積み重なっていて、紛う事なき地獄絵図だ。
「とりあえず、廊下は陥落したな。数だけ集めればいいってもんでもない。おつむの温かい連中が何人いても弾の無駄遣いだ。ド変態

にそう伝えておけ」
「汚ねェぞアサシン！　隠れてねぇで出てこいよ！　びびってんのか！」
男が負け惜しみにも近い科白を高らかに叫び上げたとき、後頭部に鈍い音が走った。そのごり、という音は激しく上下していた男の双肩をいともたやすく制止させた。
「ひとつ、敵は必ずしも正面から来るとは限らない。ふたつ、暗殺者に汚いもクソもない。みっつ、お前は囮だ――」
直後火を吹いた数多の銃声が、男の体を虫食いにした。
しかし、やはり暗殺者の姿はない。両の壁は食いちぎられたかのように穴あきと化し、その薄っぺらい木壁を蹴破って大勢の男達が廊下へと現れる。
「ちっ……また居なくなりやがった！　この野郎、囮のクセに使えね――」
ひとりが忌々しげに無惨な死体を蹴り飛ばしたとき、”カチッ”という音が小さく聞こえた。
不吉な電子音が連続する。
男達がその音の正体に気づいたときにはもう遅く、館は大きく揺れる結果となった。ガラスは弾け、煙が居場所を失って外気に溶ける。
粗雑な鉄板と成り下がっていた扉は爆風に押し飛ばされて草の上で跳ね返った。ヤオはひどく開放的になった入り口から堂々と館内に足を進めた。

SCRAP-11-

「……それにしても多いな。さすが豚だ。公僕が居ないだけマシだが――」

ヤオは後ろを顧みないまま、脇の下を通して背後を撃ち抜く。

ドサッという音が遅れて聞こえた。

「まあ鬱陶しいのに変わりは無いか。金に釣られて死にに来るとは馬鹿な連中もいたもんだ」

よく掃除の行き届いた大理石の廊下をカツカツという靴音が通過していく。時折銃声と共に死体ができあがり、それは道しるべのように点々と連なっていた。館は静まりかえっているものの、銃を手に現れる連中は跡を絶たない。壁から天井から床から、男達は銃口を光らせては無惨に散った。

マザー・ピッドは狡猾(こうかつ)さだけは優秀だ。だからこんな計画性の欠片もない連中をけしかけただけで終わるはずもない。ヤオは銃弾の残数を懸念しながらも足を止めることはしなかった。

甘ったるい匂いがだんだんと近づいてくる。文字通りの豚箱がすぐそこにある証拠だった。ヤオは掠(かす)めるように通り過ぎた偏頭痛に額を押さえながら見覚えのある扉へと到達する。趣味の悪い装飾と色彩、そして閉められている扉の向こうから漂ってくる匂いはとある答えを示唆していた。――ここが、マザー・ピッドの部屋だという答えを。

ギィ、と鳴くように軋んだ扉の先には目に痛い色の照明と、天蓋付きのベッドがある。その上にバスローブ姿のマザー・ピッドが腰掛けており、他には誰も居なかった。

ヤオは特に銃を突き付けることもないまま部屋へと足を進めていく。マザー・ピッドは脂ぎった顔面をニヤニヤと歪ませてヤオを眺めやる。その視線は商品を見定めるそれに似ていた。

「おお、おお。よく戻ってくれたよ中国人(チャイニーズ)。ふひ、ふひひひ……あ

れだけかき集めた野郎達をいとも簡単に切り抜けてくるとは、さすがはＢＢクラブの構成員だぁ……。ひひ。この僕を暗殺するんだろぉー？　ふ、ふ、ふひひ……。その前に少し話をしようじゃないかぁ、ひひ」

マザー・ピッドは何がおかしいのか言葉の途中途中に耳障りな含み笑いを挟んでいた。

ぶよぶよの両手が嬉しそうに上下している。それに併せて腰掛けているベッドがギシギシと嫌らしい音を立てた。桃色の照明の中でもその薄気味悪さは変わらない。むしろ拍車をかけていた。煙たいほどの甘い匂いが鬱陶しい。

「悪いが金の交渉に興味はない。その話なら他をあたれ。ああ、それとな。その豚みたいな笑い方やめてくれないか。癇に障って仕方がない」

マザー・ピッドは一瞬だけあからさまな殺気と共にヤオを睨め付けたが、すぐさま汚らしい笑みと共に”無害”を装った声音を造り上げた。

チラチラとベッドの傍らにある香炉を気にかけては、分厚い唇を三日月型に吊り上げる。親指が連なっているかのような手で虚空を掴んでは放してを繰り返している。その一連の行動はどう見ても恐怖など感じては居ない、余裕のある人間の行動そのものだった。

「金は駄目か、そうかそうか。ところでなぁ、中国人。人間、嬉しいときには笑うもんだよぉー。僕は君が気に入ったんだぁ、ふひひ、ひひ。女の子が一番好きなんだけどなぁ、綺麗な顔の男も嫌いじゃないんだぁ、ひひ。数時間前だってさぁ、散々邪魔されて欲求不満なんだよぉー。あのお嬢ちゃんもいなくなっちゃったしさぁ。――ところで、つい数時間前に暗殺されかけて、同じ轍を踏むと思うのかぁ？　ひひ、ひひひひ！　俺ァそこまで間抜けじゃねぇんだよぉおおおぉぉおお！」

――マザー・ピッドが憎々しげに吐き出した刹那、ヤオの体が膝から崩れた。

銃声はない。ヤオの体に外傷もない。それでも、漆黒の暗殺者は目を見開いたまま床に倒れ込んだ。うまく呼吸ができないのか息が荒い。咳き込んでは荒く呼吸をして酸素を取り込もうと必死だ。
マザー・ピッドは力無く横たわるヤオを引きずりベッドまで連れてこさせると、馬乗りになって額に銃を突き付けた。ごり、と嬲るように幾度も擦りつける。
割れた唇からは笑いが漏れだしていて、より一層気持ちが悪い。
「俺をなめんじゃねぇぞぉぉ、中国人！　散々やらかしてくれやがってよぉぉ！　俺が何でサツ呼ばなかったか分かるか？　分からねぇよなぁあ！　こうなることを確信していたからだよぉおお、ふひひ、ひひ！　面目ねぇなあぁぁ！　ＢＢクラブもこんなヤツおいてるんじゃどうしようもねぇなあ！　ひひ、お前、組織内でも最弱なんじゃねぇのかあ！」
ヤオは真っ直ぐにマザー・ピッドを見続けていた。痙攣（けいれん）している唇を力尽くで動かし言葉を紡ぐ。
「――お前……どこまで知っている」
「どこまで？　どこまでだぁ？　ＢＢクラブには最弱の中国人がいるってことくらいだよ！　ひひ、お前の死体でも送りつけたら幹部の連中はどんな顔をするかなぁぁ？　ふひひ！　でも俺アジトなんて知らねぇしなあぁぁ！　お前はバラすにしても不健康そうだしなぁ、ふひひ、ホルマリン漬けにして飾ってやろうかぁ？　たまには遊んで――」
――マザー・ピッドが嬉々として喋り続けていた時、先ほどまで苦しげに発せられていた荒い呼吸音が突然止んだ。いやらしく逆さ三日月に歪んでいたマザー・ピッドの両目は訝しげに下へと泳ぐ。
その時、不健康そうな隈（うが）（くま）を一穿った黒の目が、恐ろしいほど見開かれているのを目の当たりにしてしまった。
整った唇は、吸血鬼のように吊り上がっていた。
直後、ゴッという鈍い音が部屋に響く。
「あ？　何だぁ今の音」

「本当にお前等みたいなクズには呆れかえる」
マザー・ピッドが低くドスの利いた声に反応して再度銃で牽制しようとしたが、それは叶わなかった。
視界に銃が映ってはいなかったのだ。
踏み敷いている暗殺者はくつくつと喉を鳴らして笑うが決して楽しげではない。むしろこの世の全ての憎悪を一身に集めたかのような――まるで悪魔のような笑みで狼狽する男を眺めていた。
「お、おい、なんだこれ。銃はどこだ。おい」
脂汗でじっとりと濡れた肥満体が一心不乱に辺りを見回している。ヤオはその重苦しい体重圧から抜け出すと、床に転がっていた”何か”を拾いあげて、言った。
「お探しのものはこれか？　ほら、やるよ」
美しい弧を描いてぶよぶよの両手へと放られたのは、肉厚の人差し指とそれに引っかかっている銃だった。
「ふ、ふふ、へ、へへへ！　なんだぁ、なんだよぉこれはあああぁぁぁ！　そもそも何でお前動けるんだよぉぉおお！　なんでだぁあああ！」
「毒の類なんて生まれたときにはすでに克服させられた。俺はお前から情報を聞き出せるなら聞き出せと言われていた。だからくだらない芝居を打った。だがまあお前は空っぽの豚……あー、いや、殺す価値も無いクズだって事が分かった。そしてクソ重いのに馬乗りにされた上に耳障りな笑い声をステレオで聞かされて苛ついている。ああ、言ってしまえばキレる寸前だ。――臭せぇんだよ、クソ豚野郎」
ヤオが未だ見開かれた両の目をそのままにして銃口を向けたとき、マザー・ピッドは勝ち誇ったような笑みと共にけたたましい咆吼をあげた。

SCRAP-12-

「ふひ、ふひひぃ、ひひひひひ！　こ、こいつを見やがれぇぇぇ！」

未だ健在である左腕がベッドの影から引きずり出したのは、紛れもない白いワンピースの少女本人だった。相当な暴行を受けたようで、幼さを残した顔は痛々しく腫れ上がっている。髪を掴みあげられて痛がっているところを見ると生きてはいるようだ。

白い肥満体は少女を抱え込むようにして左腕で拘束すると、細い首を締め上げた。

「お前の大事なガキだよぉお！　殺せるか？　殺せないだろう！ふひ、ふひひぃ！　分かったならそこをどけよぉお！」

マザー・ピッドは少女の耳元であることも厭(いと)わずに噛みつくようにがなった。

ヤオはその間、自身のハンドガンを眺めては鬱陶しそうに口元を歪ませている。その目は先ほどから比べれば落ち着いたものの、未だに獣の如く見開かれていた。少女が涙を浮かべて何か言いたげにしていても、一瞥もくれようとはしない。無論、マザー・ピッドの要求を呑んでその場から立ち去ろうともしない。

「だから言っただろう、豚はそれなりに頭がいいってな。まあここまで生きていられたので十分だ。よくやった。偉いぞ」

――少女は、ヤオのこめかみに見覚えのある青筋が走っているのを確認してしまった。

しかしマザー・ピッドはそんなものに一切の興味を示そうとしない。むしろヤオが少女を褒めたことにより一層喜びの意を示した。

「偉いか、そうだろうよなぁ。このお嬢ちゃんは俺を殺しに来た可愛らしい暗殺者なんだよぉ……ふひひ、だから生かしておいたのさぁ。お前が拾いにくるのを期待してなぁ！　そしたら案の定だ。まさかお嬢ちゃんとお前がお仲間だったとは驚きだったよぉお…。』

あの人は仲間を裏切らない。必ず助けに来る』たぁ……美しい信頼関係――」

鋭い銃声が部屋を穿った。

少女は激痛に短い悲鳴をあげ、にやけ顔の肥満体は何が起こったのか全く理解できないといった顔を無様にさらしている。ヤオのハンドガンは何のためらいもなく少女の肩口をえぐって肥満体の鎖骨に穴を空けた。

マザー・ピッドは憎々しげにヤオを睨み付けると、吐き出すように言葉を紡ぐ。

「ど、どういうことだぁああ！　何で撃つんだよぉぉ！」

「なるほど……なるほど、なるほど？　裏の裏の裏…の裏だったか、を考えろと言ったな。確かにそうだ。俺を利用するとは予想外だよクソガキ。とことん見下げ果てた利己主義精神だが……悪くない。さて、次はどうする？　豚の腕でも切り落とすのか？」

マザー・ピッドはわなわなと怒りに震え上がり、ついには激昂(げっこう)して少女を突き飛ばした。

バスローブの内から小型のハンドガンを取り出すと、それをヤオに向ける。しかし銃口の捉えた場所に黒い暗殺者の姿など無く、視界の片隅に倒れ込んだ少女がいるだけだ。少女は唐突に起きあがってマザー・ピッドへと向かっていったが、少女の細いからだが巨漢の力に勝るわけもなく、再度突き飛ばされて床に転がった。

マザー・ピッドはそれこそ豚のように鼻息を荒くして少女の上に乗りかかる。抵抗する少女を幾度と無く殴りつけると、胸ぐらを掴んで体を起こさせ、銃をこめかみに突き付けた。

「ふひー……ふひー……てめぇなあぁ……お、お、俺を騙したのかよぉぉ……」

少女は骨が摩擦する音に顔を歪ませながらも、毅然とした態度で拙(つたな)い英語を並べた。しかしそれは最初にここへ連れてこられた時よりもずっと、”英語らしい”英語だった。

「お前も……先生も……私たち騙す、した……！　私の友達……た

くさんいなくなった！」
「売り物の孤児風情がいっちょまえな口きくなよぉ……ふ、ふひー……ふひー……お前等は俺を楽しませて金になりゃあいいんだよぉおお！」
マザー・ピッドは少女の鼻先に噛みつくようにして怒鳴った。しかし少女は泣きもしないし怯えもしない。肥満体は、少女の殴られて腫れ上がった右腕がスカートの中で何かを探っていることすら気づかなかった。どこか変な方向に曲がっている右腕はゆっくりと、決して悟られないように、血のこびり付いたクナイを握る。
「私は……お前許す、無い……許さない！」
「どう許さないって言うんだよぉぉおお！　このクソガキ――」
マザー・ピッドの動きがピタリと静止した。
少女の握りしめているクナイは肥満体の脇腹に深々と刺さり込んでいる。細い指は皮膚を突き破りそうなほど握りしめられており、爪は白い肌に食い込んでいた。少女はクナイを抜こうとはしなかった。
「ふ、ふふひー……ふ、ふひぃ……てめぇ……」
マザー・ピッドはしばらく硬直していたが、突然少女をギョロリと睨み付けて銃の柄で殴りつけた。
少女の額は割れ、血が流れる。痛みに顔を歪ませて小さく呻くも、マザー・ピッドの腕は止まらない。幾度と無く少女を殴りつける。荒い呼吸と共に腹部の刺し傷から血が噴き出した。しかし肥満体であることがこんな所で幸運をもたらし、マザー・ピッドは相当量の血液を流していながらも意識を失う兆しは見られなかった。
「死ねぇ……死ねぇ……！　クソガキィイイイ！」
少女は霞んでいく視界の中、鬼のような形相をした肥満体が自分を殴りつけていることしか確認できずにいる。大きく出た腹に未だ刺さっているクナイをもう一度差し込もうなどと思いつく余裕すら無かった。胸ぐらを掴まれ、倒れ込まないよう固定されて幾度と無く殴りつけられる。少女の真っ赤な視界に漆黒の暗殺者は存在しな

い。
少女は、ふとこのまま死ぬんだろうと思い立った。売られて、ひどい目に遭って、暗殺者に殺されかけて、今度は変態に殺されかけている。こんなにも痛くて、辛くて、泣きたいのに、助けてくれる人なんて居ないのだと。――そう、助けてくれやしないのだ。
悲しげに微笑んだ顔は黒い髪に覆われて影となった。少女はまるで水仙のようにカクンと首を俯(うつむ)かせて動かない。殴られようが揺さぶられようが、ガクガクと力無く項垂れるだけだ。
マザー・ピッドがとうとう苛立ちトリガーに指をかけたとき、今度こそ動きが停止した。
空を穿つ鋭い銃声と共に。
マザー・ピッドの背後には、ハンドガンを手にした漆黒の暗殺者が薄く笑って立っていた。
「もろとも撃ち抜くつもりだったんだが、どうにも運がいいんだな、お前は。まあクソガキにしてはよくやったんじゃないのか」
――マザー・ピッドの額は、向こう側が確認できるほど風通しが良くなっていた。汚らしい血液は少女を頭上から汚したが、少女本人はそのことに気づいているかどうか。ヤオの感情を一切打ち消した賞讃の言葉を耳にするやいなや、細く小さな体は糸が切れたように床へと倒れ込んでしまった。
ヤオは切れ長の目でそれを眺める。
ふと、何かに駆られたのか手にしているハンドガンで少女を捉えた。横たわっている少女の隣には汚らしい死に顔をさらしているマザー・ピッドの姿が。ヤオは躊躇(ためら)うこともないままトリガーを引いた。
――ガチッ。
……しかし、銃声は無かった。虚しい音が響き渡るだけで、少女は依然小さく息をしている。どこにも穴など空いていない。

ヤオはため息と共にハンドガンを仕舞い込むと、部屋を立ち去る際に一言を付け加えた。
「末恐ろしい強運だな。お前がそのまま出血多量で豚と心中するも良し。生き残るも良しだ。――もし生きてられたなら、前言っていたように暗殺者にでもなれ。じゃあな」
ヤオが完全に部屋から姿を消したとき、少女の細指がピクッと動いた。

SCRAP-13-

「――以上です。銃弾を余計に消費してしまったのが悔やまれてなりません」
漆黒の暗殺者は言葉とは裏腹に一切の表情を掻き消した声で事の顛末を報告する。
モニター以外に何も無い部屋は薄暗く、金属的な冷たさも孕んでいた。唯一の光源ともとれるそのモニターすら、砂嵐しか映し出してはいない。しかしヤオはその砂嵐を熱心に眺めて唇を動かし続けた。返答は、いやに電子的な音声が室内に反響するという形をとった。
「それでもあの男を始末できたのなら大いな功績だよ、ヤオ君。君でなければできない仕事だった。多少の消耗は仕方のないことだ。――そうそう、ヤオ君、ひとつ伝えておきたいことがある」
「……と、申しますと――」
全てを言い終える前に、ヤオは銃を背後に向けた。まるで肉食獣のような眼光で”無作法な侵入者”を捉える。
その侵入者の正体を確認するが早いか大層忌々しげに舌打ちをした。先ほどまで無表情を貫き通していた綺麗な顔は、異常なほど不快気に歪んでいる。整った唇はまるで地獄の怨嗟でも吐き出すかのように恨み言を述べた。
「何をしていると尋ねることすら馬鹿馬鹿しい……本当に厄日だ。おふざけを通り越して笑えそうだよ」
ドアの目の前で真新しいスーツの裾を両手で握りしめている侵入者は、バツが悪そうに俯いていた。　ヤオは砂嵐のモニターに噛みつくように不平不満を並べ立てようとしたが、電子音めいた音声はまるでその行動を先読みしていたかのように声をかぶせる。
「先ほど君が大層鬱陶しそうに報告していた”少女”だよ、ヤオ君。彼女は君に言われて暗殺者になることを決めたそうだ。なかなか見

所のある子じゃないか。――ほら、大先輩にご挨拶してみなさい」
「あ、えと、その、シャルロッテ＝アーベルです……。あの、その、えと、よろしくお願いです……」
少女は拙(つたな)いながらも文章として成立する英語を唇に浮かべて挨拶した。怯えているのか緊張しているのか、俯きながら裾を握りしめていることに変化はない。
ヤオはとうとう不快極まりないといった表情で少女を睨め付けると、そのまま上下関係も忘れ去ってモニターまで睨み付けた。蛇のような目が微かに殺気立っている。
「これは笑えない冗談です。こんなガキが暗殺者になれるわけもありません。弾の無駄です」
「そう言ってやるな、ヤオ君。可愛らしい新入りじゃないか。ローラ君など跳んで喜んでいたぞ」
蛇の目が細められる。黒い革手袋がギリギリと音立てるほどに拳が握りしめられている。
「あいつはただ単に女の後輩が欲しいだけです。俺は違う。――おいクソガキ、さっさと帰れ。俺は暗殺者にでもなれとは言ったが、俺の前に姿を現せとは言っていない」
「えと、えと、その……あの、これからよろしくお願いです。ヤ、ヤオ……？」
少女が不安げに面を上げた瞬間、漆黒の暗殺者は整った顔をめちゃくちゃになるほど引きつらせ、目つきの悪い両の瞳を微かに見開いていた。最早声を発することもしないまま大股に部屋を出て、ひどく乱暴に扉を閉める。
鉄製で防音処理の為されている重たい扉であったが、まるでベニヤ板が叩きつけられるようにもの凄い音をたてて閉められた。
少女が泣きそうな顔でモニターを仰ぐと、電子音は僅かに笑い声を含みながら言う。
「ヤオ君は恐ろしく冷酷で、仕事に一切の私情を挟まない。その上武器や銃弾の消耗にひどくこだわる。そんな彼が君に”クナイ”を

あげたのはとても珍しいことだ。まあ見ての通りの性格だが、悪く思わないでくれ。――ＢＢクラブへようこそ、シャルロッテ＝アーベル」

――砂嵐を流していたモニターは、一瞬の電子音と共に暗黒へと変貌した。薄暗い鏡と化したモニターに、包帯まみれの少女が映っている。少女はかっちりとスーツを着込んではいるが、やはりどこか幼い雰囲気がした。

――彼にはまだまだほど遠い。まだまだ追いつけそうもない。

……でも、彼の後ろを歩んでいける。

少女は懐（ふところ）にしまっていたクナイを黒革の手袋越しにそっと取り出して手の平にのせた。少し眺め、少し微笑むと、大事そうに仕舞い込んで部屋を出た。

SODDEN TIGER-1-

「――と、言うわけなのよ。だからよろしくね、シャロ……あー、シャンちゃん」

褐色の肌と漆黒の巻き髪を豪奢（ごうしゃ）に携えた女が、未だ年若い、スーツも満足に着こなせない少女にはにかんだ。淡い青色のルージュを引いた長身の女は、その東洋の顔立ちを、緊張している少女に向けてはニコニコとしている。まるでなってない少女のスーツと違って、多少型を崩しながらもきっちりと着込まれている漆黒のスーツが女の凛々しさに拍車をかけている。

少女は電灯の明るい一室で、先輩にあたるその女に多少怯えてすらいたのだ。

「あ、はい、あの……英語あまり得意でないです……あ、あの、よろしく……よろしくお願いします。――ローラさん」

「英語が苦手なのは仕方がないわ。私だってインドからコッチ来たときは全然だったわよ。おいおい覚えていきましょう？　ね？　シャロ……あー、駄目ね。どうしても間違っちゃうわ。シャンちゃん……シャンちゃん、シャンちゃん。あの鉄仮面ったらめんどくさいんだから。――あ、私のことはローラでいいのよ」

「あ、はい……えっと、ありがとうございます、ローラ」

少女――シャンが拙（つたな）いながら言語として成立している英語を小さい唇に並べ立てているのを見て、ローラはまるで妹を見る姉のような眼差しでシャンを見ている。

少女は当初、シャルロッテという名前から”シャロン”という愛称で呼ばれるはずだった。孤児院でもその愛称で親しまれていたし、呼びやすくかわいげがあるということでローラには大変好まれた。しかし、それはある1人のほぼ命令のような不満によって変更せざるを得なかった。

「何が『シャロンはやめろ、何か知らないが胸くそ悪い』よ。まっ

たく何様なのかしら。あんな人間凶器と一日一緒にいたなんて、よく生きていられたわ、シャンちゃん」
「えと、3回ほど殺されそうになりました」
「やっぱり……まったく血も涙もないのね、あの鉄仮面は。血管に水銀でも通っているんじゃないのかしら」
ローラは整った眉をひそめ、顔をしかめ、腕を組んでため息をした。
話題にのぼっている”鉄仮面”がこの部屋を去ったのはつい先ほどのことだ。いつもと変わらない仏頂面と不健康そうな目でシャンを睨み付け、その存在を心底疎ましく思っている、そんなオーラを惜しげもなく垂れ流しにしていたのだ。ローラはとくに気負いすることもなくシャンとの親睦を深めていた。その過程で愛称の話となり、シャンはかつて友人に呼ばれていたものを口にした。ローラがじゃあそれで、と決めてしまおうとしたとき、”鉄仮面”は一切躊躇わずにそれを拒否した。そして場の空気が整うことすら待たずに「お前はシャンだ、短くていい。俺が呼ぶことは無いがな」と嫌みたっぷりに口にしたのだ。ローラが中国語のニュアンスを含んでいることについて言及してみると、とんでもない目つきと殺気を放って言葉をひねり出した。「こんなのが同じ民族であってたまるか」と。”鉄仮面”はそのまま部屋を立ち去った。
「シャンちゃんも男見る目は養わなきゃだめよ！　あれは絶対に駄目だわ、本当にもう、駄目なんて言葉で言い表せない。シャンちゃんにはもっと紳士的で包容力のある年上の男がいいと思うわ。ふふ、もう孤児院に捕らわれることもないんだし、好きな人ができるといいわね」
「あ、はい、あの、まだよく分からないですけど、そうしたいです。――あ、あの、私のことはシャン、でいいです」
「あらそう？　ならそうするわね。――ところで貴女、得意な武器……というか使いたいものってあるかしら？　一応その人の適正とかでも判断されるのだけれど、本人の意思が一番尊重されるわ。私

はスナイパーライフルを武器にしてるの。まあ小型銃も携帯しているけど、私は遠くからの狙撃が得意なの。貴女は……体が小さいし、まだ慣れていないから小型銃から始めてみる？　基本的には使用武器を登録しなくちゃならないわ。まあ結構別のモノを隠し持つ人も多いのだけど……さっき部屋を出ていった”鉄仮面”さんとか、ね。知ってるでしょ？　至る所に針やら小さい刃物やらを仕込んでいるわ。もう全身凶器よ。なのに彼、ハンドガンしか登録していないのよ。お仕事をなめてかかっているわね、確実に」

淡い空色のルージュがへの字に歪む。艶やかで美しい顔立ちが困ったように眉をひそめている。黒いマニキュアの塗られた指先で顎を撫でると、困り果てているシャンをみてクスリ、とした。ローラは頭上からシャンの黒髪が美しい頭を優しく撫でる。2人は相当な身長差があるので、撫でると言うよりは手を置く、といった感じだ。シャンは為す術無くからかわれるままとなっていた。

「まあ、あんまり怖がらなくていいわ。あんな生粋の殺人狂は組織内探しても彼ぐらいだもの。――さて、武器の話だったわね。とは言ってもシャンは銃の種類なんてあんまり分からないわよね……。今から訓練場で試し撃ちしてみる？」

「あ、あの……」

依然としてぽふぽふと頭頂部で遊ばれている少女は、大層困ったような顔で言いづらそうに切り出した。

「その、ヤオの使っているハンドガンは……何というものですか……？」

ローラの、鳩の豆鉄砲を喰らったような顔が冷凍保存でもされたかのように固まった。半開きの唇は艶やかな淡い青色のルージュが引かれているが、それすら体温の低下からくる生理的な変色に見えてしまう。パチッと電灯が瞬いてもローラは復活しそうもなかった。

「あ、あの、いきなり、ごめんなさい……」

「シャン？　一応聞くけど熱があるワケじゃないのよね？　何か拾い食いでもしたの？　もしかして悩みとかあるの？　話ならいくら

でも聞くわ、何でも言って。――そうでないのなら、申し訳ないのだけど単刀直入に言うわ。……正気？」
「え、あ、はい。――正気、です」
泣きそうな少女の顔は黒く絹のような前髪に覆われていく。細い顎は次第に次第に首へと近づいていった。まるで様になっていないスーツの裾をぎゅっと握りしめ、口は堅く閉ざしている。スーツの裾部分がいやによれていることから、少女は困ると大抵裾を握るのだな、とローラは分析していた。――そして、それどころじゃない！　と我に返った。

SODDEN TIGER-2-

褐色肌の女はため息をついた後に少女を近くの長椅子に腰掛けるよう促す。少女は大人しくそれに従い、女もそれに続いた。

「とりあえず質問に答えると、ヤオの使っている銃はデザートイーグルよ。とにかく火力が欲しいみたいね。細い腕のくせに済ました顔して片手で扱っているわ。あれは、そうね。確かに威力は凄いけれど、女の子……それも慣れていない子が扱えるものじゃないわ。あとね、決して否定するつもりじゃないのだけれど、貴女どうしてそんなにヤオにこだわるの？　ストックホルム症候群みたいなモノ？」

「あ、えっと、恋愛感情とかそういうのじゃないんです。ただ、追いつきたくて……一応”師匠”みたいなものなので……」

シャドウの乗った瞼を落とすと、巻き髪の美女は悩ましげなため息をつく。シャンのスーツはいよいよもってしわくちゃの域にまで差し掛かろうとしていた。ローラはとりあえず裾を掴むのをやめさせると、顔に困ったと書いてあるかように色っぽい唇を開く。

「私も、一時は彼の有能ぶりに憧れたわ。ヤオは私の一世代分後輩にあたるの。でも力量なんて比べモノにならないわ。古参というわけではないのに、圧倒的な技術力とカリスマ性で一気に頭角を現したの、彼。……ＢＢクラブには”階級”というものが存在しないの。個人的な先輩後輩……今の貴女とヤオみたいな関係ね、そういうのはあるのだけれど、肩書きとしての階級は無いわ。ただ仕事の重大さや難易度には多少格差があるの。幹部は私たちのデータを知り尽くしているから、与える任務は今までの功績や能力によって振り分けられるわ。そのことを踏まえて順位をつけるなら、ヤオは文句なしに組織のＮｏ．１ね。まあ納得いっていない人もいるみたいだけど。――えっと、まあ、そういうことなのよ。だから憧れる気持ちは分かるわ。でも走りすぎるのは良くないわよ？　貴女はとりあえ

ず今自分に合っている道を選びなさい。命を賭した仕事だもの、慎重でなければならないわ」
俯くシャンの背中にそっと手を置くと、髪で覆われてしまっている表情を確認するように覗き込む。覗き込んだところでベールのように漆黒の影を落としている前髪のせいで、シャンの表情は一切確認できない。ローラはシャンの小さな肩を抱き寄せると、元気づけようと一生懸命に話を進めた。電灯がパチッと瞬く。
「気を落とすことないわよ、シャン。少しずつ、少しずつ追いついていけばいいの。努力する者は救われるわ。きちんと訓練をして、小さな仕事からこなしていきなさい。ヤオも実力をつければ認めてくれるわ」
「……ローラ、実は私……取り返しのつかないことをしてしまったんです」
シャンはまたもやスーツの裾をしわくちゃにしていた。前歯で小さな唇を強く噛みしめると、まるで泣くのを我慢しているかのように掠れた声を発する。
「ヤオが仕事を……私を買い取った男を殺そうとした時、私邪魔してしまったんです。その時は私、首輪をされていて、あの、鍵が見つからないのは困ったんです。あの、でも、その、目の前で人が殺されるの、びっくりしてしまって。ヤオはそのことをずっと怒っているみたいで、あの、どうしたらいいのかと……」
「あらら……それは本当に取り返しのつかないことをやっちゃったわね。彼はね、何よりも仕事が大事なのよ。殺すことに命をかけているわ。私はあまり、そういうの好きじゃないんだけど、ね。――だから、仕事の妨げになるものが嫌いなの、彼は。でも、そこまで重症ではないと思うわよ？　彼が本気で怒っているのなら、迷わず殺しているわ。そうねぇ、シャンはヤオに認めてもらいたいのね？
じゃあやっぱり力をつけるしかないかもしれないわね。私としてはゆっくり確実に訓練していって欲しいのだけれど……」
それ以上、言葉は出なかった。

ローラは敢(あ)えて何も言及しなかったが、シャンの中に”憧れ”だけでは収まらない感情がふつふつとしてきているのでは、ということを懸念していた。ヤオは確かに姿形の美しい男だ。彼に恋愛感情を抱いた女をローラは片手では数え切れないほど記憶しているし、その女達の”末路”も克明に記憶している。見てくれに騙された女達は外見以外を見ようとしなかった。それが死因となった。キラキラと輝く中にはとんでもない暗黒が蠢いていて、それを漆黒の瞳が窓の代わりとなって示している。窓を覗けば気づいたはずだ。その男が人間などという殻をとうの昔に捨て置いてきた、ということに。

だからこそ、シャンに同じ末路を歩ませたくはなかった。老婆心であることは気づいているが、それでも可愛い後輩に悲惨な末路を辿らせたくはなかったのだ。ローラは一瞬だけ表情を固く整えると、すぐさま朗(ほが)らかな笑みとともにシャンを慰めた。

「ほらほら、落ち込まないの！　可愛い顔が泣いていたり前髪で隠れたりしていたらもったいないわ。――今日はまだ教官が決定していないから、訓練もないわね。私も今晩はお仕事がないから真っ直ぐ帰れるわ。シャンは孤児院の出だからまだ住むところも決まっていないでしょ？　なら私のマンションに居るといいわ。女の子をひとりでアジトの仮眠室に置き去りにするわけにいかないもの。そうと決まればお祝いね！　お洋服とか色々買って帰りましょう！」

ローラの提案に、俯いていた頭が少し表を向いた。誰かと一緒に帰る、というごく当たり前のことを、少女は生まれて一度も経験したことがなかったのだ。そのとてつもなく心躍る言葉に、高鳴る心臓すら抑えられなかった。ローラはそれこそ姉のように微笑むとシャンの背中を数回叩く。

「今日から家族よ、か・ぞ・く！　どう？　素敵でしょ？」

今度こそ、シャンは弾けたように面を上げて少女らしい無垢な笑みを顔一杯に携えた。スーツがしわくちゃなのに代わりはないが、裾を掴んでいた両手は喜びのあまり胸の前でがっちりと組まれている。それこそ神にでも祈るように。

「は、はい！　あ、あ、あの、迷惑じゃないですか？」
「やーね、そんなこと気にすることじゃないわよ？　ほら、そうと決まれば行きましょう。――あ、その前に武器登録をしなければいけないわね。どうしようかしら……」
「あ、あの、私すぐ行って終わらせてくるので、待っててもらえますか？　すぐ終わらせますから！」
「すぐって貴女、一応訓練はその武器で行うんだから、そんなにすぐ決めちゃ……」
「大丈夫です、あの、もう決まりました！　えと、あの、すぐ戻りますから！」
シャンはそう言うが早いかウサギのように跳ねながら部屋を出ていった。その初々しいスーツの後ろ姿は嬉々とした雰囲気を惜しげもなく示している。電灯が不安定な部屋の中、ローラは焦らすように閉じていく扉を眺めている。――家族という単語を一番恋しがる時期なのだ。こんな仕事に就いてしまったことが悔やまれるが、もう他に道がないのならあの子が苦しまないように勤めたい。――ローラは本物の姉にでもなった気分で、微笑みと共にため息をついた。

SODDEN TIGER - 3 -

やかましいだみ声が廊下に響く。
角を曲がった先で誰かがぎゃあぎゃあと吼えていた。それこそ犬のように。コツコツという足音はこのまま進めばその”現場”に出くわすことを示している。それでもヤオは足を止める、という選択肢を思い浮かべすらしなかった。ちょうど角を曲がろうとした時、突然飛び出してきた誰かとぶつかったがそれきりだ。――しかし、その”それきり”は多少ヤオの眉間に皺(しわ)を寄せた。もともと腹など煮えくりすぎて爛れかけているのだ。胃薬が欲しいところだが何錠飲んだところで治ることはない。むしろ頭痛薬が欲しい。
先ほどまでだみ声が響いていた廊下は恐ろしいほど静かだった。今しがたぶつかって走り去っていった誰かがだみ声の対象となっていたのか、それとも声の主本人か。特に興味もないまま、漆黒の男は角を曲がった。そして走り去った誰かは声の発生源ではないことを知った。訓練場へと続く扉の前で、見るのも暑苦しい大男が怒りに顔を歪ませているのを発見してしまったからだ。
大男はヤオの姿を確認するが早いか、鬼のような形相でヤオを睨め付けた。上唇がめくれあがるような勢いだ。憎悪というものの表し方をよく心得ているようだった。
「ンだよ、豚の始末に手こずってたんじゃねぇのか」
まさに噛みつくような一言は、人気無い廊下にはよく響いた。大男は生来声が大きいようなのでなおさらだ。対してヤオは心底鬱陶しそうに返答した。
「もう終わった……。――顔をあわせるなり食らいつくのはやめろ。ただでさえ見ていて暑苦しいんだよ、お前」
「食らいつくだけじゃねぇよ。食いちぎってやってもいいんだぜ、この蛇野郎」
ヤオは大きなため息を――それこそ何年分かの鬱憤(うっぷん)を吐き出すか

のようなものを――ついた。残念そうに首を振ると腕を組んで壁にもたれ掛かる。大男は歯ぎしりの音を響かせてギラギラとした視線をヤオに向けていた。視線にも雰囲気にも、殺気は余すところなく含まれている。

「俺はお前を許さねぇ、絶対にだ。分かるか？　絶対に、だ。――この際豚の玩具になってたほうがよかったんじゃねぇのか？　女みたいな顔して組織のトップたぁ笑わせる。それとも刺されるのはできねぇってか？」

卑猥な揶揄（やゆ）は、ヤオの眉間に二割り増しくらい皺を寄せた。

黒手袋をはめた手がスーツを軽く握りしめている。表情こそ鉄仮面だが、体の節々に不快感の表れが露見していた。こんなんだから腹が爛れそうになるんだ、とヤオは内心舌打ちをした。

「その上ガキ連れて帰ってきたんだってな！　数々の女をボロ雑巾みてぇな穴あきにしてきた男はなんと幼女嗜好だったってわけだ！　お前に殺られた女どもも浮かばれねぇなぁ。呪い殺されるんじゃねぇのか、お前」

「――ワディム。噛みつくならサンドバックにでも牙を立てろ」

空気が、凝固した。

ピリピリとした空気はあからさまな殺気を包含しており、まさに一触即発と言った様相だ。大男――ワディムはわなわなと怒りに震え上がっているし、ヤオもまた瞳の奥にドス黒い何かを孕んでいる。その手がいつハンドガンを掴んでもおかしくはなかった。

「てめぇ――」

ガン、と耳に痛い破壊音が廊下に響く。ワディムが壁を力一杯殴ったのだ。コンクリートでできた壁を防護するかのように張り巡らされた鉄製の薄壁が見事にへこんでいた。

「その偉そうな態度、大概にしやがれ……。実力だけで全てまかなえると思うなよ。世の中には頭を使うところだってあるんだ。てめぇみたいな殺人狂には理解できないだろうがな！」

がなり声がやはり耳に痛い。しかしヤオは変わらず涼しい顔で下

等な者を見るような目つきをワディムに向けていた。一切相手にしていない、といった表情だがワディムはあまり気づいていないようだ。むしろ気づいているからこそ食ってかかるのか。どちらにせよ、ヤオのポーカーフェイスがじわじわと溶け出しているのは間違いない。

「殺せるものがありゃあ何だっていいんだよ、てめぇはよ！　てめぇみたいなのを純粋に慕っていた馬鹿な女共……それすら表情ひとつ変えずにぶち殺したじゃねぇか――」

「お前は何故さっきから女共の話を持ち出す？　想い人でもいたのか。――ならば聞くがな、俺達は暗殺者だ。殺して金を貰う。返り血の分だけ報酬になる。そんなクソみたいな仕事をしてて殺しを否定する方が狂ってるんじゃないのか。そんなんだからお前、あんな馬鹿な企てをしたんだよ」

ぴしゃり、と言い捨てた一言は的を射ていた。残酷なほど、射ていた。ワディムは耳まで真っ赤にして憤怒を体現していたが、やはりヤオはそんなものになど見向きもしないのだ。むしろ鼻で笑って小馬鹿にしているような節さえある。ポーカーフェイスが溶け出して出てきたものは、残酷な微笑みを湛(たた)える整った顔でしかなかった。

「ほざくなよ、ヤオ。てめぇと俺は同期だ、それを忘れるんじゃねぇ」

「確かに同期だ。それと同時に教官と訓練生という間柄でもあるだろう？　――ああ、確かに俺はお前に何も教えてやれなかったな、ワディム。残念だよ、本当に残念だ。まさか訓練生が訓練を放棄して謀(はかりごと)を企てるなんて思いもしなかった。何なら今からもう一度銃の使い方を教えてやってもいいぞ？」

再度、鉄の薄壁が激しい音と共にへこんだ――もとい、穴が空いた。

ワディムは荒々しい獣のように喉を鳴らして今にもヤオへと飛びかかりそうだ。怒りに肩が震え、歯がガチガチと音立てている。屈

められた腰は飛び上がるための予備動作か。吐く息は最早獅子のそれと似ていた。むき出しの歯は狼のそれと似ていた。睨め付ける目は”虎”そのものだった。
「生粋の殺人鬼だかなんだか知らねぇがな、てめぇみたいのは生きてちゃならねぇんだ……。世の中のためにならねぇよ。――このクズ野郎」
ヤオが、ため息をつく。
「ワディム。お前……――あーいや、悪かったな、悪かったよ。お前のお友達を惨殺し、お前のクズみたいなプライドを地べたにたたき落とし、あまつさえお前の想い人をボロ雑巾にたいな穴あきにした。悪かった、許してくれ。……どうだ、気が済んだか？　済んだなら通してくれ、俺は帰りたいんだ」
「この外道がああああぁああああ！」
ワディムが尋常ならざる咆吼と共に地面を蹴る。壁に穴を空けていた右の手はまるで岩のような拳を造り上げており、それは躊躇（ちゅうちょ）無くヤオに降りかかろうとしていた。一方、壁にもたれ掛かって腕を組んでいた漆黒の男は軽くため息をつくと気だるげに体を正す。目の前にまで拳が迫っているというのに大層な余裕ぶりである。ワディムの拳がヤオの頭蓋を破壊しようとした刹那、ヤオの姿は消失した。
「おいおい、仮にも暗殺者だろう？　ごり押しを戦法としてようがある程度の速度は持っていた方がいい。――ほら、こうやって背後をとられる」
ワディムは拳を振り下ろした状態で止まっていた。嚥下すら満足にできない状況下に、自ら飛び込んでしまったことを悟った。まるで蛇の胃袋に迷い込んだかのようだ。喉仏の皮膚一枚隔てた所にはダガーナイフが、後頭部には銃口の冷たい感触が。息を切らして肩を上下させている被捕食者と、恐らく蛇の目を細めてほくそ笑んでいるであろう捕食者。そういった構図が一瞬のうちに成り立ってしまったのだ。――これが暗殺組織、ＢＢクラブのトップたる力量だ

った。
「殺すのかよ、やるならやれ」
「吼えるようになったな、ワディム。あの時『殺さないでくれ』と縋(すが)った命だ、大事にした方がいいとは思うぞ？　今日の俺はいたく機嫌が悪い。そりゃあもうお前如きを殺しても腹の足しにすらならないほど、な。機嫌が悪すぎて楽しくなってきたんだ。お前のおかげだよ、ワディム」
　ダガーナイフと銃がワディムから離される。直立不動だった大男は気づけばびっしょりと冷や汗をかいていた。ヤオは一瞬冷笑を浮かべると、やはりポーカーフェイスのまま廊下を歩いていく。それこそもう興味が無いというように。ワディムは咄嗟に振り返ってヤオの背中に吼(うた)く。
「いつか……いつか殺してやるからな！　殺してやるぞ、蛇野郎！」
　廊下に虚しく響き渡る負け惜しみめいた怒声に、”蛇野郎”は左手を肩越しにひらひらさせて、振り向かないまま闇に吸い込まれていった。

SODDEN TIGER - 4 -

「さて、二三尋ねたいのだが宜しいか？　まず”取り逃がした”少女(レディ)についてだ」

妙に清潔感のある部屋に紅茶の芳香が充満していた。

赤茶色のソファーに深々と腰掛けあくまでも紳士的に脚を組んでいる男は、薄く貼り付いた笑みをそのままに声音だけを低く保つ。片眼鏡(モノクル)の奥には澄んだ海色の瞳が冷酷な光を湛えていた。

男の向かい――もとい足下には、見るも無惨な人間の形がある。紳士的な男とは対象に趣味の悪いシャツとレザーパンツを着ていたのだろうが、それはもう跡形もないほどボロボロだ。所々血が滲んだり煤(すす)けたりしている。片目は腫れ上がっており、鼻血も垂れ流しになっている。肩で息をするその男はひどく上擦った声で質問に答えた。

「あ、あ、あのガキはオーストリアの孤児院から買い取ったんだ！　マザー・ピッドは今までも何度か買っていたんだ、それで今回も同じように……！　あのド変態は死体が好きなんだ、だから殺すまでは何もしないでおいたんだ！　そしたらっ……！」

狂ったように狼狽(ろうばい)する様を、海色の瞳は哀れむように見ていた。顎(あご)で部下に指示を出すと半泣きの男が「ひぃっ」と悲鳴にもつかない声をあげる。数人の屈強な部下が暴れる男を取り押さえて床に潰す。到底抵抗など出来やしない状況下だが、男の口は休む間もなく命乞いを繰り返していた。部下達は男の右腕をピンと伸ばさせるとそのままの状態で固定する。

「私は下賤(げせん)な屍体嗜好者(ネクロフィリア)の話を聞きたいのではないのだよ。分かるかね？　私はその少女が我々の情報を手にしているのか、ということを尋ねている」

片眼鏡の男はおもむろに立ち上がるとヒキガエルのように潰されている男の、許しを乞う表情に片眉を上げた。口元が一瞬だけ忌々

しげに歪められたが、すぐさま元のきゅっと閉じられた凛々しい唇へと戻る。腕を組み右足を勿体ぶってピンと伸ばされた右腕の上にかざした。男の制止も聞かぬ内に肘の関節を踏みつける。

ごり、と嫌な音がした。

「ちょ、ちょっと待ってくれえええぇぇぇ！　言う、言うから、許してくれぇえ！　ガキは多分何も知らねぇ！　他のガキは殺されちまったから知ってても問題はねぇ！　本当だ、本当だよぉおお！」

「そうか。ならば暗殺に赴(おもむ)いたという組織の構成員について話して頂けるか？」

「へっへ、へ、蛇みたいな目つきの黒スーツの男だ！　名前は知らねぇが東洋人だ、東洋人！　あいつのせいで俺たちはほとんど全滅したんだぁあ！　そ、そいつもアンタの事は知らねぇよ、本当だ！　マザー・ピッドもきっと言ってねぇ！　だから大丈夫だ、信じてくれ！」

――バキ、と鈍く音がした。

片眼鏡の男は何の躊躇もなくピンと伸ばされた右腕を関節から蹴り飛ばした。衝撃とあってはならない力の負荷に男の関節は悲鳴をあげ、そして折れた。出来の悪いマリオネットよろしく奇妙に曲がってしまった右腕が虚しい。

「ひ、ひっ、ひっ、ひぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「お前の話口調はどうも気に入らない。ああ、癇に障る。蛇一匹にやられたのはお前達の過失だろう。害虫駆除もできないとは愚かしい。――お前達のせいで、我々はいらぬ苦労をかけられている。このことが何を意味するのか、分かっていないわけもあるまい？」

「ミ、ミ、ミスタ・ベイリアル！　話が違う……！　ちゃんと質問に答えりゃあ殺しはしねぇって！」

片眼鏡の男――ベイリアルは憐憫(れんびん)の意を含んで肩をすくめる。そして言った。

「お前は我々の存在を知ってしまっただろう？　ならば生きては帰れまいよ。だが……ふむ、確かに殺しはしないと言ったかもしれな

いな。なるほど、そうまでして生き延びたいか。生き汚いのもまた人の性(さが)……。いいだろう、お前の命拾ってやる」

ベイリアルはそう吐き捨てるとデスクへ足を運んだ。小さめの電話に乗っている受話器を取り上げると何やらパチパチとナンバーを打ち込んでいく。右腕が異様な方向へと曲がっている男は嬉々とした表情でそれを見ていたが、受話器から漏れているコール音が重なるたびに不安感が頭をもたげていた。7度目のコール音、それが微かに聞き取れた直後、相手方の受話器が親機から引き離される音を聞いた。

ベイリアルは腹に一物ある、といった表情で聞き取りやすい英語を並べ立てた。

「ああ、私だ。あの仕事はまだ残っているか？　……ああ、まあそうだろうな。やりたがる者などいない。……ああそうだ。丁度いい人材が手に入った。何でも”生きたい”ようだ。……ああ、大抵の人間は最初そう言っていたものだよ。ん？　そうだよく気づいたな、マザー・ピッドの部下だった男……そう、男だ。彼は気に入るだろう？　マザー・ピッドはまだ少女に興味があるだけマシだった。……ああ、ロハで構わない。ではな」

SODDEN TIGER - 5 -

ガチャ、という音は男の思考を再稼働させるのに一役買った。ぼんやりと開いていた瞳孔を唐突に収縮させると唾を飛ばして捲し立てる。その様子にベイリアルは片耳を塞いで不快感を露わにしたが、男はお構いなしだ。

「ま、待ってくれ！　何だよ今の電話はよぉおお！　助けてくれるんじゃないのかよぉおおお！」

「だから命は拾うと言っただろう。何か問題でもお有りか？　生き汚いのならば汚らしく生き延びてくれたまえ。――君は我々が一体何なのか知っていて命を乞うたのだろう？　我々は利益の追求と障害物の蹂躙（じゅうりん）がビジネスの……マフィアなのだよ？　君のような下等生物を何の得も無しに逃がすと思ったのかね」

片眼鏡の奥で海色の瞳に暗黒が灯った。英国紳士そのものといった風貌だが背負っている威圧感は相当なものだ。デスクの縁に左手を置き、それを軸のように体の重心を預けている。そこにあるのは紛れもない「大幹部」の姿だった。

暇を持てあましている右手で顎を触れる。伏し目がちに何やら思案しているようだったが、自身の危険を知り吼え続ける男の怒声がベイリアルの眉間に皺を寄せた。

「な、なぁ！　頼むよ、俺は何にも言わねぇ！　本当だ、本当だよ！　俺は――ぎゃっ！」

まるで指揮でも執るかのようにしなやかな動きで、英国紳士は部下に無言で指示を出した。宙にふわりと浮いて沈んでいく右腕が奇妙な美しさを孕んでいる。まるで一陣の風にさらわれた白布のようだ。しかしそんな美しい風体を賛美する間もなく獣じみた悲鳴は部屋を埋めた。

男の左腕もまた、人体として有り得ない方向へと曲がっていたのだ。

「ひぎゃあああ！　あぁあぁぁぁぁあ！　ぎゃあああ！」
上から押さえつけていた男達がいなくなったので、両腕があべこべの哀れな男はごろごろと床の上を転がっては家具にぶつかって悶えていた。ベイリアルはひどく気分が悪そうな顔をしてその様子を眺めやったが、しばらくすると飽き足りてしまったようである。上等な革靴の音を澄ませて騒がしい男へと近づく。いつまでも止むこと無い横転を鬱陶しげに見下し、そして狙いを見定めて踏み付けた。蒼白の顔面を胴体と接続している筋張った首筋を。
男は息苦しいのか咳き込んだ後に震え始める。ベイリアルは一切の温度を持たない瞳でそれを見続ける。
「お前は仮にもマザー・ピッドの部下だったのではないのかね。あの汚らしい男……それに仕えていたお前もまた救いようなどあるはずもない。せいぜい色欲に溺れるくらいしか能がないのだろう？見境が無いというのはとても愚かだ。分かるかね、ｓｔｕｐｉｄ（愚か者）」
グッと足裏に力が込められる。男は顔面蒼白な上冷や汗を滝のように流して英国紳士を仰ぎ見ているが、忌々しい蛍光灯が彼の表情を逆光の中に埋めてしまっている。塗りつぶしでもしたかのようなシルエットがこちらを見下ろしている、それくらいしか確認できるものはなかった。
「あー……いや、気が変わった。生き汚いのもまた一興なのかと思っていたが、これ以上私の統治下に埃を増やしたくはない。ふむ、人間らしい尊厳を抱いて死ねるのだ。良かったのではないかね？」
「ま、まって――」
――ゴキ、ン。
とてもじゃないが言葉で言い表せない恐怖を顔面一杯に湛えた首は、接合部分に支障をきたしてだらしなく横を向いた。英国紳士はその見るも無惨な人型を憎々しげに蹴り飛ばすと、部下に始末するよう命じる。屈強な男達は顔色ひとつ変えないまま作業に取り掛かった。

綺麗に整えられていたはずの金髪がやや乱れていた。細く白い指で何事もなかったかのように額にかかった一房を整えると、海色の瞳を細めて何処を見るわけでもなく視線を宙に置いた。若くもないが初老と呼ぶには早すぎる顔立ちは、やはり英国紳士と呼ぶに相応しい。

「……例の孤児院も潮時だな。商品のうまい利用法は無いものか」

オフィスに似た部屋の中に、スーツを鋳型に嵌めたように着こなす男達が直立している。首領（ベイリアル）のぼやきに反応するわけでもなく、マネキンのように立ちつくしているだけだ。形式張った空気の中、散漫した紅茶の香りが未だに鼻を掠める。それ以上に血臭が鼻を刺した。

「我々が始末してしまっては商売にならん。誰か一度に全て買い取ってくれるような者が……うん？　そう言えば、マザー・ピッドの元へと売却した少女は逃げおおせた後にどうなったのだ？　戸籍がない彼女に住まう場所や仕事など見つかるとは思えん。――その少女の所在を調べろ」

「――は」

恭しく一礼したスーツの男達は、次々に部屋を後にしていった。

もし勘が正しければ、少女は組織に加入した可能性がある。その少女をゆするのは難しいにしても、組織の内情を知り得るのならば儲けものだ。もしそこに”毒花の芽”が生えていたのなら水をやって育ててしまえばいい。組織は内部から崩壊させることが一番てっとり早いのだ。ましてや暗殺組織などという反道徳的な集団など、はっきりとした統率がとれるはずもない。

ベイリアルは海色の目を伏し目がちに、口元には微かな冷笑を湛えていた。

SODDEN TIGER - 6 -

シャンはいたく感動していた。

まず目的地が”家”であること、そして一緒に帰る人がいるということ、しかし一番感動したのは何と言っても”スーパーマーケット”の広さだ。色々な食材が並べられ、沢山人が居る。美味しそうなものが溢れかえっている。その上なんと自分で選んで購入するというのだ。ああ、アメリカとは本当に自由の国なんだ。シャンは瞳を潤ませつつ一生懸命ローラの背後にくっついていた。時折人混みに呑まれたり、ワゴンと盛大にぶつかったりもして恥ずかしい思いもした。ローラはラフな私服だが、シャンは着る服がないのでスーツのままだったのだ。年若い娘のよれたスーツ姿は、落ち着かない挙動と相まって相当目立った。

ローラ曰く、本日購入するものは食料と服と生活用品一式のようだ。お金は気にしないで、と言われているもののやはり後ろめたい。まだ出会って数日もたたない人に全てを払わせてしまうのは、長い間世間から隔離されていたシャンでもよくないことだと理解し得た。

「あ、あのローラ？　やっぱり全て払って貰うのは悪いですし……その、」

シャンは口ごもった。様子を伺うように面をあげる。今まで俯いていたことにすら気がつかなかった。最早癖のようになっている。気をつけなければ――少女がそう自身を諌(いさ)めて顔をあげた瞬間、きょとんとする他の選択肢はなかった。

ローラが、居ない。

数秒間微動だにせず人混みの中立ちつくしていたが、ハッとして辺りを見回してみる。人は沢山居るのに目的の人物は見当たらない。欧米系の顔が右往左往している中、インド人らしく小麦色に焼けた肌はすぐ見つけられそうなものだが……。しかしローラは見当たらない。スーパー内を小走りに一周してみたがやはり居ない。少々息

の上がっているシャンの姿を見て、穏やかな顔つきの中年女が微笑んだり若い男が声をかけてきたりした。しかしそんなものに構っても居られなかった。

ふと、”家”などと言う存在は夢物語でしかなかったのではないかと考えついてしまった。いつもならば首を横に振って霧散させるところだが、ローラの失踪がその考えを妙にリアルなものへと昇華させてしまっている。シャンはどうしようもないまま彷徨(うろつ)くしか術を持っていない。

ふと、肩に誰かの手が乗った。

「ごめんなさい、見失っちゃったの。不安だった？　本当にごめんね、シャン」

振り返れば太陽のような褐色肌が微笑んでいる。シャンは一瞬眩しいものでも見るかのようにぼんやりと目を細め、また俯いてしまった。悪い癖だ。しかし情けなくもひどく狼狽(うろた)えていた自分を恥じて、視線を合わせることが叶わなかった。頭頂部に降りかかる穏やかな声はクスッと笑うと背中を支えてくれた。

「人が多いといけないわね……本当に、いけないわ。――ああそうそう、お買い物だったわね！　シャンは何が好きかしら？　お洋服も沢山買わなくちゃ！　お酒は飲めるの？　ジュースにしたほうがいいかしら。甘いモノは好き？」

俯いていた少女は手当たり次第に質問を投げかけてくるローラに辟易しながら一生懸命返答していた。好きな食べ物はグラタンで、お酒は未成年なので飲めません。甘いモノは大好物です、と順を追って答えを返す。しかしシャンの努力も虚しく、買い物かごには到底ひとりでは飲みきれないであろう数のアルコール缶が並んでいた。その後もローラはグラタンの材料やらよく分からない薬のようなモノ――サプリメントと言うらしい――やらペットボトルの飲み物やらを買い物かごに放り込んだ。とくに目も当てられないほど詰め込まれたのが甘味の類で、ダイエットなどには縁の無かったシャンが「これは危険だ」と本能的に感じ取ったほどだ。かごは溢れかえっ

ていた。
「次は服かしら……。シャンは好みのファッションとかはあるのかしら？　どう？　どう？」
　ローラの目はいやにキラキラしていて、あからさまに「無い」という返答を期待しているようだった。シャンは本当に好みのファッションは無かったし、嘘をついてもどうしようもないので期待通り返答した。
「あの、ありません」
「本当？　じゃあ私がシャンに似合いそうなモノを選んじゃうわよ？」
「あ、えと、はい。お願いします」
　ローラは心底嬉しそうだ。当初手に持っていた買い物かごはいつしかカートの下段へと押しやられ、上段には笑い事では済まされない量の服が積まれていく。チラリと見えたタグプレートには凍り付くような数字が記されていて、シャンは一気に血の気が失せた。しかし止めに入る隙もないほどにあれよこれよと衣類を放り込んでいるローラに声をかけることすらできないでいた。

SODDEN TIGER-7-

――選別が終了したのは、上段がちょっとの振動で雪崩のように崩れてしまうほど山積みになった時だった。
「あの、ちょっと買いすぎでは……」
「いーのよぅ！　シャンは可愛いんだから、女の子らしい服を着ないと！　どうやってコーディネートするか腕がなるわ」
シャンはもう発する言葉すら失った。レジでは尋常でない時間を食ってしまい、その上会計のケタが震え上がるようなものになってしまっていた。しかしローラは顔色ひとつ変えないままプラスチック製のカードを差しだし、会計はそれで終わってしまった。シャンはあのカードのどこから札束が出てくるのか疑問に思ったが、きっと”若輩者が知ってはいけないこと”なのだと悟って尋ねはしなかった。せっかちな自動ドアを抜けると眩い灯りは背に周り、星空が頭上を染めている。
「あの、ありがとうございます。ローラ」
「ふふ、いいのよ。どう？　組織ではうまくやっていけそうかしら？　ああ、あの鉄仮面は置いておいて、他に何かあったりした？」
「あ……はい、あの、実は……」
身長差の激しい２つの影は、莫大な買い物袋を引っさげて街路を歩いていく。追い立てられているかのような速度で走り抜ける車や雑踏の音が少し耳に触るが、それ抜きに考えればいい夜だ。シャンは極力俯かないよう努めて、今日あった奇妙な出来事をローラに語り始めた。
「あの、えと、ワディム……さん？　という方にいきなり怒鳴られてしまいました。何でも『あんな野郎にへつらって何が楽しいんだ、このカマトト女が』と言われたので、”カマトト”とは何ですか、と聞いたんです。そしたら『お前みたいな女のことだ。組織のトップだと知って媚び売ってるんだろう。あの男、いつか殺してやる』

と言っていました。私、あの、よく分からなくて……何か言ってはいけないことを言ってしまったんでしょうか……」
「ああ、彼ねぇ。彼、ちょっと過去にヤオと一悶着(ひともんちゃく)あったのよ……。それからというもの、ヤオに対する敵対心、反発心は凄まじいわ。まったく、シャンは関係ないじゃないの……」
　気づけば街路に人気は完全に無くなっていて、自己主張の激しい看板の灯りもすました淡い光へと移ろいでいる。耳に心地よい靴音が2つ、闇夜に吸い込まれていった。ローラの小さなため息さえはっきりと聞き取れる静けさだ。
「組織内は交流こそ少ないけど信頼は大事だわ。ワディムはそれを根っから壊してまわるから、幹部も困り顔なのよ。結構機械にも詳しくてね。意外とそういう器用なところも――」
　足音がひとつ減った。遅れてもう片方の足音も止まった。シャンはローラを振り返る。
　シャンは訝(いぶか)しげにローラを眺めたが、その表情は今までの穏やかなそれとはうって変わって”仕事の顔”といった風貌だった。ローラは強ばったままの表情でシャンに「絶対にここで動かないでじっとしていて」と強く言いつけると、荷物を地面に置き、ショルダーバッグから通常より一回り小さい――ように見える――銃を手にした。
　背後――シャンが視線を向けている方向へ銃口を合わせると、低く凛々しい声で闇夜に忠告する。
「スーパーでもこそこそ嗅ぎ回っていたわね、貴方達。目的は何かしら？　返答次第では額の風通しが良くなるわよ」
　返答は、無い。どうやら角から様子を伺っているようである。
　ローラは銃口を大きく下げると、2メートルほど先の地面へ照準を合わせる。躊躇うことなくトリガーを引き絞ると、銀色に闇夜を翔る銃弾が地面で跳ねて角の向こう側ギリギリへ着弾したようだった。短い悲鳴が聞こえたので恐らく間違いない。
「やっぱりその辺に居たのね。……さあどうするの？　出てくるの

？　それとも適当に撃たれる方がお好みかしら？」
　ざわっと空気が騒いだ気がした。それは気のせいだったのかもしれないが、角の向こうでなにやら小さい話し声が聞こえるのは聞き間違いではない。途端、話し声は慌ただしい足音と変わり、それは段々と消え失せていった。
「逃げた……か。何だったのかしら。一般人だったならいいんだけど、何か面倒なことにならなければいいわね。――あ、ごめんなさい、シャン。スーパーの時、あなたがつけられていることに気がついてこっそり様子を伺っていたの。驚かせて申し訳ないわ」
「あ、いえ、大丈夫です。私全然気づかなくて」
「仕方がないわ。大抵の人間は以外に気がつかないものなのよ。――あ、えっとワディムの話だったかしら？　ちょっとややこしいからマンションに着いてからでいい？」
「はい」
　ローラがにっこりと微笑んだのが暗がりの中に確認できた。

SODDEN TIGER - 8 -

――焼いたチーズの匂いが鼻を掠めては幸福な気分になった。
シャンは豪華なマンションの４階にあるローラの部屋に通され、手を洗って夕食の準備を手伝っている最中なのだ。可愛いくまがプリントされたエプロンが小恥ずかしいが文句も言えない。ちなみにエプロンの下はフリルのついたチュニックと、その下にレースの綺麗なレギンスをはいている。ローラが部屋に着くやいなや買い物袋から引っ張り出して着るように言ったものだ。始めて着る可愛らしい格好に、シャン自身少し照れくさいものを感じていた。ちなみに、着替えた後ローラが異常なほどハイテンションになったのは言うまでもない。
「あとはテーブルに持っていくだけね。熱いから気をつけて」
鍋掴みの上からでも、その高温は感じ取れる。長時間掴んでいると本当に熱いので短時間の内にテーブルへ運ぶ必要があった。パタパタと急いで往来している様を見て、ローラは笑いをかみ殺している。シャンは何故笑われているのか分からないまま、グラタンを運ぶことに全力を投じた。
テーブルにつくと、ローラは缶チューハイを、シャンはジュースをグラスについで食前の挨拶を交わした。全部が全部新鮮なことであり、シャンはそわそわしたり辺りを見回したりと落ち着きがない。全て孤児院では体験したことのないものばかりだ。好物だったグラタンも、今まで口にした何よりも美味しいものだった。
「美味しくできてよかったわ。あーあーそんなに急いで食べて」
フォークの動きが止まらず、唇が熱いと訴えても手が勝手にグラタンを運んでしまう。涙目になったり火傷しかけて焦ったりと散々だ。ローラは面白そうにその様子を観察している。
ふっとローラの瞼が落ち、茶色の瞳が伏し目がちになった。
「そう言えばワディムの話が途中だったわね。――彼はね、ヤオと

同期なのよ。基本的に同期というのは珍しいんだけれど、ヤオとワディムは示し合わせたかのように同じタイミングで組織に入ったの。シャンが近々つけてもらえるように、新入りには教官がつくわ。その教官の下で色々と学ぶのだけれど……。その、ワディムの教官はヤオだったの」

フォークを運ぶ右手がピタリと静止した。

チューハイ缶をぶら下げてその手を頬杖としているローラは、”記憶”が放映されているテレビでも見ているかのように視線を固定している。しかしその先にあるのはただの壁だ。

「えと、だって同期ということは、ヤオも新入りでは無いんですか？」

「そうよ。ヤオも本当なら教官の下で訓練を受けるはずだったの。なのに上はヤオの訓練過程を免除するどころかいきなり教官に抜擢……。これにはワディムはもちろん他の構成員も納得がいかなかったわ。――特にワディムは相当頭に来たみたいで、上の言うことも聞かずに訓練を拒否したの。「俺は訓練なんかなくとも仕事ができる」って言って、ね。それで何かやらかしたみたいなの。私……というか大抵の人間は途中過程を知らないわ。ただ結末はこう。ワディムがかつてつるんでいた仲間達を引き連れてヤオを暗殺……というより公に殺そうとしたみたいなの。それをアジト内でやろうとしたのが間違いだったのよ。ただ醜態を晒すだけになったんだから……。断末魔が聞こえるものだから、その時アジトに居た人間は一目散にかけつけたわ。――もう一面血の海よ。ワディム以外の人間は人として形を保ってすらいなかったわ。本当は部外者をアジトに入れれば問答無用で処罰ものなのだけれど、ワディムは罪に問われなかったの。この辺のごたごたはよく分からないわね」

褐色の肌が缶を人差し指と親ぶら下げて数回まわす。水の跳ねる音が聞こえ、遅れてローラのため息も聞こえた。

「ワディムが呼んだお友達はね、３０人を超えていたのよ。これだけの人数をどうやってアジトに入れたのかがまず疑問なんだけど、

ヤオがそれだけの数をひとりで片づけたほうが衝撃だったわ。私も、他の構成員も、ヤオの実力を認めざる得なかったの。しかも彼、その時所持していた武器はダガーナイフだけだったのよ」

「ヤオはどうして新入りなのにそんな力があったんですか？」

「それは未だに公になっていないの……。ただ中国人、ナイフ、あの目つき……。もしかしたら彼は元々暗殺訓練を受けていたのかもしれないわね。これは私の憶測でしかないのだけれど。――中国には孤児を集めてそういった教育をする機関が存在するらしいの。ほら、中国って変な政策やってるでしょ？　一人っ子政策？　それのせいで孤児がたくさんでちゃうのよ。正確に言えば捨てられちゃった闇っ子が、ね」

”孤児”という単語を耳にして、シャンは僅かながら表情を硬くした。

未だにあの監獄のような場所で毎日を送っている仲間がいるのだと、思い出してしまったからだ。

――先生はいい人だった。

しかしその日常は決して幸福では無かった。お金が無くて、生活はだんだんと苦しくなっていく。外に出ることは許されない。だからシャンには”帰る”という概念がなかったのだ。孤児達は、ずっと鉄格子の窓から空を眺めては粗末なパンをかじって過ごした。クリスマスにだけグラタンとケーキが振る舞われ、孤児達はそれを大層楽しみにしていた。

――しかし、そんなささやかな幸せすら”餌”でしかなかったのだとシャンは知ってしまった。貧しいが温かかったあの場所は、ベリベリと剥がせば汚物と金にまみれたどす黒い何かでしかなかった。

SODDEN TIGER-9-

シャンはフォークをグラタン皿の縁に置き、グラスに注がれたジュースに口を付ける。その白っぽい飲み物は甘かったが正体が分からなかった。再度フォークを握っても先ほどまでの勢いは完全に失せ、義務的に”食料”を口へ運ぶだけとなっていた。

ローラは頬を薄く赤らめて憐憫(れんびん)の視線をシャンへと向ける。

「あ……ごめんなさい、あまり思い出したくない話だったわね」

「いえ、いいんです。ただ友達が今でも辛い思いをしているのが耐えられなくて……暗殺者になろうとしているのに、私は友達すら救えないです」

「……確かに訓練すれば力はつくかもしれないわね。でも暗殺者になった以上、”無意味な殺し”はしてはいけないの。だからそのお友達を救うために孤児院の元締めを殺したくても、依頼がなければ殺せないわ。残酷な話だけど……ね。でも買い手を始末することも大事なことだわ。マザー・ピッドを殺したことだって、お友達を救うことに役立っているのよ?」

シャンは小さく頷く。しかし影の落ちた表情は変わらない。いつしかフォークの動きも完全に止まってしまっていた。

「ごめんなさい、ローラ。空気を悪くしてしまって」

「何言ってるのよ、そんなこと気にするんじゃないの！　貴女はまだ新入りなんだし、これから色々知って、色々考えていけばいいわ。きっと沢山の壁に突き当たると思うけれど、それを乗り越えて成長があるの」

眩しいほどの微笑みに、影の落ちた表情が雪解けのように和らいだ。しかしその状況はけたたましいコール音により打破される。まるでマンション全域に聞こえ渡っているのではないかと思うほど大きな音だ。ローラは苦笑いに併せて右手で「ごめんね」のジェスチャーをすると受話器を取って耳に当てた。途端、瞼(まぶた)が少しだけ”不

快そうに”落ちた。
「もう、何なのよ、こんな時間に。……私だって好きこのんで電話受けたワケじゃないわよ。いいから用件は……え？　あ、ええ、居るわ。ええ、そう、しばらくは私のマンションで一緒に暮らそうと……え？　伝えるって何を……はぁ？　ちょっと待って、そんな……黙れって、黙ってられるわけないでしょ！　何でシャンの教官が……ちょっと！　ヤオ！」
電話は一方的に切られたようだ。ローラは受話器を耳から離して、大層困り果てた顔でそれを見つめている。しばらくして諦めたかのように受話器を戻すとシャンを振り返って電話の内容を伝え――ようとした。しかし口ごもった。
「あ、あのねシャン。その……」
「私の教官が決まったんですか？」
「そ、そうなの！　あの、それでね……」
「ヤオだったんですか？」
場が、凍った。
ローラは体ごとため息をつくと腰に手を置いて呆れたと言わんばかりの口調で詳細を説明した。――加えて不平不満も並べ立てた。
「何でも上がヤオを正式に指名したんですって。面識があるのなら教えやすいだろうとか何とか理由つけてね。有り得ないわ。もっと良識があって教えるのもうまい人だって沢山いるのよ。なのにどーしてヤオになっちゃうのかしら！　上の連中はシャンを殺す気なの？　私の時だってまだ――」
捲し立てられていた不平不満は、まるで壁にぶつかったかのように止まってしまった。褐色の人差し指が口元を押さえる。視線は右下付近に置かれているが焦点は合っていない。”タブー”に触れてしまった人間がとる行動そのものだ。
シャンはそのことを理解し、追求しようとはしなかった。
「あ、えっと、そういうことなのよ……。だから、十分に気をつけてね、シャン。『できなかったら殺す』って平気で言うような男だ

から。命の危険を感じたら遠慮無く言ってね、私が訓練見てあげるから」
「あ、はい、ありがとうございます。何とか頑張ってみます――あ！」
空を穿つが如く勢いで発せられた声は、盲点を突かれて飛び出したかのような雰囲気だった。小さな右手で口元を覆い、一生懸命に両目を見開いて顔を青くする。ローラが訝しげにその様子を見ている。シャンの黒目は落ち尽きなく泳ぎだした。
「どうかしたの？」
「い、いえ、何でもありません。本当に」
そう取り繕うも、シャンの狼狽（うろた）えぶりは見ていられないほどだ。
シャンは最悪の人物が教官にあたってしまったことを知った。シャンの感じている”最悪”とはローラの言うそれとは少し違う。シャンは実のところ、武器登録においてデザートイーグルと書いてしまったのだ。不可抗力であったにせよ、登録事項に変わりはない。訓練は例外なく登録された武器で行う。もちろん、ヤオと同じハンドガンで、だ。
シャンはこの夜が一生続いて明日が来なければどんなに良いかと思い立ち、そして首を横に振った。珍しく否定的なニュアンスの首振りだった。

SODDEN TIGER-10-

「お、いらっしゃいお嬢ちゃん！　師匠はまだ到着してねぇぜ！」
鬱陶しいほど明朗な声が少女のどんよりとした空気を打破――するはずもなかった。シャンはやつれ気味の顔で訓練場の主に一礼すると、諦めたような苦笑いを浮かべる。髭面の男はシャンの様子など目もくれず、ガハハと笑い飛ばして銃を一挺カウンターに置いた。ゴトッという聞き覚えのある音がさらに少女を憂鬱にさせる。手にすればずっしりと重く、それがまたどうしようもない。

昨日、シャンは当初ローラの忠告も忘れてこの銃を登録しようとしていた。そしていざ本物を手にしてみると本当に重かった。とてもじゃないが自分の力では扱えないと悟り別の銃にしようと決めた。だというのに訓練場の主はもじゃもじゃの顔面をにやつかせながら言い放ったのだ。耳を疑うような一言を。
「お嬢ちゃん、ヤオの娘なんだって？　やっぱそいつ使うのもお父さんの影響か？」
シャンは失礼と知りつつも思わず「はい？」と口にしてしまった。突っ込みたい所が多すぎる上に頭が混乱してしまって言葉がうまく出なかったのだ。男はニヤニヤしながら「照れるな照れるな」とはやし立てているのか宥めているのか分からない言葉を発している。シャンは大きく息を吸って吐き、一番に言いたいことを吐き出した。
「あの、私はヤオの娘ではありません」
「なんでぇ、やっぱりデマかよ。いやーあのミスター腹黒が女の子なんて拾ってきたって言うから、てっきり娘かと思っちまったよ。やっぱりあいつも女に興味あるんだなぁーって思ったが……ちくしょう！　興味ねぇくせにこんな可愛いお嬢ちゃんにまでモテやがる！」
「あの、拾ってきたというのも誤解です。最初は跡をつけていたの

ですがその内見失ってしまって、困っていたらローラ先輩に声をかけてもらったんです『何でヤオの後ろつけていたの？』って……」
男はぽかんと口をあけた。その拍子に煙草がカウンターへと落下する。自分が得ていた情報の大半がデマだったことを知ったからなのだろう。しかしさすがイタリア人。そんなことは忘れたとでも言うように表情を切り替えて煙草をくわえ直す。そして言った。
「娘じゃねぇなら弟子ってやつか？　いいねぇ師弟関係！　禁断の恋！　師匠の背中を追って一生懸命訓練を重ねる弟子！　尊敬する師匠に近づきたくて同じ銃を使うその健気さ！　いつしかふたりは師弟という一線を越えて……いいねぇいいねぇ！　とってもいい！（ディ・モールト・ベネ）
もってけ泥棒！　可愛いお嬢ちゃんの恋、俺も応援するぜ！」
男は大層なオーバーリアクションをかました後に銃をもう一挺カウンターに叩きつけた。シャンが今現在手に持っているものと同じ形をしている。シャンがおずおずと言葉を切りだしたが、男は聞かない。むしろ聞こうとしない。嬉々として何かを書いている。それが登録用紙だと気づくのに時間はいらなかった。
「あ！　ちょっと待ってください、私はこれは使えな――」
「遠慮すんな遠慮すんな！　まだ教官決まってないのか？　俺から口添えしといてやろうか？　いやぁーいいねぇ初々しいねぇ！　あ、あれも書いちまえ」
――以上が、シャンを煉獄へと突き落とした原因の顛末（てんまつ）である。
記憶を反芻（はんすう）して気づいたが、ヤオが教官になったのは、彼が本当に口添えしたからかもしれない。シャンは小さな手にずっしりと重いハンドガンを乗せて大きくため息をついた。ちら、と男に目線を向けるとにやけ顔が視界を掠った。もう一度大きくため息をついた。
「お、そうだった。お嬢ちゃんはもういっこだ！　ほれっ」
綺麗な弧を描いて放り投げられたハンドガンをあわあわと受け取る。その様子すら男の娯楽に変換可能のようで、髭面がめいっぱいに笑みを湛（たた）えた。

「かっけぇなー女の子の2挺使い！　それもその銃だ！　こりゃあ師匠へのアプローチには持ってこいだぜお嬢ちゃん！　『せ、先輩と同じ銃にしたんです……少しでも、近づきたくて……』って上目遣いで言えばあの腹黒不健康もイチコロだぜ！　なぁ！」

男が「なぁ！」と同意を求めつつ肩を叩いた相手はシャンではなかった。肩の位置がいやに高かったので、男は笑みにより細められていた目を開いてその人物を確認する。そして戦慄した。小さい悲鳴も聞こえた。

ちなみに、シャンも小さく悲鳴をあげた。

「とうとう頭が沸いたか、リガッチ」

男――リガッチとシャンの視線の先には、かなりご機嫌斜めな男がいる。黒いスーツと目の下を塗りつぶしている隈、細すぎる体と綺麗な顔。言わずもがな、ヤオその人だった。

「帰るぞ、俺は。茶番に付き合ってられるか」

「おい！　おいおいおい！　そりゃねぇだろ師匠さんよぉ！　こんな健気な弟子ほっといて帰るとは何事だぁ？　教えるためにわざわざこっち来たんじゃねぇのか！　お前今日非番だろ！」

シャンの表情がほんの少しだけ明るみを帯びた。まさかヤオが自分のために来てくれるとは思っていなかったからだ。

「お前が『武器のメンテしてやるから来い』と言ったんだろ。それに弾も補充したい。それ以外の理由に何がある」

――まるで崖から落ちるかのように、シャンの表情が暗くなった。

「ああそうだよ！　メンテしてやるよ！　メンテの間にお嬢ちゃん教えやがれこのｓｔｒｏｎｚｏ（ろくでなし）！」

空気の漏れるような、小さい悲鳴が聞こえた。シャンが口にしたのだ。この男はなんて命知らずなのだろうかと思ったが、ヤオの反応は以外と紳士的だった。――今までと比べれば。

「お前にとやかく言われる筋合いじゃないんだよ、この管閑事的人（お節介野郎）」

「なに言ってるか分かんねぇよ！　イタリア語で喋りやがれ、この

ｒｏｍｐｉｃｏｇｌｉｏｎｅ（陰気野郎）！」
「お前こそ中国語で喋れ、この賤胚子（クズ野郎）」
聞いたこともない言語――恐らく悪口――が飛び交う中、ドイツ語を公用語とするオーストリア出身のシャンは立ちつくす以外に術はない。最終的に男――リガッチが息を切らして続きを言う口を塞いでしまったので、軍配はヤオに上がった。ヤオの突き付けたハンドガンを分捕（ぶんど）ると、悔しげに顔を歪ませて別の銃を叩きつけた。カウンターに影を落とすそれもまた、デザートイーグルだ。
「――何だこれは」
「お手本見せねぇで教えるつもりか？　いいからちょっとぐらい見てやれよ。お嬢ちゃんもマジなんだ」
漆黒の瞳がシャンを一瞥し直後にわざとらしい舌打ちを鳴らした。
「とんだ災難だ……。おいクソガキ、見込みがないようなら帰るからな」
「あ、は、はいっ！」
足早に行ってしまうヤオの背中を、小さい背中が必死に追いかける。ふたりの背後から聞き慣れない言葉で何か聞こえたが、それが囃（はや）し言葉であることは雰囲気で分かった。直後シャオの頬すれすれを掠めた何かが甲高い音を立てる。振り向けばリガッチの頬は描いたような細傷が引いてあり、壁にはクナイが突き刺さっていた。

SODDEN TIGER-11-

「お前、馬鹿だろう。あーいや、悪い、当たり前のことを聞いてしまった」
射撃場にてシャンが銃を手にした途端、ヤオは額を押さえた。
小さな手には重々しくごついハンドガンが握られている。まず銃の選択がおかしいのだが、もっとおかしいのはそれが2挺あるということだ。到底銃など扱えそうもないか弱げな少女は、その両手に化け物じみた銃をしっかりと握っていた。表情は重く暗い。
「本当は違うものにしたかったんですが……あの、リガッチさんが……」
「あのバカ……。――ちっ、まあいい。それでやれ」
「え、あの……」
「どうした、さっさと撃て。的はあれだ。それくらい分かるだろう」
ヤオが指さす先には人をかたどった板がある。細い指でトリガーに触れるも、撃ち方や狙い方など分かるはずもないのだ。かといって質問を許してくれるような教官でもないので、とにかく見よう見まねでトリガーを引いた。刹那、とんでもない大きさの発砲音と衝撃がシャンに襲いかかった。小さな体は反動に耐えられず、吹き飛ばされるように尻餅をついた。
奥から「支えてやれよー」と非難の声がする。しかしヤオの投げたクナイ――と思われる――によって静まった。
「何だお前――」
（怒られる……！）
シャンは尻餅をついたまま、ぎゅっと目を瞑る。左肘をぐいと引っ張られて無理矢理に立たされる。今度はきつく唇を噛みしめた。しかしヤオのコメントは意外なものだった。
「初心者にしてはそこそこだな。見ろ、脳天を一撃だ――おい、目を開けろ」

恐る恐る視界を開いた先には、頭の部分に穴の空いた的があった。硝煙の臭いが鼻に痛い。シャンは自分の手にしているハンドガンと的を交互に見て、最後にヤオを仰ぎ見た。シャンの顔には「理解できない」と書いてある。

「狙いは悪くない。それで2挺使いこなせたら大したものだ。――だがまあ、敵前で尻餅をついていては使い物にならないな。純粋に筋力不足だ。銃使う前に鍛えろ」

腕を組んで的を見ている横顔が綺麗だ。ガラス細工のような完成度である。

しかし今のシャンに見とれている時間など与えられるはずもない。今度は2挺で交互に撃ってみろと鬼教官が言うので、言われたとおりに2挺構えた。1挺で尻餅をつくほどだ。それがふたつあるのだから、今度は肩の関節でも外れるのではないかと危惧していた。トリガーにかかった指が躊躇する。

「衝撃が――」

ふと、気だるげな声が聞こえる。

「衝撃が大きいのなら、それを吸収することを考えろ。抵抗しようとするから尻餅をつく。腕を同じ位置に保っていようとするな。お前にはまだ早い」

「は、はいっ！」

具体的に何をしろ、と言われたわけではないが、シャンは何かを掴んだような気がした。再度的に視線を置き、トリガーにかけた指に力を込める。右を撃ったら左を撃とう……。そう確認してトリガーを引いた。

――肩が抜けるような衝撃だったが、幸い肩は無事で、シャンは立っていた。的は頭部に3つの穴が空いている。

「狙いだけは一人前だな。ま、鍛えれば伸びるだろ」

気だるげなのに変わりはないが、よく言えばそれは”褒め言葉”だった。

シャンは花開くように笑顔を浮かべ、ヤオを仰ぐ。無表情が視界

にはいるだけだったが、それでも大層喜んだ。奥から「頭くらいなでてやれー」という囃し声が聞こえ、もはやお約束となったクナイの牽制で静かになった。
「そう言えば……お前は”認可試験”について何か聞いているか？」
始めて聞く単語に、シャンは首を傾けるしかできない。視線を合わせないまま言葉を並べ立てるヤオの表情は、やはり鉄仮面そのものだ。――ただ、ほんの少しだけ口元が愉快げに吊り上がっている、気がした。
「懐かしいな、認可試験か。試験官になるのもこれで2回目だ。……ふん、あいつ未だに気にしてるのか」
表情と裏腹に楽しげなその声色にシャンは訝（いぶか）しげな視線を送った。今度こそ、その陶器のような顔が黒い笑みを湛えているのを確認する。作り物めいた美顔も台無しになってしまうほど悪戯っぽい笑みだ。シャンは背筋に何か冷たいものを感じた。
「簡単に言えば、俺が出した課題をクリアして始めてBBクラブ構成員として認められる。――まあ、お前が認められようが認められまいが俺には関係ないからな。俺が面倒だと感じた雑用でも試験内容として吹っ掛けてやるよ。楽でいいだろ」
奥から「そりゃねぇだろー」と非難の声。それはやはりクナイの一撃で静まった――と思いきや何やら慌ただしい声が聞こえるので、今回は容赦なく本体を狙ったのかもしれない。証拠に「危ねぇだろ！」という怒声が聞こえた。
シャンは認可試験の標準難易度についてよく分からないため、一生懸命首を縦に振るしかできない。雑用のレベルもイマイチ分からない。雑用と称して任務を持ってこられるんじゃないか、とシャンは不安になった。
「ま、二三日勝手に訓練してろ。試験内容はそのうち決めてやる」
ヤオはそう言う口の下からカツカツと明朗な音を響かせて場を去っていく。リガッチの噛みつくような声が聞こえ、それに対する低い声がノイズのように聞き取れる。しばらくして、訓練場の扉がゆ

っくりと閉じられる音がした。

SODDEN TIGER-12-

何かに追われているのか、大男は焦燥を隠しもせずに落ち尽きなく周囲を見ていた。瞳は飢えた猛獣の如く見開かれ、手にはじっとりと汗が握られている。轟音に近いBGMを軽く聞き流して寒そうに口元を覆った。彼が今腰を下ろしているのは低俗なクラブの一角だが、テーブルには彼ただひとりが所在なく辺りを見回しているだけだった。その様子を不思議に思う客がいても良さそうだが、大男の腰掛けている場所はホールから離れており、その上柱がうまく影となっている。

大男は分捕るようにグラスを掴むと、ほぼ垂直にそれを仰いだ。ごつごつとした手は筋張っており、グラスにかかっている力の程が伺える。装飾の美しいグラスは勢いよく叩きつけられ、穏やかではない音を立てた。

「くそっ……くそっ！　どいつもこいつも俺を馬鹿にしやがって！　特にあの蛇野郎……許さねぇ……絶対に許さねェ……！」

焦点の合わない瞳は、憎い相手を睨んでいるようだ。めくり上がった上唇から噛みしめられている歯が見える。通常よりもやや出っ張った八重歯が、彼を余計に獣たらしめていた。

浅黒い腕がズボンのポケットを探ったがお目当てのモノは”空”だ。忌々しく舌打ちをしてガシャガシャと頭を掻く。その一連の行動は、薬物中毒のそれと酷似している。

「お待たせしてしまって申し訳ない。何分こちらも多忙でね」

聞き覚えのない優雅な声音に、大男が面を上げた。

視線の先には片眼鏡をかけた英国紳士のような風貌の男がいる。年の頃は三十前後か。所作から何まで全てが優雅で淀みがない。こんな低俗なクラブに居て良い人間ではないことを、大男は何となく理解していた。

「君が欲しいのはこれだろう、ワディム君」

英国紳士は指揮でも執るかのように”何か”を放った。テーブルに叩きつけられ、軽くバウンドしたそれは小さめの薬瓶だ。派手な色のライトを浴びて、テーブルに微かな陰影を落としている。大男――ワディムはかぶりつくかのようにそれを掴みあげると、何錠か手に出して一気に飲み込んだ。肩で息をしている様が余計に荒々しい。

一瞬、いつもとは違う目眩（めまい）がワディムを襲ったが、さして気には留めなかった。

「普段そんなに苛立っていては、クスリは手放せないな。――誰か……憎い相手でも居られるのかな？」

「……っ！　てめぇ、何を知ってやがる！」

「いやいや、私は何も……。ただ君の目が誰かを殺したいほど憎んでいるように見えたのでね。はて、気のせいだったようだな。これは失敬」

ワディムは先ほどまでの焦燥ぶりが嘘のように落ち着いていた。ギラギラと鋭い眼光を英国紳士に向け、一分の隙もないことを知らしめる。英国紳士の背後に立っている数人の男は全くの無表情でワディムを見ているが、英国紳士その人は優雅に微笑んでみせた。

「おお、そうだ。自己紹介がまだだったな、重ね重ね失礼をした。――私はスタンレー＝フォースターという者だ。この辺りでの売買を取り仕切っている。今日は君とゆっくりお話がしたかったのでね。まあ酒でも飲みながらお話を聞かせてくれたまえ。――ああそこの君、私と彼にブランデーを」

若いボーイに注文を言付けると、フォースター――と名乗る男――は脚を組んでその上に組んだ手を置いた。ワディムは依然として疑いの眼差しを向けている。フォースターは薄く皺（しわ）の刻まれた目周りを微動だにせず微笑みを湛えている。

「何だって俺なんかと話がしてぇんだ。アンタ、見た感じお偉いさんだろ。どっかのマフィアのボスか何かか？　そんなんが俺の何を聞きたいって言うんだ」

「そう邪険にするな。それにマフィアのボスだなど……私は下っ端だよ。それも微々たる勢力しか持ち得ない弱小マフィアの……ね。だからこそ君とお話がしたいのだよ。君は力がある。失礼だが今のご職業は？」
「関係ねぇだろ。アンタ、何か嘘をついてるんじゃねぇのか？」
フォースターが悩ましげに瞼を閉じ、こめかみを押さえた。軽くため息をつく。やれやれという風に首を何度か振ってワディムを向いた。
「嘘などと……もう少し信頼してくれたまえ。私は君を救いたいのだ。君が常に何かに苛立ち、己を……己の力を持てあましていることを私はよく理解している。とても残念なことなのだよ、それは。君はこんな所でくすぶっていて良い男では無い」
「うるせぇ、アンタに何が分かるんだ……！　俺は所詮負け犬なんだよ、俺はアイツには勝てねェんだ！　ちくしょう、ちくしょうっ！」
ワディムの拳がガンガンとテーブルを叩きつける。焦点の合わない瞳は何を見ているのか。歯を食いしばって冷や汗を振りまきながら、まるでそこに憎い相手がいるかのように、一心不乱にテーブルを叩く。フォースターはその様子を眺めながら微かに今までとは種類の違う笑みを浮かべた。

SODDEN TIGER-13-

「やはり、君は憎い相手がいるのではないかね？　そうやって自分を責めるな。我々が何か力になれるかもしれない。――話しては、くれないかね？」

「は、は、話すって何もねェよ！　アイツはいつもああやって……昨日だってアイツは俺を馬鹿にしやがった……！　何が、何が『悪かった』だ……！　アイツはそう言っていつも俺を嘲笑(あわざら)ってやがる！　く、くそっ！　ぶっ殺してやる！」

ワディムは次第に幻覚でも見ているかのように宙を眺めだした。吃音(きつおん)がひどく目立つ。堂々たる体躯はわなわなと震え、冷や汗にまみれ、青く染まっている。ただその拳だけが虚しくもテーブルを打った。

「くそ、くそぉ……！　俺と同じ時期に加入したくせによォ……！　何だってアイツはあんなに優遇されやがる！　俺とアイツ、何が違ったんだ！　かっ、幹部のクソ野郎どもめっ！」

「ほぉ……君は何かの組織の構成員なのかね？　一体何の組織なのか……聞かせてくれるかね？」

「ＢＢクラブだよ、ＢＢクラブ！　なっ、名前くらい聞いたことあんだろ……暗殺組織だよ！　――ちくしょう、ちっ、ちくしょう……あの蛇野郎……！」

ワディムは並べ立てていた罵詈雑言に横槍が入れられたことに苛立ち、吐き捨てるようにフォースターの質問に答えた。最早その青く濁った瞳に英国紳士の姿はおろか、周囲の風景すら映っていないだろう。今更になって運ばれてきた酒を掴みあげ、一気に仰ぐ。途端、瞳の淀みが顕著になった。

「あ……？」

間抜けな声が雑踏に溶けていく。自身の無骨な手を眺めようとするも、どうやらはっきりと視界に映らないらしい。眼球がビクビク

と痙攣を起こしている。
　フォースターは悪戯っぽく笑った。
「ＢＢクラブ……聞き及んだことはある。なるほど、君はＢＢクラブの構成員か。しかし話を聞いている限りでは、幹部は無能のようだな。君のような逸材をぞんざいに扱うとは。――そうだ、この際新しく暗殺組織を造ってしまえばいいのではないかね？　君がトップだ。君が部下を教育するんだ。どうかね？　いい話だろう」
「は、は？　あ、新し……何だって？　俺が、おっ、俺がトップ？　ふ、ふはは、ははは っ！　俺がトップ？　そうだ俺はトップだぁあああ！　あんな蛇野郎なんて、ひ、ひとひねりだぜェ！」
「素晴らしい、その意気込みや称賛に値するよ、ワディム君。是非とも我々にお手伝いさせてはくれないかね。我々も弱小組織なのでね、力強い同志が欲しかったのだ。我々が資金や施設の提供を引き受けよう。人材もすぐに集めよう。どうかね？」
　片眼鏡の向こう側で海色の瞳が陰謀の光を灯している。もしワディムがいつもと変わらぬ状態であったなら、その光に気が付いただろう。しかしワディムは最早自分が口にしていることすら理解してはいなかった。
「く、くくっ、ひゃはははああ！　いいねぇいいねぇ、あの蛇野郎をおびき出して、蜂の巣にしてやろうぜェ！」
「そうだ、君の気の召すままにするといい。――ああ、忘れていた。我々は君にここまで尽くす。君の自立をお手伝いさせてもらう。ただ、要は信頼だ。見返りがなければ関係は成り立たないのだよ、ワディム君。我々は……そうだな、ＢＢクラブ構成員のデータが欲しい。関係者である君になら可能のはずだ。どうだろうか？」
「ふっふふふ、ははは！　まっ任せろ！　ファイルでもデータでも印刷でもして持ってきてやっからよォ！　俺に任しておきなァ！
――アンタ、気に入ったぜぇ！　名前は？　まだ聞いてねぇよなあ」
　英国紳士はブランデーの注がれたグラスに口を付け、それを優雅に揺らした後テーブルに戻す。口元を道化師のように吊り上げて、

質問に答えた。
「私はクラウン＝ファミリア、アメリカ支部首領……アトリー＝ベイリアル。以後お見知り置きを」
「はっ、ははは！　ぶち殺すぜェ！　ぶち殺すぜェェェ！　――あン？　何だって？　悪い、聞こえなかったぜ。まあ構わねぇか！　ひゃは、ひゃははあっ！」
　ワディムはほとんど白目を向いているような状態でゲラゲラと笑っていた。何がそんなにおかしいのか。しかしだみ声が笑い止むことは無い。
「では、これより施設の方へご案内しよう。――その前に少し酔いが回ったようだ。一服つけてきたいのだがよろしいか？」
「ああ、かまわねぇ！　かまわねェぜ！　ひゃはっ、ひゃはははぁあ！」
　フォースター――もといベイリアルは物腰柔らかに席を立つと、部下を何人か伴って雑踏の中を突き進んでいく。残された数名の部下は子供のように笑い続けているワディムの監視だった。耳に触るだみ声が雑踏に掻き消された時、ベイリアルの表情が忌々しげに歪んだ。
「何とかとハサミも使いようとは言うがな……あれと話をしているとアレだな、周囲の目に耐えられんな。あんな者でも加入できるとは、ＢＢクラブは人材不足が深刻なのか？」
　ベイリアルは色とりどりのライトをその身に浴び、数多に蠢く人の波を遠くから眺めている。煙草に手をつける様子は見られない。
「ああそうだ、孤児院とは話がついたのか？　たかだか１２人のガキとＢＢクラブのデータ……まったく我ながらうまく事を進めたものだよ。――ああ、それとこの街のはずれに使われていないテナントがあったな？　適当に何人か送り込んで”それらしく”改装させておけ」
「孤児院とは話がついております。商品ももうすぐ到着するとのことです。――人員については現在事務所にて待機している者に連絡

を取ってみます」
「宜しい。あの出来上がりようだ。たとえ海の底で海藻を相手にしていようが、それを暗殺組織だと思いこむだろう。ガキ共はまっすぐテナントへ運べ。ふん、クスリに細工をしただけであのザマだ。つくづく恐ろしいモノだな、麻薬というのは。――ああそうだ。待機している連中に銃を数十挺持ってくるように伝えろ。ワディム君は、憎い相手がいるようだしな。これで本当に殺し合ってくれればとんだ喜劇だよ」
部下は軽く頷くと雑踏の中に消えていった。電話をかけに行くのだろう。一方、片眼鏡の奥で目を細めてほくそ笑んでいる英国紳士は、表情を道化のようなそれから仕事用のそれへと作り直してテーブルへと戻った。

SODDEN TIGER-14-

閉め切られた空間に電子の音が反響する。まるで壁にぶつかっては形を崩しているかのように、出来損なった音だ。砂嵐しか移していないモニターを漆黒の瞳が見詰めている。その奥にはやはり黒々とした光が灯っていた。

音割れとノイズの酷い電子音声が部屋に響く。

「立て続けに任務を与えて申し訳ないと思っているよ、ヤオ君。――ワディム君……君はよく知っているだろう？　昨日ここ(アジト)で見かけたきり彼と連絡がとれないのだ。何やら挙動不審にアジト内を彷徨いていたらしいが……。暗殺のプロフェッショナルに捜索の任務を出すのは心苦しいが、一応元教官ということもあるからな。君にお願いしたい。新入りの指導で忙しいか？」

「――いえ」

低く、気だるげな声が密室に消え入る。声の感じからして本心のようだ。

「すまんね、ヤオ君。――ああ、そう言えばローラ君からの報告なんだが、シャン君が何者かにつけられていたらしい。先日掃除したマザー・ピッドの部下だった者じゃないかと思うのだが、組織の情報が漏れるのは何としても避けたい。まあ今回の任務は殺しではないしな。ラフな格好で行ってくれ」

返答はしばらく間を置いてから「はい」と短く発音された。

ハンドガンもまだリガッチ(メンテナンス)に出したまま――思えば2日も取りに行ってない――なので、特に携帯する武器もなかった。だから私服でも機能性に問題はないのだが、ヤオはイマイチ気が乗らないといった様子だ。表情に変わりはないが声のトーンがやや低かった。

「どうかしたのかね？」

「――何でもありません」

「はぁ……」
ヤオはすっかり暗くなった空の下、自己主張の激しい看板達を眺めて足を進めていた。つい先ほど上官に言ったばかりの一言がとても悔やまれる。「何でもありません」などどの口が言わせたのか。何でもないわけがないことを、ヤオは十分に理解していた。
自宅からもアジトからもだいぶ離れたこの場所は、香水と酒の臭いが風に溶けている。それは頭痛を誘うのに十分な量だ。ヤオはなんだってこんな所をふらつかなければならないのか、と上官を恨んだが、この辺に情報屋がいるとの事なので文句を言うことくらいしか抵抗方法はない。ＢＢクラブの構成員データは厳重に管理されており、天地がひっくり返ろうと漏洩は有り得ない。しかしワディムのような大男は歩いているだけで目立つし、そもそも彼は元々ストリートチルドレンだったので、治安の悪い繁華街なんかでは顔が割れている。
ヤオはふつふつと込み上げてきた苛立ちに足を速めた。
「あら、お兄さん。一緒に飲まない？」
「お兄さん東洋人？　女の子みたいな顔してるのねぇ」
前方に派手な化粧の女が２人。後方に３人。じりじりと近づいてくる女達は完全にヤオを包囲していた。
ヤオが私服での任務を良しとしない理由はこれだった。スーツならば繁華街を歩いてようがビジネスマンか何か――とにかくお堅い人間だと認識されるため、こういった誘いは割と少ない。しかしスーツから私服へとシフトした場合、確立はぐんと飛躍する。ヤオは質素ながらボディラインの目立つ服を好むので、尋常ではない細さでも人目を引いた。
香水の匂いは最早傷害罪として訴えられるほどだ。あからさまに表情を強ばらせているヤオに尻ごむ様子ひとつ見せず、女達はねっとりとした視線でもって誘惑を試みている。無理に突き進もうとすればその先を行って行く手を阻んだ。
「やあねえ、そんな冷たい反応しなくてもいいじゃなぁい。ちょっ

と一緒に飲むだけよぉ。ねぇ、良いお店知ってるのよぉ？」
「やぁん、独り占めはずるいわよぉ。お兄さん名前なんて言うのぉ？」
再度強行突破を試みる――も失敗。しまいにはこの鬱陶しい取り巻きのせいで往来の人々に珍しがられる事態となっていた。他人事だと思ってか「あの東洋人モテモテだぞ」「すげえ、あの黒髪、あんなに取り巻きがいるぜ」などという羨望なんだか揶揄なんだか分からない声が聞こえる。ヤオはそろそろ限界を感じていた。
「ねぇー、何か言ってよぉ」
「――？根本就没有資靠近我」
「へ？」
女達はぽかんとしている。その内英語が通じないものだと判断して、先ほどまでの媚びようが嘘のかの如く立ち去っていった。ヤオはなに食わぬ顔で足を進める。―？根本就没有資靠近我（俺に近づくな）という意味を理解していない割には物わかりがいいな、とヤオは内心皮肉っぽく笑った。
しかし障害物というのは連続して現れる。今度はジャラジャラとシルバーアクセサリーの音が鬱陶しい男達が数人ヤオを取り囲んだ。先ほどと同じように英語が分からないフリをして切り抜けようと思ったが、叶わなかった。
「お兄さん中国人？　大丈夫、俺中国語もちょっとはイケるから！　いい仕事あるんだけど、どぉ？　お兄さん美人だからビデオもバカ売れだよ！　一回２０００ドルだぜ？　やばいっしょ？」
汚らしい笑みが並んでいる。ヤオはこの際職務妨害としてぶち殺してやろうかと思ったが、今ここで目立っては後々困る。今日の目的は情報収集なのだと言い聞かせ、あくまで紳士的に対応する。
「結構だ。急いでいるので通してもらいたい」
「そう言わねぇでさぁ！　ちょっとで良いんだよ、ちょっと！　ね？　とりあえずスタジオ行くだけ行こうよ、ね？」
「何度も言うが結構だ。通してくれ」

しかし男達は一向に退こうとしない。それどころか人数が増えてきている。何やら堅気では無さそうな男まで現れていた。2メートルはゆうに超えている大男がヤオの正面に立つ。東洋人にしては長身のヤオも、さすがに体格のいい黒人相手だと見上げざるを得ない。サングラスをかけた男は手をボキバキと鳴らした後、ヤオの肩を掴む。細いからだがふらついた。

「あらあら、お兄さん大丈夫？　言うことときいてくれないと、こいつ何するかわかんないよー？」

薄笑いを浮かべている男をよそ目に、ヤオの細い指が大男の腕を掴む。左手で肘の辺りを触れその位置を確認する。大男は何事かとただ黙っていた。刹那、ヤオの左手の親指が大男の肘を強く押す。その動きは一見マッサージのそれと似ており、周囲の人間は笑い飛ばしていた。しかし大男だけは違った。

「ぐ、ぎゃあああ！　ひぎゃぁあぁあぁぁ！」

巨体が地面を転がる。周囲の人間も往来する人々もその様子を見ていた。ヤオがその場を立ち去った後も男の悲鳴は騒々しい繁華街の雑踏に飲み込まれていく。男の腕は、関節からあらぬ方向へと曲がり込んでいた。

SODDEN TIGER - 15 -

ヤオが足を止めた先には、見窄（みすぼ）らしい建物がある。他の店とは違って派手なネオンの看板は見当たらない。聞いている限りではここが情報屋の居場所だった。入り口が半分とれかかっている。

「――いらっしゃい。おーおー、随分なべっぴんさんが来たモンだ」

「それはもういい。ここに来るまでの間で何回言われたか分からない」

暗い店内には武器屋に似た金網がなされている。客が立ち入れるスペースは入り口を進んで少し歩ける程度だった。赤黒い照明が不気味さを助長させている。そのライトに照らされて、怪しげな男は不敵に笑っていた。

「見た目がいいのは胸を張ってもいいことだぜ。ま、この街では少し不便か。――さて、ここは情報屋だ。地獄の沙汰も金次第ってね。金はあるのかい、東洋人（オリエンタル）？　情報は高いぜ？　データってのは時に命すら脅かすモンだ」

「金に糸目はつけない。尋ねられた事に答えろ。――前金だ」

金網が途切れ、カウンターのようなものが出っ張っているところに札束を放り投げられた。男は「確かに」と呟いて札束を仕舞い込む。

「ワディム＝ウラディスラヴィチ＝ベズルコフ。この男についてだ。ここ数日の目撃情報などはあるか」

ヤオは小さめの写真を提示する。男は暗がりの中写真をまじまじと見詰めては、顎に手をやった。片眉があがる。

「あーこいつはよく見かけるよ。よくクスリを買ってるみたいだぜ、マフィアさんたちからな。あ、そうそう、こいつ昨日も見たよ。何だか小綺麗な格好の男も一緒だったなぁ。何だか楽しそうだったぜ。キマってたよ、最高にキマってた。それからは街外れにある、今は使われてねぇテナントに行ったみたいだ。悪いがそっからは分から

ない。――これにちょっと関係のある話もあるにはあるんだが……」
　男はいやらしく目配せをする。口元は何かを言いたげに吊り上がっていた。ヤオは無表情で札束を放る。男はがめつくそれを仕舞い込むとぺらぺらとしゃべり出した。
「この辺一帯を取り仕切っているマフィアがあるんだが、なんでもガキを大量に買ったらしい。そのガキ達が運ばれたって噂だ、そのテナントにさ」
「そのマフィアの名前は？」
「それは言えねぇ」
　分厚い札束が再度カウンターに影を落とす。しかし男はそれを手に取ろうとしなかった。うっすらと焦燥を含んでいる表情が赤黒いハイライトでもって浮き上がる。
「金を積まれても言えねぇもんは言えねぇ！　この街では常識だよ……連中の名前を知っちまったとしても、決して口にしちゃならないんだ。それが生きていくための知恵ってやつさ。命あっての物種だ。悪いが、組織の名前は口が裂けても言えない」
　男の怯えた顔に、ふっと影がかかった。男の目が見開かれる。風を切る音に、ヤオは神業とも言うべき反射神経で身を避けた。札束の乗ったカウンターがバキッと音立てる。ヤオが今しがたまで存在していた場所には鈍く光るバットが振り下ろされていた。
　狭苦しい店内には、ヤオの他にニタニタと表情を歪ませる男達の姿がある。
「よけちゃーダメっしょ！　大人しく殴られてよ！」
「そーそ、別に殺しはしないからさ！」
　情報屋がひいひいと慌てふためいている。この男達を組織からの刺客だと思ったのだろう。しかしアクセサリーをジャラつかせ、髪の毛を品のない色へと染め上げている彼らが”マフィア”であることは考えづらかった。恐らくは金で使いまわされているチンピラの類だろう。
　ヤオは両のポケットに手を入れたまま軽いため息と共に腰を屈め

る。そのまま地面を蹴り、一番手前の男を盛大に蹴り飛ばした。
「ぐわっぷ！　て、てめぇぇぇえ！」
激昂した男が勢いに任せてバットを振り上げる。しかしそれは虚しくも地面を叩きつけ、直後に香水臭い体が金網に叩きつけられる。金髪の男はそのままずるずると地面に伸びた。
「てめぇ！　何てことしやがる！」
「コッチの科白（せりふ）だ白痴（クソボケ）。背後からいきなりとは良い度胸だ」
懐からバタフライナイフを取り出した男を、後ろにいた男が牽制する。頭を丸刈りにし品のない入れ墨を入れているその男は、依然変わらずにたにたと薄笑いを浮かべている。ヤオに尻ごむこと無く、からかうような口調で言葉を並べた。
「やっぱ凄いんだねー違うねぇー。俺等の訓練も見てくれよぉ。ねぇ、ヤオちゃん」
直後、バタフライナイフを持ったまま歯ぎしりを立てていた男が金網に叩きつけられた。ヤオはそのまま丸刈りの男へと走ったが、男はにやついたまま店を出ていった。ヤオもそれに続いて店を出ていく。半分とれていた扉は完全に壊れてしまっていた。
「ははっ！　早い早い！　こっちだよヤオちゃん！」
「――ちっ、―王八蛋（クソ野郎）！」
坊主頭は決して足が速いわけではなかったが、つかみ所のない動きをしたので捉えにくかった。ヤオは苛立ちを隠そうともせずに男を睨め付ける。2人はいつしか人気のない街外れまで来ていた。男が唐突に立ち止まり降伏のジェスチャーをする。しかしヤオはそんなものに目もくれず、品のない入れ墨ごと男の頭を蹴り飛ばした。汚らしい悲鳴と共に土埃が立つ。
「な、何てことするんだてめぇ！　降参だって言っただろうがよぉ！　飛び蹴り喰らわしてくれてんじゃねぇぞ！」
「笑死人（ほざけ）。馴れ馴れしいんだよお前は。――さて、質問に答えてもらおうか。何故俺の名前を知っている。その情報をどこから得た」
ヤオの靴底が男の鼻を押しつぶす。男の腕がバタバタと暴れたの

で、足底に力を込めた。ごり、と嫌な音がしたのを聞き取ったのか、男は大人しくなった。先ほどまでの余裕は吹き飛び、冷や汗と引きつった笑みが顔面を支配している。

「そ、それは本人から聞いたほうが早ぇよ。ホラ、ここだよ、この空きテナント。ここにアンタを連れてくるように言われたんだ」

「そうか。それはご苦労だったな。――それで、お前は俺の情報を知ってしまったんだな？」

「あ、えっと……ちょっとだ！　ちょっとだけだよ！　本当だ信じて――」

男が泣きすがるような笑みを浮かべている。ヤオは必死に弁明する男を立たせると、肩を軽く叩く。そして男の傍らを通り過ぎようとしていた。男が「助かった」と表情を緩めた刹那、その首がまるで噴水のように鮮血を噴き荒らす。ガクガクと痙攣する男の背後では、ダガーナイフの血糊を払うヤオの姿があった。

「『データってのは時に命すら脅かすモンだ』か。その通りだったな」

SODDEN TIGER-16-

ヤオは目の前で穏やかでない雰囲気を垂れ流している空きテナントを仰ぎ見た。どうやら店全体が空き家のようである。3階建てのそれはまるで人の気配など感じられない。ドアは半壊。暗く影の落ちている内装はお世辞にも”店”とは言い難い。廃墟、という言葉が一番しっくり来る。

情報屋の話ではワディムとその連れが空きテナントに向かったとのことだ。この近辺に空きテナントはいくらでもあるが、室内に立ちこめている不穏な空気はここが目的のテナントだということを示唆している。おまけに不格好ながら案内までついていた。

ぐらぐらと不安定なドアを蹴破って店内に足を踏み入れる。床が老朽化しているのかギィギィと軋む音が室内に反響した。至る所に壊れた調度品が転がっている。

――ひゅっと風を切る音がした。

ヤオが反射的に身をかわした傍らを木材が貫く。それは壁に叩きつけられて乾いた音を立てた。しかし木材の砲弾はそれで終わりではなかった。ヤオを狙って尖った木材が雨のように投げつけられる。暗がりから止めどなく現れる巨大な弾丸は止むことがない。ヤオはその全てを紙一重で避け、発射口に小さな瓦礫を投げつけた。

「――ちっ！」

憎々しげな舌打ちが暗がりから壁にぶつかってヤオに届く。木材の雨は途端に止み、代わりに階段を駆け上がる音がヤオの耳朶を打った。ダガーナイフを握る左手に力を込め、暗がりへと足を進める。崩れかけた階段には木屑がこれでもかと言うほど落ちていた。ヤオはギィギィと悲鳴をあげる階段を一歩一歩昇る。その表情はやはり何の感情も表してはいない。

全て昇りきったとき、風を切る音を伴ってヤオの頭上に何かが振り下ろされた。それを軽々避けてみせると、ヤオはダガーナイフを

”相手”の喉元に添える。ヤオが今しがた立っていた場所は無惨な落とし穴に変貌していた。
「だから言っているだろう。速度がなければダメだと。――こんな所で何をしているんだ、ワディム」
「ひ、ひゃははは！　何してるだと？　見てわかんねェのかよ、教育だよ！　俺は新しく暗殺組織を立ち上げたんだァ！」
「とうとう頭が――いや、お前……クスリでも飲んだな？」
ヤオはワディムの背中を見下ろしつつ、低いトーンでそう言った。いつもならばナイフを突き付けられて震えているはずの背中が、微動だにしていない。冷や汗ひとつ流れず、首元にナイフがあることすら忘れて忙しなく首を回している。
ヤオは念のためハンドガンを構えようとしたが、舌打ちをした。ハンドガンはおろか、クナイや細針の類まで置いてきてしまった。
「いい施設だろ？　新しい暗殺組織だ！　うざってぇ話だがＢＢクラブのトップはてめぇだよ。だがな、ここでは俺がトップだァ！てめぇが今ここで死ねば、ＢＢクラブなんて怖くもなんともねぇ！てめぇ等の情報は、俺が掴んでるんだからなァァァァ！」
岩のような拳がヤオの左腕を弾いた。ダガーナイフが赤い紐飾りをはためかせて宙を舞い、床を滑る。それは窓の真下で動きを止め、差し込んでくる微かな光に刀身を光らせている。ヤオが珍しく焦燥の表情を浮かべて窓の方を振り返ったとき、頭上ではごつごつとした手がハンマーの如く振り下ろされようとしていた。
「……っ！」
――木の床が木っ端をまき散らして陥没する。間一髪で避けるも、ワディムは次の攻撃を繰り出そうと両手を組んで振り上げる。ヤオは咄嗟に太股を触れたが、クナイは存在していない。為す術もないまま後ろ向きに跳躍し、ワディムの一撃をかわした。着地した体勢のまま1メートルほど滑る。埃が煙のように舞い上がった。
ワディムの両手は容赦なく床を打ち抜いていた。
「なんだァ？　ＢＢクラブのトップともあろうお方が防戦一方かァ

？　ひゃはっははは！　情けねェなあああ！　いつもの憎まれ口はどうしたんだよ！　おらぁ！」

ヤオが咄嗟に体勢を崩していなければ、造形品のような顔は今頃跡形もなかっただろう。ワディムの蹴りは頭頂部すれすれで空を切った。ヤオは崩れた体勢を何とか立て直すと窓へと走る。ワディムの太い指がそれを許すまじと伸ばされたが、一手遅かった。ヤオは床に落ちていたダガーナイフを掴みあげると、首の前で腕を十字に交差させて窓から飛び降りた。

「逃げンのかよォ！　ひゃ、ひゃはははっ！」

人気のない街外れにだみ声が響き渡る。

ヤオは美顔を憎々しげに歪め、舌打ちを鳴らした。

SODDEN TIGER-17-

「以上が調査報告です」
ノイズの音すら微かに苛立ちを含んでいるようだった。電子分解を経て伝わってくる機械的な音声は明らかに苛立ちを含んでいる。そして、ヤオは苛立ちなどでは形容しきれないほど忌々しげに言葉を吐き捨てていた。眉間には皺が寄り、口の端は下がっている。歯は暇さえあれば食いしばられていた。
「あの馬鹿者が……ヤオ君。これは立派な反逆罪だ。正式にワディム＝ウラディスラヴィチ＝ベズルコフの暗殺を命ずる。これ以上の漏洩はあってはならない」
通常よりも低いトーンでスピーカーを通過してきた音声がビリビリと室内を緊張させた。ヤオは不快そうな表情を崩さず「はい」と発音すべく口を開く。しかし音を発しないまま、考え込むように人差し指で整った唇を押さえた。
「どうかしたか、ヤオ君」
「ワディムは、新しい暗殺組織を立ち上げた気になっています。何でもガキを大量に買い取って、それを教育するつもりでいるとか。あの男、自分の力量を完全に見誤っているようです」
「そんなことは報告を聞いた時点で十分に理解しているよ、ヤオ君。一体どうしたんだ」
ヤオは先ほどまで憎悪と憤怒に歪んでいた顔を愉快げに綻ばせ、そしてくつくつと喉を鳴らす。スピーカーからは訝しげな呼びかけが漏れている。ヤオは漆黒の瞳でモニターを正視すると怖じけることなく言い切った。
「あれでも一応は俺の教え子……。ひとつ試してみたいことがあるのですが、お許し願えますか」
その声音は何か黒いものを孕んでいる。
しばらくの間、スピーカーから音声は聞こえてこなかった。ノイ

ズの喧しい沈黙が一陣の風の如く流れ去ると、電子的な声はやや愉快げに、また一種の諦めすら含んで返答を返した。
「なるほど、ワディムに己の力量を知らしめようというのか。だがな、ヤオ君。もしワディムが生き残ったらどうするのだ？」
「その時は、俺が殺します。あいつは、俺を殺したがっているようなので」
「なるほど。ならばそうするといい。だがひとつだけ言っておこう。情報の漏洩は許されない。もし買い取られた子供達が我々の情報を少しでも知ってしまったようならば、容赦なく殺せ。君の教え子にも伝えておけ」
「――はい」

SODDEN TIGER-18-

重たい銃声が立て続けに聞こえる。壁が影となって見えないが、何者かが銃の訓練をしているようだ。カウンターに片腕を預けている漆黒の男と、その傍らで楽しげにしている髭面の男は絶え間なく続く銃声に聞き入っていた。カウンターには見慣れたハンドガンが影を落としている。ヤオはそれを手にとって左太股にあるホルスターへ差し込むと、足を進めた。

射撃場では予想通りの人物が黒髪を振り乱して銃を乱射している。つい数日前までとんだへっぴり腰だった人間は目まぐるしい成長を遂げていた。双方に結い上げられた黒髪が射撃の衝撃でたなびく。思えばスーツ姿もなかなか様になってきていた。

「おい」

銃声は止まない。少女は一心不乱にトリガーを引き絞っている。場内は硝煙の臭いが立ちこめていた。的は文字通り蜂の巣となっている。

「おい、一旦やめろ」

ヤオが強めに制止して始めて、少女は指を止めた。最後の一撃で的は首から上が向こう側に折れ込んでしまった。

「あ、ヤオ！　申し訳ありません、気づきませんでした」

少女――シャンは申し訳なさそうに腰を折ると流暢な英語でもって謝罪を施す。たったヤオは数日間で人はここまで成長できるものなのかと疑問に思ったが、無駄話を省いていきなり本題を切り出した。

「――試験内容が決まった」

「は、はい！」

「ワディム＝ウラディスラヴィチ＝ベズルコフという男の”暗殺”だ。実戦的な試験だろう」

シャンの表情はあからさまに強ばった。何か言いたげに口を上下

して、そのまま口ごもって視線を泳がせる。
「何だ、問題でもあるのか」
「あの、ワディムさんというのはヤオの同期の方ではないんですか？　私にとっては先輩にあたる方です。どうしてワディムさんが……」
「何だヤツを知っているのか。――組織の情報漏洩と命令違反だ。用済みになる理由にこれ以上真っ当なモノがあるか？　とは言っても相手も元ＢＢクラブ構成員。手を抜いて勝てる相手ではない。――これは認可試験だ。ワディムを暗殺して試験に合格できたのなら、お前は晴れてＢＢクラブの構成員だ。しかし負けたのなら死ぬ。簡単だろう？　認められたいのなら命を賭けろ」
　シャンは不安げに眉をひそめて視線をあてもなく泳がせている。しかしその両手は――ハンドガンを握っているからかもしれないが――スーツの裾を掴んではいなかった。小さな唇が言葉を紡ぐ。
「で、でも……」
「何だ、まだ何かあるのか」
「そんな大きなお仕事、私のような新人が受けていいものなのでしょうか……」
「この任務は本来俺が片づけるべきものだ。まあヤク漬けとは言え相手も素人ではないしな。その辺の奴らには荷が重いんだろう。その上ヤツは依然としてＢＢクラブ構成員のデータを持っている。これ以上漏らしたら事だ。――ああ言い忘れていた。ワディムを始末するのは当然だが、情報を知ってしまった人間は容赦なく殺れ。これは上からの命令だ」
　幼さを残した顔が目に見えて狼狽した。組織トップにしか頼めない仕事だと上が判断したのにもかかわらず、それが新入りであるシャンの元に”認可試験”として突き付けられているのだ。狼狽しないはずもない。シャンは慌てて意見を申し立てようとしたが、蛇のひと睨みを受けてカエルよのうに縮みこんだ。
「そんなんで暗殺者になろうとしていたのか。とんだお笑いぐさだ。

やっぱりお前には無理だよクソガキ。荷物まとめて帰れ」
ヤオはそう言うと踵を返す。唇をすぼめて俯いていたシャンは咄嗟に腕を伸ばす――その手にハンドガンが握られていたことを忘れて。小さな唇が「あっ」と発音したとき、蛇の目が恐ろしい反射速度でこちらを振り向いた。銃を握った左腕を伴って。
「俺を殺すとは良い度胸だクソガキ。的みたいに蜂の巣にしてやろうか？」
漆黒の瞳が銃口の向こう側で温度無くシャンを睨んでいる。その眼光に気圧されて、シャンは数歩後退した。手違いであったことを弁明するべきなのだが恐怖のあまり声が出ない。視線すら鋭利な刃に成り得る。これがＢＢクラブトップの力量なのだと思い知らされる。
シャンはヤオの瞳を正視できず目線を泳がせていたが、しばらくして毅然と言い切った。
「ヤオを殺そうとしたわけではありません。銃を向けてしまったことは……不注意でした。すいません。ヤオ、ワディムさんの……いや、ワディムの暗殺、私にやらせてください。暗殺者として、彼を始末します」
ヤオはしばらく呆気にとられたかのように目を見開き、そしてまるで悪魔のような笑みへと表情を変えた。シャンを正確に捉えていた銃口を降ろしホルスターに差し込む。黒い革手袋をしている右手で口元を覆うと、耐えきれないという風に笑い出した。
「は、はははは！　お前から始末なんて言葉が出るとは思わなかった！　これだから教官はやっていて面白いんだ。ワディムもお前も……揃いも揃って愉快でしょうがない！　暗殺者として始末、か……。くっ、ふ、はははは！」
目の前で腹を抱えて笑っているヤオを見て、シャンは何故か恐怖すら感じていた。羞恥に顔を赤らめたり、怒りに眉を寄せるのなら分かる。しかしシャンは純粋に恐怖している。それはおそらく、世界がひっくり返ったって笑いそうもなかった冷酷な暗殺者が涙すら

浮かべて笑っていて、その原因がシャン自身だったからだ。いわば嵐の前の静けさめいたモノを、シャンはちくちくと感じていた。
　刹那、シャンの体がガクンと崩れる。背中から射撃台に叩きつけられ、それに体を預ける体勢になってしまった。突然の事に驚き目を瞑り、何事かと目を開けたとき、シャンは言葉を失った。
「――お前みたいな半人前のクソガキに、できるのか？　暗殺なんて大層なことが」
　目の前で、光の一切灯らない蛇の瞳がシャンを覗き込んでいる。その漆黒の瞳孔には、唇から言葉の欠片しか紡げないでいるシャンの青顔が映り込んでいた。額には鉄の冷たい温度が。始めて間近に見たヤオの顔は、淀み一つ無い本当に陶器のような美しさだった。
　シャンはぎゅっと唇を噛むと、自分自身が映り込んでいる漆黒の瞳を睨め付けるように凝視して言い放つ。
「私はヤオの弟子です。――できます！」
　痛々しい沈黙。
　しばらくして、ヤオの細目が愉快げに細められる。口元もまた吊り上がっていた。シャンの額に突き付けられている銃は退く兆しがない。
「くっ……ふっ、は、あはは！　はは、はっ、あはははは！」
　――バン。
「ならば期待して待っているよ、クソガキ。お前の暗殺……俺は師匠として大層楽しみだ」
　シャンのすぐ側では弾痕が煙を上げていた。頬の皮から数ミリ移動した程度の位置である。濡れた眼球が痙攣しているかのようにビクビクと動いていた。
　ヤオは銃をホルスターに仕舞い、靴音を響かせながら行ってしまった。射撃場にはずるずると射撃台から滑り落ちていくシャンただひとり。目も口も目一杯開かれた可憐な顔は、今更になって冷や汗が噴きだした。

SODDEN TIGER - 19 -

初めて見る繁華街を、場違いな少女がひとりきっちりとしたスーツ姿で歩いていく。街行く人々は指を差したり口笛を吹いたりと様々だが、少女はそんなものに見向きもしなかった。

少女――シャンは先ほどからずっと記憶を反芻しては首を振って打ち消す、の流れを繰り返している。心なしか頬が赤く、羞恥心が彼女の足を早めた。恋愛感情などというものではないことを、シャンは十分理解している。では何故こんなに恥ずかしく、そして頬が赤くなってしまうのか。おそらくそれは、ヤオが自分よりもずっと美人だからだ。初めて出会った時から思っていたものが、間近に見ることで顕著になってしまったのだ。シャンは再度首を振って記憶を霧散させる。そして俯いたまま繁華街の雑踏を縫うように歩いていった。

リガッチのアドバイスを聞き、弾は多めに持ってきた。銃はもちろんデザートイーグルを2挺。アクシデントにより出会った銃だったが、訓練すれば以外と使えることが判明したのだ。今ではこの衝撃がないと具合が悪いほどだ。あとはヤオにもらったクナイと――。

シャンの脚が歩むのを止めた。教わった情報によれば、目の前にそびえる廃屋めいた空きテナントが目的地――敵の牙城である。入り口のドアは倒壊していた。内装は木材やら木っ端やらが散乱している。

懐から銃を取り出すと、両手にそれを握りしめる。初めての任務で緊張しているのか、先輩と対峙することに怯えているのか、その手はかすかに汗ばんでいる。離さぬようにしっかりと握り直し、敷居を跨いだ。

――静かだ。人の気配はない。木材を踏みしめる音がよく響く。神経を張り詰めながら慎重に室内を探索していく。真っ直ぐ進んでいるとひどく老朽化した階段を見つけた。上の方は穴が空いている

ようなので、相当脆くなっているのかもしれない。あまり音を立てないようゆっくりと一歩を重ねる。最上段に深々と穿たれている穴を避けるようにして昇りきったとき、頭上に気配を感じた。
「らァっ！」
「……っ！」
到底捉えられない速度で振り下ろされるそれを跳ぶように避ける。しかし紙一重だった。結い上げていた黒髪の右房が髪紐を失ってはらりと落ちた。シャンは銃を構えて対象を睨む。暗がりの奥には正気を保っているとは到底思えない大男の姿が揺れた。
「なんだァてめぇ……どっかで見たことあんなァ……。蛇野郎はどうしたよォ、まさか尻尾巻いて逃げたか？」
「わ、私はヤオの訓練生、シャンです！　あなたの始末を命じられました！」
「――ン、だ、とォ……？」
大男を捉える2挺の銃がカタカタと震える。一方暗がりに留まっている大男――ワディムはぶるぶると震えだしたかと思うと階段の手すりをその拳で破壊してしまった。無惨な木屑となって階段を転がり落ちていく手すりであったものが虚しい。土煙のように埃が舞い上がる。ワディムはうずくまって肩を揺らすと唐突にいきり立って猛獣じみた咆吼を上げた。
「あの野郎……あの野郎ォォオオオォォオオ！　自分の手を汚すまでもないってかァ！　ちくしょうっ……ちくしょぉおおお！　訓練生だァ？　あ、あの野郎許さねぇ！　俺を馬鹿にしてやがる！」
鉄槌の如く震われた剛腕が壁をうち砕く。怒りと憎しみに支配されているワディムは、もはや人間らしさなど微塵も残してはいなかった。シャンはひきつった顔で飢えた獣のように咆吼を振りまくワディムを2つの銃口でもって捉えている。
「おいぃいいガキよおおぉ……てめぇ知ってるかァ？　あいつはなぁ、この俺と同期なんァ……そのくせによォ……アイツは俺の教官になりやがったんだよ！　何が推薦だ、笑わすんじゃねぇ！　それ

だけじゃねぇ、あいつは、あ、あいつはこの俺にとんでもねぇ試験内容を叩きつけやがったんだァ！」
　暗い室内に、怒声がよく響く。
「な、な、何が『お前が俺を殺そうとしているのは知っている』だァ！　し、しっ、しかもそれを、それを試験内容にしやがったんだよあの野郎はァ！　『何人連れて来てもいい。とにかく俺を殺してみせろ。お前が生き残ってたら合格にしてやる』って笑いながらいいやがった……！　だから俺はつるんでた奴らを大勢引き連れて殺してやろうと思ったんだァ！　そしたらよォ、アジトの警備がいねぇんだよ！　あの蛇野郎が試験だからって言って部外者入れやがッたんだよ！　あ、あ、あいつ俺たちを見て言いやがった……『なんだ、暗殺じゃないんだな』ってよォォォオ！　そう言ってアイツは……アイツはあああぁぁぁ！」
　けたたましい音と共に壁が崩壊した。ワディムは唐突に床を蹴るとシャンに拳を振り上げて突進する。シャンは注意が話の内容に向いていたので、一歩遅れた。直撃ではないものの、拳が左腕を掠った。しかしそれだけで十分だった。シャンの左腕は痙攣を起こし、思うように上がらなくなってしまっている。左腕は銃を掴んだまま、肩からぶら下がった。
「あの蛇野郎……あのクソ蛇野郎ォオオ！　俺だけを残して全員ぶち殺しやがった！　し、しっ、しかもナイフ一本でだ！　俺にナイフを突き付けて言いやがった！　『お前が生き残れば合格だったな、命乞いでもしてみるか？　一生懸命やったら許してやるよ。俺も一応教官だしな』ってなァ！　わ、わっ、笑いながら言いやがった！　あいつ……あの野郎ォオ！」
「――そういう、ことだったんですか」
　だみ声が喚き立てる中、澄んだ声が闇に吸い込まれていく。ワディムはうって変わったように静かになって左腕を押さえて顔をしかめているシャンを睨んだ。
「確かにヤオのすることは酷いかもしれません」

シャンは肩で息をしながら、初めてヤオと会ったときのことを反芻していた。容赦なく自分を殺そうとした冷酷な暗殺者。しかし彼は一度も自分の娯楽のために殺しをしようとはしなかった。そして射撃場でヤオの笑った意味。シャンはそれを何となく理解し始めていた。

「でもヤオは……いつだって”選択する時間”は与えてくれます！あなたは暗殺者という道を捨て、その上生き汚く命乞いをした。私は暗殺者という道を選び、あなたに命乞いはしない！　――私は何といわれようとヤオの弟子、あなたには負けません！」

SODDEN TIGER-20-

威勢良く啖呵を切ったシャンの体は情けなくもガタガタと震えていた。しかし表情は毅然とワディムを睨め付けている。
暗がりの向こうで大男の肩がぶるぶると震えた。
「て、てっ、てめぇ……も、も、もう一度言ってみやがれクソガキがァ……」
シャンはじっとりと汗ばむ手の平を固く握りしめ、言った。
「あなたのような臆病者に負けないって言ったんです！」
「こそクソガキがァァァアアアァァァアアア！」
獣の如く突進してきたワディムに躊躇無くトリガーを引き絞る。しかし実戦ではうまく照準が合わせられず、肩口や脇腹を掠るだけで致命傷にはならない。振りかぶられた拳を避けるべく、後ろに跳ねる。シャンが立っていた場所は一階が覗き込めそうな穴が空いていた。
着地が上手くいかず、シャンの体はバランスを崩して背中から床に倒れ込む。その隙を逃さず、鋼のような拳がシャンの頭蓋を破壊しようとふるわれる。小さな体はそれを横に転がって何とか避けたが、弾けた木片が白い頬を削った。シャンは何とか立ち上がると再度トリガーを引き絞る。しかしそれは盾のように前へ出されたワディムの剛腕によりまたもや致命傷を逃してしまった。
突進してくるワディムめがけて、咄嗟に左手の銃を投げつける。しかしそれは軽々とはじき飛ばされ、シャンは猪のごとく直進してきたワディムの蹴りをみぞおちに喰らい吹き飛ばされた。壁に叩きつけられ、剥がれるように床へと落ちる。血と吐瀉物の混ざったものが口からあふれ出た。骨が折れたかもしれない。
焦らすようにワディムが歩み寄ってくる。シャンは立ち上がろうと右腕を床に突き立てたが体はほとんど言うことを聞かなかった。動くたびに咳き込むだけだ。分厚い手の平がシャンの頭蓋を掴みあ

げ、軽々と持ち上げる。そのまま吊り上げるようにシャンの体をぶら下げた。肩からぶら下がる左手はポタポタと血を垂らしており、右手は頑なに銃を握りしめている。両足はぶらぶらと揺れ、数十センチ離れたところに影をもたらしていた。
「ぐっ……！」
「おーおー、ヤオの弟子っつーからよ、もうちょっと骨のあるヤツかと思ったぜェ！　だが実際は何てこたァねぇ……ただのクソガキじゃねぇか！」
「ク、クソガキって……言わないで……くださいっ！　私は……」
私には名前がある！　そう言いたくとも唇を通過するのは血泡だけだ。ワディムは大層愉快げに唇を捲り上げると、シャンをぶらさげている指に力を込める。
「っ……！　こ、このっ！」
ギシ、と軋む頭蓋に冷や汗を感じながら、神経経路の鈍っている体を精一杯に動かす。そんな様子さえ目の前の大男はニヤニヤと眺めている。
「おらァ、頭蓋骨がスイカみてぇに割れるぜ？　いいのかよ？　ひゃはああぁ！」
「がっ……ぁ……！」
一瞬脳がスパークしたかのような激痛が走った。ギリギリと万力の如く閉められていく自分の頭蓋。口から漏れるのは血のあぶく。ふと、脳裏にヤオの言葉が浮かんだ。
――裏の裏の裏、の裏をかけ。お前はそれくらいしないと使い物にならない。
シャンの目がカッと見開かれ、右手はワディムの太股を狙ってトリガーを引いた。閃光と銃声が一瞬にして収まったかと思うと、大男はシャンの体を放り投げて体勢を崩す。
「この野郎ォオォ！」
咆吼を上げた大男が再度壁に叩きつけられたシャンを蹴り上げる。だが幸いにも撃たれた脚を庇ってか致命傷にはならなかった。かろ

うじて握りしめていたハンドガンが蹴られた衝撃で手を離れ床を滑っていく。とてもじゃないが取りに行ける距離ではない。
しかしシャンは口の端を微かに吊り上げていた。
「ちくしょう、とっとと死にやがれクソガキがぁああ！」
ワディムが拳を振り上げたとき、その太ましい首筋に何か冷たいものが触れていることに気づいた。シャンの細い腕はワディムの首筋に伸びている。その表情は勝ち誇ったように笑んでいた。
「おいおい、何勝った気になってんだァ？　ヤオの真似かよ……つくづくうぜぇガキだぜ！　だがなァ！　てめぇはひとつ思い違いをしちまったんだ！　ひゃははぁ！　クナイはなァ、切るモンじゃねぇつき刺すもんだ！　お前の腕はな、俺の首筋じゃなくて喉を狙ってなきゃならなかったんだァ！」
「……！」
「残念だがなァ、お前のデータも持ってんだ！　お前ご丁寧に武器ンとこにクナイって書いただろォ！　お前がこういう手段に出ることは知ってたんだよォオ！　残念だったなクソガキィイイイ！」
噛みつくように怒鳴るワディムを毅然と仰視し、シャンは凛と笑っていた。血に汚れた唇がかろうじて言葉と理解できるものを紡ぐ。
「ヤオは、裏の裏の裏をかけと、言いました。私はいつでもそれを忠実に実行しています……。これがクナイだなんて、誰が言いましたか？」
「ンだとォ……！」
ワディムは視線だけを動かして首筋を見やる。視界の端に映り込んでいたものはクナイなどではない。むき出しの剃刀だった。
「クナイは……私には少し重かったんです。投げるのには……。だから剃刀（これ）にしました。これはもちろん登録用紙には書かれていません。――それに私はクナイが投擲用の武器だってことくらい知ってます。私はあなたと違って師匠を尊敬していますから」
「ちっ、ち、ちくしょおおおおおお！」
細い腕が体に引き戻されたのと同時に、大男の首からは噴水のよ

うに鮮血が噴きだしていた。

SODDEN TIGER-21-

ギシギシと悲鳴をあげる体に鞭打って散乱した銃を回収する。
その際にふと上に続く階段があることを知った。より深い暗黒へと続いている階段は、不穏な空気しか流れ込んでこない。しかしこの先に進まなければいけないことを、シャンは雰囲気で感じ取っていた。
思いの外しっかりとした階段を一歩一歩、体を引きずるように昇っていく。動くたびに口から血が零れた。腹を押さえ、顔を歪め、それでも昇っていく。任務はまだ終わっていない。ヤオに認めてもらうには、任務を完璧に遂行しなければならない。情報を知ってしまった可能性のある子供達を、必要ならば殺さなければならないのだ。
やっと階段を昇りきった先には闇しか見えない。体がふらついたので壁に手をついてなんとか持ちこたえる。その時、ふと違和感を感じた。壁に、紙が貼り付けられている。壁づたいに歩いていくと、それが一面に貼り付けられていることを知った。しかし部屋が暗いのでその正体が掴めない。
ふと、小さい呼吸音が聞こえた。シャンのものではなかった。怯えているような呼吸音は、ひとつではない。
シャンはスーツの内から小型のライトを取り出すと、部屋を照らした。
「ひ、ひぃいいっ！」「殺さないでぇ！」
――泣きすがるような声が、暗闇に浮かぶ。
シャンは、凍り付いてしまった。まるで時が止まったかのように。呼吸することすら忘れていただろう。部屋の隅で怯えている十数人の子供は、どれも見覚えがあった。そう、孤児院で苦楽を共にした仲間達だ。ひどい暴行を受けて体中アザだらけだが、間違いはない。
しかしそれ以上にシャンを凍り付かせたのは、紙の正体だった。

壁――いや、部屋中に貼り付けられた紙はＢＢクラブ構成員のデータそのものだった。顔写真からプロフィール、住まい、武器情報まで全て克明に記載されている。情報を知ってしまったなどという陳腐なものではない。最早情報と共に暮らしていた、と言った方がいいだろう。

「え、あ！　も、もしかしてシャロンちゃん？」

「ほ、本当だ！　シャロンちゃんだ！　無事だったの？」

懐かしい声が、懐かしい呼び名がシャンの耳朶を揺らし、そして精神を揺さぶった。任務を遂行するためにこの子供達を殺さなくてはならない。しかしシャン自身の私情としてはかつての仲間を救い出してあげたい。手に握っているハンドガンがカタカタと揺れた。

「みんな……どうしてこんな所に……」

「あ、あのね！　私たちいきなりトラックに詰め込まれて気づいたら……。怖いおじさんが『お前達を暗殺者にしてやる』って言って、この紙を見せつけて『こいつらを殺すんだ、覚えろ』って言ったの……。わ、私たち怖くて……。シャロンちゃん、まさかこんな所で会えるなんて……」

シャンは、俯き唇を噛みしめたまま銃を構えた。悲鳴が重複する。聞き覚えのある声が泣き叫んでいる。シャンの脳内では孤児院での記憶が止めどなく再生されていた。シャンは音無く泣き出し、そして床へと頽れた。

「わ、私は……！」

――バン、バン、バン、バンバン……

突如鼓膜を叩いた十数回の銃声と、閃光。そして硝煙、薬莢。シャンが面を上げた先にはかつての仲間の――

「ぁ……――」

――死体が脳漿を垂れ流していた。

座りこんだまま、シャンは目を見開くことしか出来ないでいた。口がガクガクと痙攣して言葉を紡ぎたくとも紡げない。床に転がったライトは幸か不幸かかつての仲間の無惨な姿を照らし出している。

刹那、背後でガサ、と紙を踏む音が聞こえた。
「これで、任務終了だな。まさかワディムを殺せるとは思ってなかった。ほとんど相打ちのようなものだが、まあいいだろう。――試験合格だ」
呆然とすることしかできない顔が振り向いた先には、一切の表情を断ち切った造形品のような顔がある。ヤオが、ハンドガンを構えてそこに立っていた。
「何で、いるん、ですか……」
「何でって、俺は試験管だからな。立ち合わなくてどうする？　それにお前がヘマをしても困る。たとえば、昔の仲間だと知ってガキ共を見逃したり……な」
ヤオが冷酷に言い放ったのと同時に、シャンの細腕がヤオのスーツを掴んでいた。見上げる瞳は濡れて、血に汚れた頬には涙が伝い零れていく。
「どうして……どうしてですかぁっ……！　何でこんな……！」
「お前はさっきから当たり前のことを何故尋ねる？　”暗殺者だから”だろ。私情を挟んで良い職業だとでも思っていたのか？　こんなんで一人前と認めるのは教官として心苦しいな。やはりクソガキはクソガキか」
「……！」
シャンの銃が振り上げられる。しかしそれはいつの間にか弾かれ、部屋の壁にぶつかって落下した。
「はっ、お前もワディムと同じように”俺を殺せ”を試験内容にしたほうが良かったか？　お前は命乞いはしないんだろ？　なら合格は難しいな」
「ひどい……ひどいです……！　こんなのって……！」
ヤオはため息をつくとシャンを見下ろした。その目は多少苛立ちを覚えているようだったが、俯いて泣きじゃくっているシャンにそれを知り得ることなどできない。
「どこまでも甘ちゃんだなお前は。そんなんでこの先やっていける

と思っているのか？　――丸焦げになりたくなかったらとっとと此処を出るんだな。建物ごと情報を抹消する」
そう吐き捨てると、ヤオはスーツの内から何かを取り出そうとしたが、未だにへばり付いているシャンによってそれは叶わなかった。退かせようと肩を掴むがシャンは頑なに抵抗している。盛大な舌打ちが室内に響き渡る。
「おい、いい加減にしろよクソガキ。俺の邪魔をするなと何度言ったら分かるんだ――そんなに死にたいなら今お友達と同じように風穴空けてやろうか？」
冷たい声がシャンに降り注ぐ。ふっと仰いだ先には、出会った当初と同じ”障害物を見る目”があった。シャンは背筋を舐めあげた冷たいものと恐怖心に腰が抜けて場にへたりこんでしまった。ヤオはスーツの中に入れっぱなしだった手を表に出す。その手にはライターが握られている。
「先に此処出てろ。また邪魔されるのはごめんだ」
カチという明朗な音に併せて灯った仄かな灯りはゆらゆらと揺れていた。
シャンは口元を押さえて涙を流しながら、ヤオの視線から逃れるように立ち去っていく。ふらつきながらも壁を伝って階段を降り、やっとの思いで建物内から外へ出たとき、3階の窓から橙色の光が漏れ出していた。

SODDEN TIGER-22-

海色の瞳が、片眼鏡の奥で何かを凝視している。
豪華なソファーに腰掛けて紙の山を散乱させている英国紳士は、興味深そうに顎を撫でた。白い紙に綴られている細かい文字。そして右上に記載されている不健康そうな男の写真。英国紳士は薄く笑みを湛えながら「ふむ」と呟いた。
「この男、面白い。実に面白い。まず中国人というだけで嫌悪の対象だというのに、まさかここの出身とはな……。いやぁ実に面白い。――ふん、嫌な目つきをしている。蛇のようだ」
周りに物々しく並んでいる男達は、主の呟きに反応しない。まるで機械のように引き締まった表情で、ただ前方のみを見ていた。
英国紳士は気にせずに続ける。
「ＢＢクラブか、おもしろい。少し挨拶しておいてもいいだろう。――とりわけこの男は念入りに挨拶しておけ。全く持って虫酸が走る」
恭しく一礼をした部下達の間を通り抜けて、今しがた部屋に入ってきた男が英国紳士の前に膝をついた。その様子はまるで騎士を思わせる。しかし彼が膝をついている相手は決して”正義”ではない。
「ワディム＝ウラディスラヴィチ＝ベズルコフがＢＢクラブの構成員により暗殺されました。１２人の子供達も同様です。空きテナントは全焼」
「さすがはＢＢクラブといったところだな。裏切り者は容赦なく切り捨てるか。――まあいい。あのような男にはなから期待などしていなかった。むしろ始末していただいて好都合。大きな埃がまたひとつ掃除されたというわけだ」
英国紳士は満足げに笑む。優雅なクラシックにそぐわぬ黒々とした笑みだった。
「我々ファミリアの勢力内で勝手は許されない。ＢＢクラブ殿には

その辺を弁えてもらわねば困るな」
荘厳なシンバルがスピーカーの奥で打ち鳴らされる。
それはまるで雷にも似た、凶兆のようだった。

LOOK UP TO BLACK -1-

ザ、と強い風が少女の頬を打ち付ける。
重苦しい雲が太陽を遮ってしまっているこの場所は、湿っぽく陰気だ。しかしそれが穏やかで静かな雰囲気をつくるのに一役買っていた。木枯らしが冷たい。形の整った灰色が林立する。少女は控えめな配色の服を着て、その胸に花束を抱えていた。
「小さくて、ごめんね」
少女がしゃがみ込み花を置いた先にはドイツ語で文字が刻まれている。少女の置いた花の色が灰色によく映えた。花弁が一枚、木枯らしにさらわれていく。赤がモノクロの世界を漂い、舞い上がり、また漂い。そうして行き着いた先には人が立っていた。花弁はその人物の傍らで地面へと落下し、また飛ばされていく。
その人物は喪服を纏っていた。顔も黒いベールによって確認できないが、豪華な金髪が風に流されている。その美しい金髪を除けば、全身が黒で埋め尽くされていた。スカートであるところを見ると女性だった。佇(たたず)まいは優雅だ。淑女、という言葉がしっくりくる。長いスカートもまた風に流されてはためいていた。
「貴女も、お墓参りですか」
唐突に、喪服の女性が声を発する。少女は最初自分に話しかけられているものではないと思いこみ、返事をしなかった。しかしその質問に対する返事はおろかまわりに自分の以外の人が居ないことに気付き、慌てて返事を繕う。
「は、はい。お友達が、死んでしまったので……」
少女はそう口にしてハッとした。不思議そうに唇を触れる。少女は自分が何の違和感もなく母国語で返答してしまったことを疑問に感じた。記憶を返すと、喪服の女性もまた少女の母国語を用いていた。ここはアメリカ、英語圏である。だというのに女性は明らかに少女へ向けてドイツ語でものを尋ねた。ただ単に英語が話せないの

か、それとも――。
少女はほんの少し警戒して、女性を見る。
「お友達ですか……。それは寂しいことですね。ええ、本当に寂しい。人は孤独に弱い生き物ですから」
「はい、とても悲しいです。守ってあげられなかったことが悔しいです」
「……人は人を守れなどしませんよ。けれど自分自身は守ることが出来る。自分を守ることによって、他人を守ることに繋がるんです。――その逆も、また然り」
女性はまるで詩でも口ずさむかのように、言葉を並べた。流れていく言葉は実体を持たず、頬に吹き付ける風によって飛ばされていく。まるで記憶に残らない。とても儚い。少女は、女性の醸し出す不思議な雰囲気にぼんやりとしていた。夢の中に佇んでいるかのような心地で。
「貴女は今、迷っていませんか？　お嬢（フロイライン）さん。ポーカーフェイスというのは、時として相手に感情を示す最高の手段となり得る……何か、考え込んでいるのでしょう？」
少女は驚かなかった。この女性は他人の全てを見透かせる、そういった雰囲気を持ち合わせていたからだ。なので、少女は女性が自身の内心をピタリと言い当てていたこともさして不思議な事とも思わなかった。まるで魔法にかかったかのように、ぼんやりと女性を見ている。
「私は……分からないんです。今自分のしていることが正しいのか、今自分が追いかけているものが本当に正しいのか……。思えば、私は何も考えないまま前だけを見てきました。走っている道が間違っているだなんて思いもしなかった。それが今……いきなり降りかかってきてしまって……」
自分は見ず知らずの人間に何を喋っているのだろう。少女はそう自身を諌（いさ）めたが、まるで体が思考と分裂でもしてしまったかのように制御できない。寒さにかじかむ唇はお構いなしに言葉を紡いでい

く。女性はそれを黙って聞いていた。
「何が正しいのか、分からないんです。隔離されて生きてきたから……。間違っているんじゃないかと、怖くなってしまって……」
「善悪の秤というのはいつの世でも曖昧です。常識という物差しがあっても、それで測ったものが全て正しいとは限りません。……ただ、貴女は迷宮から逃れようとして、さらに迷い込んでいるように思います。そんなときは、空を仰ぐといいでしょう。出口は、自ずと見つかります。――正義、対して悪。喜び、対して悲しみ。生、対して死。万物には裏があり、表があり、その2つは切り離せない。貴女はそれを認めることができないのでしょうね」
女性の言葉は少女の耳朶を揺らしたが、脳に届く前に灰となって霧散していく。少女は焦点の合わない瞳を、風に揺らされている花束へと置いている。小さな唇が言葉を並べた。
「空を仰ぐ時間すら与えられないのなら、どうしたらいいでしょうか」
「その時は、歩み続けるのが良いでしょう。迷い、戸惑い、彷徨い……。しかし出口のない迷路はない。全ての行き止まりを経験してしまえば、出口なんてあっという間に見つかるものです」
少女は無表情だった。まるで仮面でも被っているかのように。風にはためく前髪が視界にちらついても、それを押さえようともしない。まるで人形の如く静止していた。
「可愛らしいお嬢さん。決して感情を閉ざしてはいけません。扉を閉めたが最後、内には悪魔が住み着いてしまいます。楽しければ笑い、悲しければ泣くと良いでしょう。そうすることによって、貴女は歩みを止めずに済むのです。――知っていましたか。まったくの無感情の人のことを、ラテン語で”ニル＝アドミラリ”というのですよ」
少女はふと面を上げた。未だぼんやりと焦点の合わない眼で女性を見る。木枯らしが前髪を流したが気にはしなかった。
「貴女は、笑っている顔が一番素敵ですよ。あまり、考えすぎない

で。答えはすぐそこにあるのです。……また迷ってしまったのならお会いしましょう。貴女が会いたいと思うのなら、私はいつでもここに来ます。では、Ｂｉｓ（また）　ｂａｌｄ。――シャルロッテ＝アーベル」

少女がやっと微睡みから帰還しはっきりと女性を捉えたとき、もうその姿は視界には無かった。ただただ木枯らしが木々を揺らしているだけだ。林立する墓石が在るだけで、喪服の女性など最初から居なかったかのように忽然と姿を消してしまっている。少女は注意深く辺りを見回し、再度女性が立っていた場所を凝視した。やはり誰も立ってなど居ない。誰かが立っていた、という痕跡すらない。

混乱した思考を正そうと、額を押さえる。その手は寒さのせいで少し悴んでいた。少女は記憶を反芻していくが、どうにも曖昧だった。女性が最後に口にしたこともうまく思い出せない。ただ強く記憶に残っているのは、”空を仰ぐ”という一節だった。迷ったら空を仰げと、女性はそう言っていた気がした。

少女は不安げに眉をひそめると、枯葉が舞い散る墓地を後にした。

LOOK UP TO BLACK-2-

キッ、とブレーキのかかる音が闇夜に浮いた。
黒塗りの高級車が物々しい警備の中エンジンを切る。運転席のドアが開けられると小柄の男がいそいそと車を降りてきた。上等なスーツを着ているがどうにも様になっていない。無骨な周囲の警備達は、男の様子に苛ついたり不安を感じたりと様々だ。男は足早に車の反対側へと移動すると、おぼつかない手つきで後部座席のドアを開ける。もしもそこに居るのが忙しない小柄の男などではなく燕尾服の似合う優美な男であったなら、場はたちまち厳かな空気に包まれただろう。しかし現実はどうにも状況を安っぽい三文芝居のようにしてしまっていた。
車から一定の距離をもって取り囲んでいる警備の男達は、各々ため息をついたり舌打ちをしたりと散々だ。しかし、その空気は後部座席から現れた美女によって打破された。
現れたのは小柄の美少女だ。桃色の頬紅が若々しさに拍車をかけている。オーガンジーの重なる薄紅色のドレスがよく似合っていた。黒髪は軽く巻かれており、それはほんのりと豪奢なイメージを添えている。触れれば溶けてしまいそうな可愛らしさである。男達はしめやかに俯くその少女に釘付けとなった。男達は普段からここに運ばれてくる数多くの女達を見てきているが、その洗練された審美眼でもってしても「素晴らしい」と言わしめるほどだ。
しかし今宵運ばれてきた女は1人ではなかった。
少女に続き車から現れたのは、深紅の中華服を纏った線の細い女だった。小さく可愛らしい少女とは対照的な、長身の色っぽい女である。漆黒の髪は結い上げられずに腰元まで流れていた。体つきが細いというだけで、胸が大きい、腰つきが美しいなどというわけではない。しかし場の男達全員が彼女を見た。そして息を呑んだ。「有り得ない」と口にする者や、ため息を漏らす者まで居る。女の顔

は、この世のものとは思えないほど整っていた。作り物めいているが、作り物よりも精巧で完璧だ。最早女性として美しいという限度を超えている。

「ささっ、お二方！　こちらでございますよっ！」

2人の女性は忙しない従者に案内され、館の中に入っていった。その背中を見送る数多の視線がため息と重なっていた。

豪奢な廊下を、女2人と男1人が歩いていく。長い廊下だ。人気は無く、音も無い。ずっと先から甘い匂いがする。しかし匂いの元へたどり着くにはまだまだ廊下を進んでいかなければならない。

「――おい」

ふと、不満げな小声が聞こえた。落ち着きのない従者はわざとらしく広げた手を耳の後ろに添えた。少女は中華服の女と従者に挟まれて居たたまれないというようにそれぞれを見比べている。その表情は今にも泣きだしてしまいそうだ。

「はて、たった今見目麗しい女性のものとは思えぬ声が聞こえたのですが気のせいでしょうか？」

「こんな茶番、いつまで続ける気だ」

「女性がそんなお言葉遣いでは困りますな。ほら、笑って笑って」

中華服の女は眉間に皺を寄せたが、それきりだった。少女はおろおろと双方を見続け、従者は楽しげに笑っている。殺気と脳天気に挟まれてしまった哀れな少女は、最早涙を我慢するのに精一杯だった。何重にも重なったドレスのスカート部分をきゅっと握っている。巻かれた黒髪がふわりと揺れた。

――事の発端は数時間前だった。

曇りがちな空に影響されたのか、俯いている少女が質素な廊下を歩いていく。気が乗らないというような面持ちだったが脚はきびきびと動いていた。防音処理の為された重い扉を押し開ける。視界の先には2人の人物が立っており、その奥には砂嵐を映し込んだモニターがある。少女は扉を丁寧に閉めると先に到着していた2人の横

に申し訳なさそうに並んだ。途端に電子的な声音が耳朶を打った。
「突然の呼び出し、申し訳ないと思っている。だが今しがた入った情報でね。急ぎの仕事でもある。――ヤオ君、シモン君、シャルロッテ君。君たちを呼びだしたのはもちろん仕事の内容を伝えるためだ。今回は3人共同で行ってもらう。今夜、現段階でアメリカ最大の勢力を誇るカルロスファミリー、その幹部が”嫁探し”と銘打って女集めをする。それが今回のターゲットだ。――ドリン＝インク。幹部といっても権力を笠に好き勝手やっている男だ。小物に等しい存在だよ」
　砂嵐を映し出していたモニターが瞬発的な電子音の後に男の顔を映し込んだ。人相の悪い男だ。体格は良いが肥満とまではいかない。
　少女――シャンはふいにマザー・ピッドの存在を思い浮かべて口の端を下げた。隣に立っているヤオが同じように口の端を下げたことをシャンは知り得る由もない。短髪の男がめんどくさそうに頬を掻く。そして言った。
「小物とは言ってもカルロスファミリーの幹部でしょう？　そんじょそこらの汚い金持ちとはワケが違う。警備だって大勢居るでしょう。そんな人物を、そんなに簡単に始末できますか？」
「君の言うとおりだ、シモン君。ドリンはかなり前から暗殺依頼を受けていたのだが機会がなかったのだ。ただ今回は違う。”嫁探し”だ。たとえそれがただの女漁りであったとしても、多少気を許しているのには違いない。寝室まで連れて行ってもらえるなら万々歳だ。そのまま悟られぬよう始末しろ」
　いまいち納得がいかないと言いたげな男のそばで、可憐な少女と顔の整った青年が硬直している。冷凍保存でもされてしまったかのような2人をよそに、話は淡々と進んでいった。――そしてその話は、ヤオに決定的な絶望をもたらした。
「ですが我々3人でやれといっても、シャンちゃんはまだまだ新米でしょう？　そんな大物の始末なんて任せて大丈夫なんですか？　それに俺やヤオさんはどうやって潜入すればいいんですか？」

「誰もシャルロッテ君だけを潜入させろとは言っていないぞ。ヤオ君を女に見立てて付き添わせればいい。シモン君はその2人の案内役として潜入し、適当にはぐらかして留まっていろ。ドリンに幼女趣味があるという噂は聞かないが……シャルロッテ君がターゲットのお気に召したのなら、それは腕の見せ所だな。頑張ってくれ、シャルロッテ君」

返事は無かった。代わりにどんよりとした空気に押しつぶされて項垂れる少女と――青年の姿がある。しかし電子的な音声は室内の状況などに目もくれず、いたって事務的に話を進めていった。

「小物と言えど幹部は幹部。他組織の重鎮等が出入りしている可能性も否めない。慎重に事を進めてくれ。こんなチャンスは滅多にない」

LOOK UP TO BLACK -3-

――という理由で、可憐な少女と妖艶な美女とその従者が廊下を歩いているワケである。

妖艶な美女――もといヤオその人は、薄紫のルージュが引かれた唇を精一杯引きつらせて呪いの言葉を吐き捨てる。廊下に盗聴器の類が仕掛けられている可能性すら忘れ去って、明らかな”男の”声で飄々と笑うシモンに文句を叩きつける。その刺をむき出しにした言葉の数々をひょい、と避けると、短髪の従者は少女に話を振った。

「シャルロッテお嬢様。このような凶暴な口の訊き方、どう思われますか？　ドスの利いた低い声、男のような言い回し。とてもじゃありませんが女性とは思えませんねぇ」

「え、あ……あの」

黒い巻き髪を揺らして、少女があたふたと言葉を繕った。下手に口を滑らせては首が飛びかねないからだ。少女――シャンはしまいには言う口を塞ぎ、ドレスを掴んでは下を向いた。ローラの見立てたドレスである。ボディラインの目立つ――ヤオのような――ドレスでなかったことに心の底から安堵していた。

一方、男とは思えない細さを惜しげもなく見せつけているヤオは相当ご機嫌斜めだった。決して女らしいと言えない歩き方は深紅の中華服と不釣り合いだ。至る所に為された金属の装飾が心地よい音を奏でているが、それはヤオの行動が女らしいしめやかさを排除している証でもある。

「ヤ、ヤオ……。その、綺麗、ですよ？」

「それが褒め言葉を通り越してけなし言葉になっていることくらい、分かるだろ？」

「はい。ごめんなさい……」

シモンが笑いをかみ殺しているのが分かった。シャンはもう為す術を失い無言で歩いていくという選択肢を選んだ。

「さぁさお二方、パーティ会場へのご到着ですよっと！」
シモンが一歩先で恭しく膝をついている先には、あれよこれよと着飾った数多の女が香水の匂いを振りまいていた。シャンは初めて見る人の多さに辟易し、ヤオはあからさまに不快だという表情をしている。シモンが小声で「笑顔笑顔」と諭すと、眉間に皺の寄っていた美顔が引きつった笑みに変わった。
「す、凄い沢山いますね」
「当たり前だろ――」
「はい、ちょっと待って。あなたはたった今から魔法をかけられました。声の無くなる魔法です」
ヤオが吐き捨てるかのように紡いだ一言をシモンの芝居がかった口調が遮る。わざとらしくウィンクをしながらすぼめた唇に人差し指をあててヤオを仰ぐ。ヤオはいつもより小さめに舌打ちをして、それきり声を発しなかった。
「どうして声がなくなっちゃうんですか？」
「これはこれは、シャルロッテお嬢様。このような美しいお方でも口を開けば獅子も震えかえるような低音ボイスを発してしまうのですよ。それでは纏ったものも剥がれ落ちてしまいます」
シモンはかなり遠回しに説明したが、要は声は男のそれなので喋ってしまうと性別がばれると言いたいらしい。シャンはなるほどと言いたげに大きく頷くと、ふとヤオに視線を戻してみた。唇をきゅっと閉じている彼を確認し、やや困り気味に言葉を紡ぐ。
「あ、あの、ヤオが喋れないのはちょっと不安なんですが……」
「おや、何故ですか？　シャルロッテお嬢様」
「私、こんな人が多いところ始めてで……。その、指示を仰がないと……」
「その辺はわたくしめにお任せあれ。困ったときの従者でございま――」
芝居がかった口調に併せて大げさに一礼をしたシモンが、突然何かに引っ張られたかのようにつんのめった。調子良さそうに笑って

いる従者の目の前には大柄でスキンヘッドの男が立っており、従者の襟元を掴みあげている。サングラスの向こう側では殺気だった視線が見え隠れしていた。
「ここからは関係者以外立ち入り禁止だ。お出迎えは外で待っていてもらおうか」
シモンは苦笑いと共に降参のポーズをとっている。一方大柄な男はヤオに一瞥くれると口元を綻ばせ、シモンの襟をぐいと引き付けてから強調するように言う。
「ま、お帰りいただくのは二人のうちお一人かもしれないがな」
「そ、それはそれは！　ではわたくしめはお外にて待機しておりますね！　ではシャルロッテお嬢様、それからミス……あー……――」
涙目で訴えているシャンになど目もくれず、調子のいい従者は言葉を詰まらせて辺りを見回している。胸ぐらを掴まれて元来た道を押し返されそうとしているとき、ヤオが左耳の上あたりに髪飾りとしてつけている白いコサージュが目に付いたようだった。お調子者がどんどんと遠くなっていく。お調子者は大柄の男から顔を覗かせるようにヤオを見ると、叫んだ。
「えーと、ミス・シェーファ！」
雪花（シェーファ）という単語を何処で知り得たのか、ヤオは大層疑問に思った。シャンが情けない顔で見続けていたシモンの姿はとうとう消えてしまい、戻ってくるであろう兆しなど微塵もない。シャン――もといレディ・シャルロッテと、ヤオ――もといミス・シェーファは色とりどりのドレスが蠢く中に立ちすくんでいた。
「えと、あの……ヤ――こほん、シェーファ。一体、どうしたら……」
シャンは眉目秀麗な女達が右往左往している様をぼんやりと眺めつつ返答を待ったが、ふいにヤオは言葉を発せないという事実を思い出した。焦ってヤオを仰ぐと、端正な顔立ちがなにやら考え込んでいる。しばらくして、ヤオが身を屈めて、小声で言葉を紡いだ。
「怪しまれない程度にうろついていろ。ターゲットを見つけたなら

うまく取り入って寝室にでも連れて行ってもらえ。――それからの手筈は分かっているだろう？　失敗はするなよ。最悪の場合事後になってもいいから始末しろ。分かったな」

シャンが声に出して引きつったのをよそに、この世のものとは思えぬ傾国の美女は雑踏に消え失せていった。

シャンは真っ青になっていた顔を横にふって笑顔を繕う。もうヤオの姿は完全に見失っていた。ふと、シャンの脳裏に数日前の出来事が浮かぶ。かつての仲間を、家族とも呼べる存在を無慈悲に銃殺し、その上焼き払った冷酷な暗殺者。実を言うと、アジトへ帰還後シャンとヤオはほとんど言葉を交わしてはいなかった。もう訓練も無いので会うこともなかったのだ。ヤオは何とも思っていないようだったが、シャンは気まずかった。今回の任務も気乗りしなかったのはそのため――だけではないが――である。仕事だと割り切らねばならないことを、シャンは重々理解している。しかし理性が納得していても本心が納得していない。

シャンはふと、昨日出会った女性を脳裏に思い浮かべていた。木枯らしに佇む喪服の女性。彼女は、迷ったら「空を仰げ」と言っていた……。

仰いでも何もない。高い天井と目に眩しい豪奢な照明があるだけだ。シャンは軽くため息をつくと雑踏の中に足を進めた。

LOOK UP TO BLACK -4-

ターゲットの姿はなかなか見当たらなかった。
ヤオは内心舌打ちをしたい気持ちでいっぱいだが、何とかこらえた。先ほどから香水の匂いが鼻から伝わって脳をガンガンと叩いてくる。その上甲高い女の声。許されるならば全て斬って捨ててしまいたい、そう考えては首を振る。
ふと、穏やかな声がヤオの耳朶を揺らした。
「おや、レディ。何かお困りごとですか？」
下を向いて首を振っていたヤオの頭上に女のものではない声が降りかかる。ハッとして面をあげると、そこには片眼鏡をした壮年の男が微笑みを湛えていた。女ばかり集められた会場内に男の姿とは異質である。ヤオは少々警戒しつつも外面だけは女らしく装った。一瞬声を発してしまいそうだったが、何とか抑えた。
「口の不自由な方でしょうか。慎(つつ)ましやかなのもまた美しいもの。ミスター・インクをはじめ会場の人間全員があなたに注目しておられましたよ。こう間近で拝見してもお美しい。ご出身は中国ですかな？」
ほんのりと微笑んでいる唇をそのままに、美女は軽く頷く。内心では罵詈雑言の嵐なのだが、片眼鏡の男はそれに気づくはずもない。片眼鏡の男は絶えずにこにこと微笑んではいるが、どことなく異様な雰囲気を背負っていた。他人を見透かすような目が片眼鏡の奥でくすぶっている。
「はて……あなたとは何処かでお会いいたしましたか？　常套句で申し訳ない。あなたのような麗しい女性を忘れるはずもないのですが……。失礼ですが繁華街等に行かれることはありますか？」
絹糸のような黒髪をしめやかに揺らして、美女が否定の意でもって首を振った。
男は考え込むように片眉を上げ、顎を撫でる。

「これは失礼。私の知り合い……いえ、知り合いだった人物にマザー・ピッドという男がいるのですが、お心当たりはございますか？」
一瞬だけ、美女の表情が動いた。ヤオは気取られないように男を観察する。英国紳士のような優男だ。そんな人間が裏社会で台頭していたマザー・ピッドを知っているのはおかしい。ヤオは先ほどよりも男の言動に注意を払った。表面上では微笑んだまま首を横に振った。
「そうですか……いやはや重ね重ね失礼。――ああ、思い出しました。とある知り合いの男に似ているんです。レディに対して男に似ているなど失礼なのでしょうが……いやはや本当に似ている。彼もまた中国人でして、やや不健康そうな男なのです。名前を、ヤオ、と言います。」
男の瞳に挑発的な何かが灯る。ヤオは表情こそ笑っているものの明らかに殺気立っている。男は片眼鏡の奥で楽しげに目を細めると、まるで詩でも吟じるかのように言葉を並べた。
「――名前、とは言っても偽名ですがね。本名は……」
――ガシャ、ン。
男の言葉は騒々しい音に掻き消されてしまった。ヤオと男の間には割れたグラスが光を反射させている。透明な液体が床を濡らす。ヤオが落としたのだ。よく磨かれたフロアの上に小さな水たまりが出来上がっていたが、誰もそのことに気づかない。誰かが片づけに来る兆しもない。
男はしばらくの間呆気にとられたかのような表情でヤオを眺め、そして微笑んだ。
「気を悪くしてしまったのなら申し訳ない。私は今宵の主役であるミスター・インクにお誘いいただいた礼も知らぬ不束者でして……美しい女性を前に緊張してしまっているようです。――そうそう、今宵のパーティーの主催者であるミスター・インク……彼が所属している組織が近々緊急の会合を開くでしょう。場所はこの先にある廃工場……。私もそれに参加しなければなりますまい。何せ、私は

証言者となってしまうのですからね」
ヤオは心臓の高鳴るのを聞かれるのではないかと危惧している。流れていた曲は謀ったかのように静かな曲へと移行し、雑踏もどこかしめやかになっている。もしかしたら主催者の登場が近いのかもしれないが、今のヤオにそんなことを気にかけている余裕など皆無だ。
英国紳士は知っているのだ。ヤオの素性と、今夜の計画を。
「そんなに怖い目をなさらずに。美しいお顔が台無しだ……。なに、ちょっとした独り言と思ってくださってかまいませんよ。ほんの少し……穏やかでない話を小耳に挟んだので、ね。いやはやしかしレディの前で語る話ではありませんでしたかな」
男の表情に影が落ちる。まるで何かを試しているかのように。
ヤオはつくり笑顔すら満足にできなくなっていた。周囲の雑踏も、2人の間に流れる空気を払拭できないでいる。場に似つかわしくない英国紳士と目もくらむ絶世の美女が腹のさぐり合いをしている様は、はたから見れば獣と獣の戦いのようなのだろう。
英国紳士は、ヤオの口が開かないのを良いことに話を続けた。
「もし……もし仮にこのパーティーの主催者が亡くなったなら、一大事だ。この場にいるレディ達は証言者になりうる。しかし女性というのは恐ろしいものを見聞きすると震え上がって唇を塞いでしまうもの……。ここにいらっしゃるは大半が女性の方だ。恐らくは、何も言えなくなってしまうのでしょう。だからこそ、私が証言せねばなりますまい。――そんなとんでもないことは、喜劇の中で十分ですが、ね。そうは思いませんか、レディ？」
闇を湛えた海色の瞳と、同じく闇を湛えた漆黒の瞳がぶつかり合う。その一触即発の雰囲気を、黄色いざわめきが打破してしまった。女達が何やら興奮しているようだ。ヤオがふと背後を振り返ったとき、その正体と目があった。
「なんと……！」
ヤオを見つけるやいなや足早に近づいた男は紛れもない、ドリン

＝インク本人だ。モニターで見るよりも嫌らしい顔つきだな、とヤオは内心唾を吐いたが、表面はしっかりと繕っている。ドリンは何の断りも入れずにヤオの肩を抱えると、そのまま英国紳士風の男に下品なだみ声を吹っ掛けた。

「ミスター・ベイリアル。君もこんな美女を捕まえるとは隅に置けぬな。――ふむ、震え上がるほどの美しさだ。お前、名は？」

「そちらの方は口が不自由でいらっしゃいます。お名前は……そうそう、ミス・シェーファ。従者の方がそのようにおっしゃっていました」

「シェーファ……中国人か。いや、だがしかし美しい。口が聞けぬのもいいものだ。お前私の妻となりたいか」

ヤオは内心殺意と吐き気の入り交じった奇妙な心境だった。鳥肌を必死に抑えて頷く。残念なことに鳥肌は状況を省みず全身総出で嫌悪感を露わにしていたが、ドリンは気づいていないようだった。それこそ色欲しか見ていないといった雰囲気だ。

ドリンはヤオの――鳥肌の治まらない――肩を抱き寄せると、何のためらいもなく両腕にかかえた。そのまま見せつけるかのように雑踏の中を歩き回る。片眼鏡の男が大層楽しげに笑っている姿すら瞬く間に遠ざかった。

「喜べシェーファ。お前はこのドリンの妻となって永遠の幸福を約束されたのだ。さあこのまま寝室に連れて行ってやろう」

寝室――という言葉を聞いて、鳥肌がより一層強まった。先ほどシャンに嫌みを込めて言った言葉がヤオの脳裏に浮かぶ。げんなりとしながら流れていく人の姿を眺めていたとき、潤んだ目を見開いてぽかんとしているシャンを発見してしまった。そして目があった。ヤオは今晩このクズ野郎を始末した後首でも吊ろう、と思いついた。

LOOK UP TO BLACK-5-

「お前に伝えておかねばならないことがある、シェーファ」
趣味の悪い色彩をふんだんにあしらった寝室は、図らずもマザー・ピッドの寝室を彷彿とさせてしまった。色欲だけの人間というのはどうにも桃色と天蓋が好きらしい。そんな配色に漏れずしっかりと桃色であるベッドに、大柄の男と線の細い美女が隣り合わせて腰掛けている。男は美女の肩をしっかりと抱いていた。
「私はマフィアの幹部なのだ。アメリカで？１の勢力を誇るカルロスファミリー。その幹部なのだ……。お前のことは何があっても守り抜くし、愛し抜くつもりだ。しかし時には寂しい思いをさせてしまうだろう。許してくれるか？」
ヤオは、ゆっくりと頷いてやった。
いかにも紳士ぶったセリフだが、ドリンが目をかけた女全員に口にする常套句であるのは雰囲気で分かっていた。この手の男がひとりの女を愛し抜くはずがない。夜寝る相手さえいれば、それは誰だっていいのだろう。まだ正直に発言する分マザー・ピッドの方が幾分かかわいげがある……と思い立って、ヤオは心の内で首を横に振った。何度も振った。
「先ほどお前が話していた男はな、アトリー＝ベイリアルといって同じアメリカンマフィアであるクラウン＝ファミリアの大幹部だ。ヤツは恐ろしい男だ……何を考えているかまったく読めん。お前も十分気をつけるのだぞ」
美しい顔が頷こうとしてそのまま俯いてしまった。ドリンはあたふたと美女の顔を覗き込む。美女はゆっくりと面をあげるとドリンの肩に身を預けた。口元は薄く笑みを湛え、赤い紅ののった瞼は幸福そうに閉じられている。
ドリンは鼻から空気の塊を吹き出すと、美女をベッドへと倒し込んだ。――そして、小さな呻きをあげた。

ドリンの首筋には肉眼でかろうじて確認できる程度の針が刺さっている。美女――もといヤオはしばらくの間針を突き立て、頃合いを見計らって針を抜いた。傷跡は残っていない。ドリンの心臓もまだ動いている。しかしその大柄な体躯は骨でも抜かれた何かのようにふにゃふにゃと情けなかった。その体をベッドに残し、美しい暗殺者は何食わぬ顔で会場へ戻る。その過程でスキンヘッドの男に手振り素振りで”彼は寝てしまったので帰ります”という旨を伝える。スキンヘッドの男は「またか……」とぼやいた後、奥へと消えた。

一番の障害に成りうると予測していた英国紳士の姿は消え失せていた。残っているのは香水臭い雑踏だけだ。女達はそれぞれ甲高い声で人語ともつかない言葉を駆使してコミュニケーションをとっているので、ヤオが戻ってきたことに気づいている者は少ない。気づいていたとしても注目することはなかった。ヤオは未だ会場内で挙動不審に辺りを見回していたシャンを回収し、ごく自然に廊下を歩いて外へと出る。その間何の騒動も起きない。パーティーは依然として続いている。

「これはこれはお二方！　お帰りになられますか？」

いかつい男達に囲まれながら、本当に外で待機していたらしいお調子者がぴょんぴょんと飛びながら後部座席のドアを開ける。シャンがそそくさと乗り込み、後からヤオが続く。意味深なため息が何重にも重なっていたが、背後を振り返ることはしなかった。後部座席が閉められる。お調子者は再度ぴょんぴょんとしながら運転席に乗り込み、アクセルを踏み込む。大勢の男達が切なげな瞳で見送る中、車が夜の闇に吸い込まれていく。

――刹那、会場内から布を裂くような悲鳴が聞こえた。

「大成功ですね、ミス・シェーファ！　もう上手くいきすぎて怖いくらいですよ！」

口調そのものは明朗だが決して音量は大きくない声が、ヤオの眉間に皺を刻んだ。絹糸のような黒髪は失われ、適当に切りそろえら

れた黒髪へと変貌してしまっている。一方シャンはシモンの脇腹に抱えられてぶらぶらとだらしなく揺れている。3人はつい先ほど車を捨てて、類い希なる身体能力でもって木々の枝を移動していた。ガサガサと木の葉が鬱陶しいが、仕事の結果を確認するためにも必要な行動だった。

「――それはもういい。金輪際（こんりんざい）ごめんだからな、こんな茶番は」

低い声は明らかに不機嫌そうだった。

3人はかろうじて建物の入り口が観察できる程度の位置で身を潜めて上方から様子を伺った。静かな闇夜には怒声や叫声がよく響く。「犯人を～」と「あの女～」という出だしから始まる言葉が圧倒的に多いが、ごくたまにドリンの安否を示すような言葉が聞こえる。はっきりと聞き取れないが、雰囲気で察するにドリンは死亡したようだった。

蛇ならばそれらしく毒でもって首を狩る。ヤオは毒殺をあまり好まなかったが、今回は上からの命令なので従う他無かった。極細の針に仕込まれていたのは遅効性の毒と即効性の睡眠薬だ。それをうまく頸動脈に突き立てることにより、最初は眠っているが徐々に心臓の動きを停止させていく。ドリンは近頃持病からか突発的に気絶することがあったらしく、スキンヘッドの男が口にした「またか……」はそう言う意味を孕んでいた。ヤオが何の嫌疑もかからないまま会場を後に出来たのはそういうトリックがあるからだった。

「目標、予定通り死亡したみたいですね。生死の確認もしましたし、さっさとおいとましましょう」

「ああ――」

シモンがシャンを抱えたまま踵を返す。しかしヤオは呆然とその場に立ちすくんでいた。「ああ」と発音した口のまま動こうとしない。シモンが小声で呼びかけても微動だにしなかった。

ヤオの視線の先――木の葉の遮りが唯一空洞化している場所に、その男は立っていた。アトリー＝ベイリアル。優雅な佇まいの英国紳士が何処を見ているわけでもなくそこにいる。屈強な男達が忙し

なく右往左往している中、その男の周りだけ時が遅れて流れているかのようだ。全くの異質。すべてが歪んでいる。
ヤオはふと、その男と目があった――気がした。ベイリアルが立っている場所と、ヤオが立っている場所では相当な距離を隔てている。しかしベイリアルとヤオはしっかりと目が合っているようだった。ベイリアルは背後でばたばたと往来する男達をよそに、薄く微笑んで唇を動かす。
――廃工場だ
――明日この時間
――待っているよ
――Ｍｒ．ａｓｓａｓｓｉｎ
「――……っ！」
「ヤオさーん。どうしたんですか、急がないと見つかりますよ？」
ヤオが我を取り戻して背後を振り返るとシモンがシャンを抱えたまま顔をしかめていた。視線を戻すとそこには英国紳士の姿など無く、いかつい男達がばたばたと走り去っていくのが見えるだけだった。

LOOK UP TO BLACK -6-

「その話……本当だとしたら大変なことだよ、ヤオ君」
一度電子に分解され、再度音に修復されて形を成している声は一種の焦りをも含んでいた。小さな部屋には例によって砂嵐しか移さないモニターと不健康そうに隈を穿った青年がいる。青年――ヤオは口元を一文字に閉ざしているが、決して心穏やかな雰囲気ではない。
ヤオは、つい先ほど片づけてきた――不愉快極まりない――任務の報告をしている最中だった。その過程で奇妙な英国紳士と会話したことを告げたのだ。英国紳士の名前はドリンが口にしていたものを伝えた。刹那、電子的な音声はトーンを落としてしまったのだ。声の主は、ドリンの生死や仕事の過程などよりもその英国紳士ひとりの方が気になっているようだった。
「ベイリアル……アトリー＝ベイリアルか？　そんな大物が何故ドリン＝インクのパーティーになど赴いた……。ヤオ君、その人物は他に何か言っていなかったか？」
「彼は今回の仕事内容を把握していたようです。また、俺のことも知っていました。組織の情報が漏れていると見て間違いないでしょう。――そのことについて、ひとつ憶測が」
室内は無音に落ちた。しかしその静寂は話の続きを催促しているような節があった。ヤオは返答を待たないまま言葉を紡ぐ。
「先日組織の情報を持ち出した男――ワディムについてなのですが、情報屋の話に寄りますとワディムは”小綺麗な格好の男”と一緒に居たと。あくまで憶測の域を脱しませんが、その男がベイリアルであったなら……」
「そうでないことを祈りたいが……その線は濃厚だな。アトリー＝ベイリアル。クラウン＝ファミリアの大幹部だ。ワディムがドラッグを買っていたという繁華街は彼の統治下にある。その上、シャル

ロッテ君が元居た孤児院……そこの人身売買を指揮していたのもベイリアルだという噂だ」
「噂？　情報ではなく？」
「そうだ、噂だよ。――ベイリアル……いや、ファミリアという組織そのものが極秘なのだよ。しかし今やアメリカでは？2の勢力を誇る組織だからな、名前だって知れてしまうし、情報だって隠しきるのには限界がある。ただ、それらは裏付けがない。あってはならないんだ。だから噂なんだよ。限りなく事実に近い噂だ」
ヤオは唐突に、先日赴いた情報屋の言葉を反芻した。
『連中の名前を知っちまったとしても、決して口にしちゃならないんだ』
それは生き抜くための知恵に他ならなかったわけだ。徹底的な秘密裏を厳守する組織にとっては情報の漏洩が最大の汚辱。それが場末の人間ならばなおさらだ。しかし裏で権力をふるう以上は名だって知れる。それは”情報”ではなく、”噂”というオブラートに包まれて市場に舞い散っているわけだ。
電子音声はますます陰鬱そうに声音を落とした。
「まさかファミリアに情報が漏れるとは……ＢＢクラブ創始きってのピンチだな、これは。かといって迂闊に手は出せない。――そうか、それを知った上でヤオ君を挑発したのか」
ＢＢクラブもまた秘密主義を徹底している。そして全勢力において中立という立場を一貫している。だからこそ、情報を知ったという理由のみではベイリアルを標的に据えることは叶わなかった。ＢＢクラブは基本的には依頼のない殺しをしない。
ヤオの表情はほんの少しだけ崩れた。実に鬱陶しげな表情が美顔の上に露見している。
確かに組織の情報漏洩は一大事である。しかしヤオはそれ以上に、あのベイリアルという男が口にした言葉ひとつひとつに苛立ちを覚えていた。片眼鏡の奥で「お前を知っている」と言いたげにしていた瞳が印象的だ。

「あの男は明日、同地区内の廃工場にて会合があると言っていましたが」
「ああ、あるのだろうな。――アメリカンマフィアの幹部が一同に会するだろう。カルロス＝ファミリーの幹部が殺され、あまつさえ他勢力の幹部が近くにいたのだ。カルロスの大首領は黙っているわけがない」
「男……ベイリアルは俺に『待っている』と言っていました。わざわざ会合の有無や場所を伝えるあたり何か裏があるのではないかと」
電子音声は一瞬引きつったような声を漏らした。
「なるほど、それは紛れもない罠だろうな。――カルロス＝ファミリー、クラウン＝ファミリア、フィオレット、黒龍公司……。これら四組織の会合など、鼠一匹立ち入らせない厳戒態勢だろう。挑発に乗っても蜂の巣になるのがオチだよヤオ君」
漆黒の暗殺者は僅かに唇を噛んだ。黒い革手袋がギチッと音立てる。それはヤオが拳を握りしめたという事実を示していた。
電子音はしばらくの間沈黙を守っていたが、ヤオの表情を確認してか諭すような言葉をかける。
「依頼のない仕事はしない。これは組織の規則だよ、ヤオ君。珍しいな、君がそんな挑発に乗るとは」
ヤオは返答しなかった。
依頼がなければどんな悪党と言えど殺してはならない。これは中立を厳守するＢＢクラブの鉄則だ。ヤオもそのことは十分に理解している。しかし、彼にとってひとつだけ我慢ならないことがあった。それは組織の情報漏洩でも、挑発でもなんでもない。たったひとつ、”自分の過去を知っている”という点のみだ。
ヤオは無言を保ったまま踵を返し、重たい扉を押し開けて部屋を後にした。

LOOK UP TO BLACK -7-

部屋は白く煙っていた。
うすぼんやりと白みがかっている空気の中で漆黒の男が長椅子に腰掛けている。目つきの悪さはさらに拍車がかかっており、整った唇は短くなった煙草を挟んでいる。傍らには缶コーヒーが長椅子に影を落としているが、その飲み口に灰を落としている辺り中身は空なのだろう。
男は眉間に皺を寄せ、ただ霞んでいる虚空を眺めていた。しばらくして視線の先にあるドアが開いた。俯いたまま部屋に入ってきた少女は、部屋の煙っていることには気づいたが男の存在には気づいていないようだった。
「相変わらず情けないツラだな。何しに来た」
男が煙を吐き出すついでに並べ立てた言葉は少女の面を勢いよく上げるのに一役買った。少女は長い黒髪を振り乱して慌てている。着ている服こそ質素なスーツだが、顔と髪は先の任務から変化がない。化粧も巻き髪もそのままだった。
少女――シャンは胸の前で両手を振りながら弁明でもするかのように言った。
「あ、あの、ローラと待ち合わせていて……！　居るなんて気づかなくて、すいません！」
「床ばっかり眺めているからだ」
「は、はい。すいません」
シャンの弁明はぴしゃりと一蹴された。それ以降会話はない。沈黙と煙だけが部屋を支配している。シャンは恐る恐る一歩を踏み出して煙の発生源に近づいていく。焦点の合っていない目で煙草をふかしている人物の目の前で立ち止まると、申し訳なさそうに質問する。
「ヤ、ヤオ……あの、隣いいですか」

返答は思いの外早かった。
「――勝手にしろ」
男――ヤオはやはり少女に一瞥もくれなかった。ただただ虚空を眺めては煙を吐き出している。やや距離を置いて腰掛けた少女がチラチラとヤオを見ていようとも、どうでもいいという風に黙っていた。
重苦しい沈黙に煙が舞う。シャンは気まずいという思いと、先日の認可試験においての記憶も相まって落ち着きがなかった。しばらく俯いたまま煙草の煙に辟易していたが、しびれを切らして口を開いた。
「煙草、吸うんですか？」
「吸ったら悪いか」
「いえ、あの、始めて見たので……。ごめんなさい」
またもや沈黙。ヤオの言葉は明らかに「話すことはない」という意を含んでいる。シャンが繕う雑談の糸口は無慈悲にも切断されてしまった。最早術もなく、シャンは沈黙に甘んじる決意をした。だというのに、シャンが受け入れた静寂は脆くも打破された。
「お前、迷いがあるままで仕事できると思っているのか」
黒髪に覆われた目が見開かれる。シャンは面を上げはしなかったが、場の空気が変わったことは理解していた。それだけではない。シャンは、今まで経験したことのない奇妙な感覚が胸を焦がしていることに気づいていた。胸焼けのような不快感だ。しかし実体が分からないでいた。
ヤオはそのことに気づいてか気づかないでか、話を続ける。
「ワディムの一件……あの日からお前の中身は空っぽだ。何も考えちゃいない。何も見てすらいない。そんなんで仕事なんて出来るわけがない。ただでさえ情報が漏洩して大変なんだ。お前がヘマして捕まって、拷問なんかにかけられてペラペラ情報話されちゃたまったもんじゃない。――要するに迷惑なんだよ。ただでさえ甘ちゃんなクソガキがこれ以上バカやったら取り返しのつかないことになる。

分かるか？」
シャンは返答しなかった。いやに静まりかえった室内に忌々しげな舌打ちが響く。
ヤオは短くなった煙草を空き缶に落とすと、スーツの胸ポケットから煙草のパックを取り出す。それを数回乱暴に上下させたが音は無かった。パックは無惨にも握りつぶされ、部屋の隅にあったくずかごへと投げ入れられた。
ヤオは煙草が空になった鬱憤を晴らすが如く、シャンに向けて辛辣な言葉を並べ立てた。
「お前……未だに”お友達”を殺されたことにヘコんでんだろ。――バカかお前は。そんなことでヘコんで仕事疎かにしてるようじゃどうしようもない。お前そのうち『私は人を殺したくない』なんて言い出すようになるぞ。そもそもお前はまだひとりで仕事したことないんだろ？　ワディムを殺してそれきりだ。この先、ガキの始末なんていくらでもまわってくる。綺麗事なんて言ってる暇もない」
ヤオは、白く霞んでいる室内をぼんやりと眺めている。もしシャンに一瞥でもくれたのなら気づいたかもしれない。シャンの両手がギシギシと握られていることに。小さな手はスーツを掴んではいなかった。ただ拳をつくってそれを震わせている。――泣いては、いなかった。
ヤオは返答の兆しがないことを確認したのか席を立つ。重みが軽減された長椅子は小さく軋んだ。明朗な靴音がしばらく続いた時、シャンが口を開いた。発せられたのは恐ろしいほど暗く低い声だった。
「――待って、ください」
靴音が止まる。
ヤオはしばらくシャンに対して背を向けていたが、沈黙が両者の間を一薙ぎすると背後を振り向いた。その目は怒りも、不快感も湛えてはいない。ただ黒いだけだった。
シャンは握りしめていた拳をそのままにして面を上げる。可憐な

表情は歪んでいて、怒りを目一杯に体現している。
「確かに私は綺麗事を言っているかもしれません。甘えた考えでもあるでしょう。――ですが、そこまで冷徹になる必要があるんですか。ヤオは、ただ殺しを楽しんでいるんじゃないんですか」
　まるで針のように痛々しい静寂が立ちこめる。シャンは眉間に皺を寄せてヤオを睨め付けていた。一方ヤオ当人は一言も口にしないまま体ごとシャンを向いた。腕を組み、やはり無言を守っている。その様子は嵐の前の静けさを表しているようだったが、シャンはお構いなしに言葉を並べた。
「暗殺者は私情を挟めない。それは知っています。冷徹にならなきゃならないことも分かっています。私も、初めはヤオを尊敬していました。――いえ、今しがたまで尊敬していたんです。強くて、仕事を正確にこなす憧れの先輩だと。ですが、ヤオの強さは別の所にありました。ヤオは人を殺したいから強いだけ。殺せればなんでもいいんじゃないんですか。そんなのは暗殺者なんかじゃありません、殺人鬼です！」

LOOK UP TO BLACK-8-

シャンは表情こそ毅然だが内心は逃げ出してしまいたい心持ちだった。唇が、体が勝手に動いている。脳からの指令が正常に通達されない。シャンはまるでテレビでも見ているかのような心境で、ヤオの姿を捉えていた。

静かな部屋ではシャンの怒声がよく響いた。いつしか煙も引いていてヤオの姿ははっきりと見ることが出来る。その隈を穿った両の目も、無論鮮明に捉えることが出来た。表情はやはり鉄仮面だ。何の感情も表してなどいない。

シャンはえい儘よと言わんばかりに話を続ける。

「どうしてそんなに人を憎むんですか。人が嫌いなんですか。どうしてそんなに人に対して冷酷になれるんですか。――ヤオが殺した人間は、私にとっては家族だったんです。家族だったんですよ！それなのに、それなのにあんな……！」

「家族とは、何だ」

珍しく返ってきた返答は、シャンに僅かながらも肩透かしを喰らわせる結果となった。静まりかえってしまった室内で、少女の呆気にとられた表情がヤオに向いている。この時ばかりはシャンの体と思考も統合されていた。

ヤオはお構いなしというように再度質問する。

「お前は人間の集合体を家族というのか？」

シャンは考え込んだ。この場に辞書でもあればよかったのだが、暗殺組織のアジトにそんなものが転がっているはずもない。”家族”というものを知らない人間に何といえば説明できるのだろうか。シャンにはうまい言葉が見つからないでいた。

「家族とは、いつも一緒にいる人達のことで……えと、一緒に暮らして……その――」

「違う。俺はそんなことを聞いているわけじゃない。あのガキ共は

お前の兄弟が何かか？　お前はあのガキ共と血が繋がっていたのか？」
「血は繋がってません……孤児院ですから……。で、ですが、家族はかぞ――」
「いや、それは家族じゃない。他人だよ、クソガキ」
シャンの言葉を遮って発せられた一言は、あまりにも棘が多かった。シャンの小さな唇が「家族」と言いかけたままで固まっている。つぶらな目は見開かれていた。ヤオはその様子を眺めながら、一言の続きを結ぶ。
「確かに長い間一緒に過ごしていたかもしれないがな、それは家族なんかじゃなくて集合体だ。つまるところ”家族”なんてものは幻想でしかないんだよ、俺も、お前も、人間全てにおいてな。人間は常に独りだ。寄り集まって傷の舐め合いしてるのが家族だと言い張るなら好きにすればいいがな、その価値観を俺に押しつけるな。俺は他人を殺した。あの時始末したガキ共も、他人なんだよ。俺にとっても、お前にとってもだ」
しん、とした。
シャンはしばらく微動だにしないままヤオを見ていた。そのうち手が震えだし、その震えは全身へ波及した。しかし泣く兆しは見られない。シャンが全身を震わせているのは悲愴から来るものではない。――憤怒だ。憎しみの織り交ざった純粋な怒りだった。
「どうして、そんなことが言えるんですか……」
「どうして？　簡単だ、血の繋がりが無いからだよ。俺も、お前も捨てられたんだ。”家族”に捨てられた。ゴミ箱の中でゴミと仲良くなっても、それは家族じゃない。ただのゴミだ。――焼却炉に行ったのか、ゴミ箱から這い出たのか、その差でしかないんだよ」
もしシャンがこの時平常を保っていたのなら、「俺も」という一節を聞き逃さなかっただろう。そして、ヤオの表情が今まで見たこともないようなものであることも気づいていただろう。しかしシャンはそんなものに見向きもできないほど頭に血が上っていた。

「焼却炉に送ったのは、ヤオではないですか」
「そうだな。――じゃあ逆に聞くがそれがどうしたんだ？」
銃口が互いを捉えたのは、その直後だった。
シャンは息を切らしながらもしっかりと二挺でヤオを捉えている。ヤオは一挺でシャンを捉えていた。その表情は薄く笑っているが、どこか哀愁を帯びている。しかしその様は銃口に遮られて確認できないでいた。
「今度は本気みたいだなクソガキ。――そうだしっかり狙いをつけろ。トリガーに指をかけたか？　安全装置は確認したのか？　殺す覚悟はできてるんだろうな。”家族”の仇だ。迷ってる暇はないぞ？」
くつくつとバカにするような笑い声が室内に響く。シャンは震えていたが、照準がぶれることはない。
「ああ、クソガキ。ひとつ言い忘れていた――」
ヤオが微かに首を傾けて笑む。
「――銃口がずれているぞ？」

――バキッ！

とんでもない音を立てて床に転がったのはシャンの方だった。背中から強い衝撃を受け、前のめりに床へと倒れ込む。
シャンが床を滑っていったのと同時に、ヤオが長椅子に”着地”した。
「く……ぅ……！」
シャンが苦痛に顔を歪めながらも再度銃を構える。
長椅子の縁で体をふらふらとさせている男は、銃すら構えずに言い捨てた。
「おいおい、狙いだけは一人前じゃなかったのか？　それともローラみたいな跳躍弾でも駆使するのか？　――怖い怖い。泣き出しそう――だッ！」

ヒュ、と風の裂ける音。
直後、シャンの手にしていた銃ははじき飛ばされ、床を滑っていった。残ったもう片方を構えるも、ヤオの姿は無い。
――ガッ。
シャンの体がガクンと沈んだ。
銃を構えていた手は黒い革靴に踏み付けられている。
可憐な顔にかかった影の正体を確認すべく、面をあげる。
そこには悪魔のような笑みを浮かべたヤオの姿があった。
「――埒罕（チェックメイト）」
漆黒の銃口が、シャンを捉えていた。
「う、撃つんですか……」
「撃って欲しいか？　いいぞ、お前が望むなら弾のひとつくらい使ってやる」
「ヤオ、あなたはどうして……」
ごり、と銃口が額に押しつけられる。
「どうして、どうして、どうしてどうして。お前のおつむは何で出来てるんだ。ポテトか？　パンか？　答えなんて全部”Ｉ　ａｍ　ａｓｓａｓｓｉｎ”だ。何度言えば分かる？」
「違います、そうじゃない……ヤオはどうして、そんなにも”他人”を恐れているんですか。人と関わるのを恐れている……どうし――」
「おい」
銃の先がシャンの頭を軽く叩いた。ヤオの声音はひどく暗い。その目は――見開かれている。
「命が惜しいなら口にチャックをするのが利口なやり方だ。お前がその続きを口にしてしまうなら、俺はもう忠告すらしてやれない。そのおつむからポテトとパンが漏れ出すのを、だ。分かるな？」
シャンはきゅっと唇を噤む。
しかしその瞳は怯えこそすれヤオから目を背けようとはしない。
小さな唇が言葉を並べる。

「ヤオは、本当は怖いんじゃないんですか……」
「――おい」
「他人と関わるのが、他人に自分を知られるのが怖いんです……」
「――おい、黙れ」
「家族だって本当は羨ましく思っている、違うんですか……」
「――最後だ、黙れ」
「――本当は、寂しいと思っているんじゃないんですか！」

――バン。

静寂は、銃声によって打破された。再度室内が煙る。荒い呼吸音が聞こえる。
シャンのすぐ横に弾痕が穿たれている。漆黒の男が銃を構えたまま目を見開いている傍らで、青ざめた顔の女が男の腕を掴んで銃口を逸らしていた。
「――何やってるのよ……ヤオ……。あなた、自分がしてること分かってるの？」
シャンは固く閉ざしていた瞼を恐る恐る開いた。仰ぎ見た先には呆然としているヤオの姿と、息を切らしているローラの姿があった。
「――離せ」
「バカ言わないで。離して欲しいなら銃仕舞いなさいよ」
漆黒の瞳と、茶色の瞳が睨み合う。しばらくして、忌々しげな舌打ちに併せて銃がホルスターへと仕舞われた。ローラが安堵のため息をつく。
「また繰り返すつもりなの？　いい加減にして。何人殺せば気が済むのよ」
「――家族」
ローラの問いにも答えず、ヤオの整った唇が僅かに動いた。シャンもローラも、訝しげな表情でヤオを見る。
「そんなもの、有り得ない」

低く、どこか”悲しげな”一言は静寂に呑まれた。ヤオは言うが早いかローラを押しのけて扉へと歩いていく。油が少ないのかギイと音立てて扉が閉まったとき、ローラが場にへたり込んだ。
「間に合って良かったわ……ホントに……。はぁ……寿命が縮んだ気がするわ」
「あ、あ、あの……わ、私……」
シャンはローラに焦点を合わせようと努めたが上手くいかなかった。眼球はビクビクと痙攣して、焦点はどこにも合わない。瞳孔が開いているのかもしれなかった。唇が何か言いたげに上下するも、発せられるのは吃音だけだ。冷や汗が流れた。
「シャン……あなた、ヤオに何か言ったの？」
「あ、あ、あ、あの……私、な、何てことを……」
ローラは壊れたロボットのようにガクガクと震える体を抱き留めた。途端、シャンの目縁から涙がボロボロと零れだした。

LOOK UP TO BLACK-9-

場は騒然としているようで、また静まりかえっているようで奇妙な雰囲気だった。ヤオは入り組んだダクトの隙間から室内――もとい工場内の様子を伺っている。チューブや鉄筋なんかが散乱している開けた場所には、銃を構えた大勢の男達と四人の人物が存在していた。

ヤオは上の命令を反故にし、ベイリアルの挑発に乗ったのだ。一手誤れば蜂の巣になりかねない煉獄へと赴いてしまったわけである。

広場とも言えるその場所には緊迫した空気が流れていた。

四人のうちひとりはサングラスをかけた初老の男だ。黒いコートを着ており、いかにも”首領”といった風格だった。その隣には茶髪でスーツを崩して着ている男がいる。その隣には黒髪の東洋人らしき男が。そしてベイリアルが。四人はそれぞれ円をつくるように互いを向いている。

コートの男は低くしわがれた声で話の口火を切った。

「今回の会合……何のためにあるか皆分かっているだろう。――なぁ、ミスタ・ベイリアル？」

「直々にご氏名とは……私を疑っておいでか？　ミスタ・スタンフォード」

コートの男――スタンフォードとベイリアルが睨み合う。スタンフォードはサングラスをかけているものの、その表情が穏やかでないくらいは雰囲気で分かった。火花が散ってもおかしくない状況に水を差したのは茶髪の男だ。

「おい、こんな所でドンパチはごめんだぜ。やりたいならおたく等2人で、それも外でやんな。――そうでなく、純粋に情報交換としゃれ込みたいなら、そう見つめ合うのはよしな。アンタもそう思うだろ、ミスタ・暁？」

「――そうです。お二方、ミスタ・ガスパーレの言うとおりだ。会

合を進めてください」
空気が棘を含む。
スタンフォードが舌打ちに併せて視線を外した。ベイリアルもそれに倣う。しわがれた声が再度工場内に響いた。
「皆も知っているとは思うがな、昨晩、我らカルロス＝ファミリーの幹部であるドリン＝インクが暗殺された。死因は毒だ。犯人は中国人の女だと言われている。パーティーの参加者リストを洗ったが女の名前は無かった。それどころかアメリカ国内にも存在していない。偽名であることは確かだ」
スタンフォードの説明に、ベイリアルが顔をしかめながら返答する。
「真実を述べねばならないのが心苦しいがね、ミスタ・スタンフォード。もう少し部下の教育をした方がいいのではないかね。大々的に女漁りをし、その結果暗殺されてしまったのでは形無しだ。――その上、彼はレディの目の前で私の名前を呼ぶというジョークまで飛ばしてくれた。笑えないジョークだ。アメリカンジョークは理解に苦しむ」
「ビクビクと怯えながらガキを売り払っている英国人（ジョン・ブル）にアメリカンジョークなど理解できるはずもなかろう。わしはな、ミスタ・ベイリアル。率直に言ってお前の仕業じゃないかと踏んでいる。何故パーティー会場に居たのか、納得のいく説明をしてもらいたいものだ。ああ、ジョークはいらないぞ。茶渋のついたジョークなどお断りだからな」
場がしんとした。薄暗い廃工場は夜深いということもあってか不穏な空気が立ちこめていた。それもそのはず、アメリカに勢力を置く四大組織の幹部が一同に会しているのだ。パーティのように穏やかであるわけがない。
茶髪の男――ガスパーレが緊迫した空気にそぐわぬ声のトーンで横槍を入れる。シチリア訛りを含んだ英語に他の三人が注目した。
「暗殺って言ってるんだからよ、暗殺者が一番有力なんじゃねぇの

か？　おたく等だって名前くらい知ってるんだろ？　――ＢＢクラブ。あそこに睨まれちゃあ幹部（ジェラルカ）だろうが将軍（ジェネラル）だろうが裸足で逃げ出す。その上中立だ。そもそもアジトだって分からねぇしな。憎まれるようなことやってたんだろ、ミスタ・インクは。そのツケだ」

ダクトの奥で、ヤオが微かに強ばる。しかしその様子はおろかヤオの存在に気づいている者さえいなかった。

飄々とした穏やかな声がガスパーレの話に返答をした。口を開いたのは東洋人――暁だ。

「ＢＢクラブは依頼にない仕事はしない……だから依頼した人物というのが必ず存在するんですよ。ミスタ・インクを間接的に殺した人間が。ミスタ・スタンフォードはそれをあぶり出したいのではないんですか？」

暁が言い終えるが早いか、ベイリアルのバカにするような笑い声が飛んだ。片眼鏡の奥では多少の苛つきを含んだ目が暁を見ている。

「ふん、ミスター・アサシンは中国人のレディだという話ではないか。貴公が一番怪しいのではないのかね、ミスタ・暁」

「それを言うなら、貴方こそミスタ・インクが見初めた中国人の女と話をしていたとか。その女が暗殺者であるのは間違いないでしょう。――貴方が、一番怪しいのでは？」

「これは困った！　アメリカンジョークの次に低俗なのはチャイニーズジョークときた。私はミスタ・インクに誘われ、パーティーに出席し、”社交”としてレディと話していただけだ。彼女が暗殺者であったのは私のあずかり知らぬことだ」

またしても静寂が場をさらっていく。打破したのはスタンフォードの声だった。

「ＢＢクラブの仕業であるならば用心せねばならんな。わしも、お前達もだ。おそらく依頼などとうにされている。隙を見せれば風穴が開く。インクはそのことを理解していなかった。ミスタ・ベイリアル……お前に指摘されるのは癪に障るが、確かに部下の教育はなっていなかったようだな」

「分かって頂ければ結構。もう一つ指摘しておくならば”口にチャックをする方法”も教育していただきたいものだ。あの中国人のレディがミスター・アサシン――いや、ミス・アサシンであったのなら、私はＢＢクラブに顔と名前を明かしたことになる。無能な幹部ひとりの命で購うには大きすぎる貸しではないかね」

スタンフォードは忌々しげに口元を歪めた。ベイリアルはそれを横目に勝ち誇ったかのような笑みを浮かべている。耐えかねたのか、スタンフォードが話の矛先を移した。

「しかし中国人がＢＢクラブに在籍しているのは驚きだな、ミスタ・暁。お前の所にも暗殺組織があるだろう。それも政府公認のな。だというのに中国人がＢＢクラブに居るなど一体全体どういうことだ」

ヤオが影に紛れて唇を噛んだ。

LOOK UP TO BLACK-10-

矢面に立っているのは漆黒の暗殺者ではなく絶世の美女だったが、ベイリアルはその正体を知っているのだ。なぜこの場で公言しないのか、ヤオはそれが不思議だった。まるで焦らしているかのような。当人が”ここにいる”と知っているからこそ言い渋っている、そんな雰囲気だ。

スタンフォードの問いに暁が肩をすくめながら答える。

「あの組織と我々”黒龍公司（ヘイロンゴンシ）”とは政府という元締めが同じなだけで関わりは無い……。噂ではあの組織は３０年前の大事件から立ち直り切れてないらしく、組織というのも名ばかりだそうです。暗殺者を輩出しているといった話は聞いたことがありません」

「なんとも羨ましい話だぜ、政府がバックアップたぁな。俺たちは汚泥にまみれながら路地裏を走り回っているのによ。中国では悪党がヒーローだ。俺も髪が黒く生まれてれば、今頃ヒーローだったのかもな。阿片でいかれたヒーローだ、クールだろ？」

間の抜けたぼやきが暁に投げかけられる。暁の穏やかな表情が翳りを孕んだとき、ベイリアルが拍手を伴って笑い声を立てた。

「さすがだよミスタ・ガスパーレ。イタリアンジョークは一級品だ。コツを知っている。――彼の言うとおりだよミスタ・暁。政府の後ろ盾は大事にしたほうがいい。でなければ生きてなどいけないぞ？」

「――どういう、ことですか？」

暁の声がトーンを落とす。ベイリアルは少し間を置いた後、顎を触りながら話を続けた。

「ご想像に任せるよ。私はただ貴公の優遇された環境を賛美したに過ぎない」

含みのある発言に返答したのは暁でなくスタンフォードの方だった。

「おい英国人。茶渋のついたジョークは満杯だ。”コメディ”をや

りたいならアイルランドに帰ってＩＲＡ（アイルランド共和国軍）相手にやっていろ。お前等の言う”主”もお笑いになるだろう」
「なるほどアメリカンジョークも捨てたものでは無いな。――面白い。今ここで”コメディ”をお見せしても宜しいが？」
場の雰囲気が緊張する。触れれば弾けてしまいそうな、一触即発の空気だ。
ガスパーレが頭を掻きながら苛つきを隠しもせずに言い捨てた。
「おいおいおい、俺が最初に何て言ったか忘れちまったか？　ドンパチはごめんだ。そう言ったんだよ。分かったら睨み合うのはやめてくれ。――というよりもう話すこともねぇだろ。俺は帰るぞ。犯人はＢＢクラブ。だから俺たち四勢力の内誰もが無実で誰もが怪しいんだ。それで店じまいだよ。――ミスタ・インクにご冥福を」
ガスパーレはそう言うと踵を返して広場を後にした。しばらく沈黙が場を支配していたが、そのうち暁が口を開いた。
「ミスタ・ガスパーレの言うとおりだ。話は終わったのでしょう。私も帰らせていただきます」
暁は言う口の下から足を進めた。明朗な靴音は僅かに苛立ちを含みながら出口へと吸い込まれていく。スタンフォードとベイリアルは特に言葉を交わさなかったが、一陣の静寂が二人の間を払拭すると、スタンフォードがコートを翻して去っていった。
工場内ではベイリアルがひとり腕を組んで立っている。その視線は出口を向いていたが、靴音が消え去った直後に”ヤオ”を向いた。さほど大きくもないが、聞き取るには十分な音量で声を発する。
「こんばんは、ミスター・アサシン。居るんだろう？　ああ、出てこなくてもいい。居ないふりをしてくれて構わない。私は君の位置を把握していない。安心したまえ」
ヤオは言われたとおり声を発しようとも、場を移動しようとも考えなかった。しかしベイリアルの視線ははっきりとヤオを見ている。位置を把握していないというのはどうやら虚言のようだ。
先ほどまでとはうって変わって穏やかで紳士的な声が場に響く。

「見苦しい所をお見せして申し訳なかった。しかしあれが裏社会の実態なのだよ、君もよく分かっているだろう？　さて、こうやって話をしているのは他でもない。私は君に興味がある。君はワディム君の教官をしていたそうじゃあないか。さぞ大変だっただろう、彼は短気だからな。まあ、君とその教え子が始末したようだが……子供も一緒に片づけたのかね？」

ヤオの眉間に皺が刻まれる。手袋ごと拳が握りしめられた。

ベイリアルはそれに気づいているのか気づいていないのか、声のトーンをそのままに話を続けた。

「図星のようだな。――さすがは殺人機械。一切の私情を挟まぬ理想的な暗殺者だ。教育者の賜だな。君は常に孤独だ。誰にも近寄らず、近寄らせない。そういう教育を受けてきた、そうだろう？　ヤオ君――いや、リ――」

――ヒュッ。

空を裂いて投げつけられたクナイは、間違いなく標的を捉えていた。しかし呻き声も、血も、ましてや金属が何かにぶつかる音さえ聞こえなかった。ヤオが目を細めて確認する。クナイは――

「おいおいミスター・アサシン、この程度の挑発に乗っていては困るな。場所が割れてしまったではないか」

――ベイリアルの手にあった。

鈍く光沢しているクナイを見せつけるようにして肩口のあたりに掲げている。元々ヤオを向いていた海色の瞳は、今度こそ明確にヤオを捉えた。片眼鏡の奥に何かが灯る。

（……まずい……！）

――バキ。

ヤオが咄嗟に身をかわしていなかったのなら、今頃は脳漿を垂れ

流して場に頽れていただろう。一直線に投げ返されたクナイは、ヤオの頬を掠た後に背後を貫いた。錆びて変色しているダクトには切り裂かれたような穴が開いている。

ヤオは背後を確認し、もう一度ベイリアルを捕捉する。

「お見事。さすがだよ、ミスター・アサシン。――今日はもう夜深い。シンデレラの魔法が解ける時間だ。今日の君は、ミス・シェーファではないようだが、ね。またゆっくりと話がしたい。機会があれば、色々と聞かせて欲しいものだ。――それでは再見、ミスター・アサシン」

ベイリアルは含み笑いを浮かべた後、靴音を伴って出口へと向かっていった。しかしベイリアルの姿が出口へと吸い込まれていく前に、再度紳士的な口調がヤオの耳朶を揺らす。

「ああ、これは失礼をした。わざわざ呼び出しておいて何のおもてなしもしないとは紳士のすることではないな。――いい話を聞かせてあげよう。君の教え子……レディ・シャルロッテ。彼女を売り払った孤児院の院長が現在アメリカに居るのだよ。この情報はＢＢクラブの幹部も知っている。私が知らせた。復讐を考えるも良し、清廉潔白――とまではいかないが人間らしい誇りを保つも良し。レディ・シャルロッテにそう伝えておいてくれたまえ」

今度こそベイリアルの姿は闇に消えていった。

工場内には最早ヤオ以外に誰も居ない。静まりかえった場を激しい破壊音が打破した。ヤオの背後にあるダクトは痛々しくへこんでおり、錆び付いた金属の表面がパラパラと床に降り積もる。ヤオの左手もまた錆びた金属の粉で染まっていた。

LOOK UP TO BLACK-11-

テーブルを隔てた向こう側に、ローラが座っている。しかしその表情は陰鬱で、その上言葉を発しようともしなかった。面と向かっているシャンもまた、唇を動かそうとはしない。

先ほどの一件の後、ローラはシャンと一緒に帰宅した。怯えてまともに言葉も紡げないシャンを介抱しつつ、事の一部始終を聞き及んだ。それ以来ローラも易々と口を開けなくなってしまったのだ。シャンが痛ましいほど怯えている、というのも理由のひとつだ。しかしそれ以上に、ヤオの”傷”の深さを知ってしまったからだ。

今までヤオに殺されてきた可哀想な女達。彼女たちはことごとくタブーを口にしてしまったのだ。そしてそれが引き金となった。タブーというのは――

「シャン、あなたは……”家族”のことを口にしてしまった、そうなのね？」

――そう、家族だ。

シャンは弱々しく頷いた。眉をひそめて、両手は不安を表すかのように口元へと添えられていた。震えは止まず、椅子と床がぶつかり合ってカタカタと音立てている。

「わ、わたし……この前の、ワディムさんの仕事のことがずっと引っかかっていて……それでつい頭に血が上って……ひ、ひどいことを……」

シャンの言葉は最早吃音で構成されているようなものだった。ローラは聞き取りにくい中単語を拾いあげて文章に構成し直していく。労るように頷き、真摯に話を聞いていた。

「私が、甘えているから、わ、悪いのに……ヤオに……八つ当たりを……」

「そう自分を責めないで、シャン。確かに貴女は暗殺者として間違ったことを言ってしまったのかもしれないけれど、人間として間違

ったことは言っていないわ。家族が死んでしまえば悲しいし、殺されれば相手を憎む。これは当然の事よ」
　シャンは一瞬だけ面をあげてローラを見たが、すぐさま俯いてしまった。体はやはり震えたままだ。ローラは悲しげに眉をひそめている。瞼を閉じてため息をついた後、決心したかのような表情で話を切りだした。
「シャン。貴女にひとつ伝えておこうと思うの。これからする話はもしかすると貴女に強いショックを与えてしまうかもしれないわ。でも貴女は知っておくべきだと思う……。聞いてくれるかしら？」
　シャンはゆっくりと頷く。
　ローラは一息付いた後、ルージュの乗った唇に言葉を並べた。
「ヤオはね、今まで何人もの女性に好かれてきたの。もちろんあの性格だし、交際なんてできたものじゃないわ。それでも女性達は一途にヤオを追いかけ続けたの。でもね、その全員が死んでしまったの――ヤオに、殺されたのよ」
　カタカタと煩わしかった音がピタリと止んだ。シャンは面をあげてローラを注視している。ローラは伏し目がちに何処かを見ていた。
「酷い有様だったわ……。貴女はオーストリアに居たから知らないだろうけど、アメリカでは度々ニュースになったわ。原型を留めてない遺体が森の奥何かから見つかるんだもの。ヤオは問題を起こすたびに幹部から厳重注意を受けていたけれど、そう簡単には止めなかったわ。――というより、ずっとやめなかったの。女性達が『ヤオは危険だ』と気づくまで、変死体はお日様の下に晒され続けたの」
　シャンは口元を覆った。視線が泳いでいる。ローラはその様子をみて口ごもったが、下唇を噛みしめると話を続けた。
「彼女たちはどうして死ななければならなかったのか？　誰もがそう思っていたわ。私、気になってね。ヤオに聞いてみたのよ。『どうして殺したのよ』って強い口調で。彼は言ったわ。『ヤツらは何かにつけて家族だの仲間だのと口にする。それが鬱陶しい。腹が立つ』って、ね。彼の生い立ちなんて誰も知らないわ。もしかしたら

ヤオも孤児だったのかもしれないし、違うのかもしれない。ただ、ヤオは”他人”が――いえ、”他人との関わり”が怖いのよ。怖いというよりは憎んでいる。そしてその憎しみを殺意に変換してしまう引き金は――」

「家族――」

ローラは大きく頷くと、シャンを見据えて言った。

「ご名答。――だからね、貴女がヤオに言ってしまった言葉は全て、銃弾よりも痛いものだったのよ、彼にとってはね。貴女は正しいことを言ったと思うわ。ただ、彼にとってはその正しさが憎いのかもしれないわね……。何はともあれ、時間が経たないことには解決が辛い話ね。もやもやしたままだと我慢できない？」

シャンは首を横に振った。長い黒髪が揺れる。

シャン自身、ヤオと会うのは抵抗があった。今までも幾度と無く殺されかけてきたが、今回は”修復不可能”な事態であることを薄々感づいていたのだ。平たく言えば、怒らせてしまったワケである。その結果、シャンとヤオの間には出会った当初よりも深い溝が穿たれてしまった。

「しばらく……様子を見たいです。今は……怖くて、あの――」

「分かってるわ。大丈夫よ、ヤオもそこまで分からず屋じゃないと思うし、時間が経てば元に戻るわ。だから、ね？　そんなに落ち込まないで」

かろうじて確認できる程度の頷きは、シャンが依然立ち直る兆しを見せない、ということを暗に示している。ローラはしばらく考え込んだ後、窓を眺めて「あ」と発音した。シャンも訝しげに思ったのか面をあげる。

ローラはいやにニコニコしながら口にした。

「ねえ、シャン。ちょっとお買い物行きましょうよ。シャンの好きなスーパー！」

「い、今からですか？」

ちなみに、現在は夜の１１時。看板の灯りが瞬き続けているとは

言え、外は暗い。その上今からスーパーに行って何を買うというのか。
シャンはひとつだけ思い当たるところがあった。
「ローラ……その、もしかしてこの時間からケーキを食べるつもりですか？」
「さっすがね、シャン。もう私の考えてることが分かるようになったのね。分かっているなら話は早いわ。行きましょ行きましょ。散歩だと思って。きっと涼しくて気持ちいいわよ！」
ローラは返答を待たずに席を立った。よく分からない鼻歌を伴って奥の部屋へと消えていく。シャンはしばらく呆然とその様子を眺めていたが、ローラが戻ってきたのを確認するが早いかさらに呆然とした。
ローラの腕は数多の衣類で溢れかえっていた。ほとんどがコートの類だ。
「さて！　どれにしようかしら！」
「あ、あの……それは何でしょう」
「もちろん、シャンのコートよ？」
シャンは苦笑いを浮かべるしかなかった。この様子だと出かけるのは１１時では済まなくなりそうである。ローラの手招きに応じるまま、シャンも席を立った。

LOOK UP TO BLACK-12-

――遅くなるだろうと踏んでいたが、時間は思いの外かからなかった。シャンはそのことについて神に感謝をした。しかし一番感謝すべきは自分自身である。数え切れぬほどのコートを試着させられかけていた時、瞬時にローラの気に入りそうなものを選んで「これにします」と口にしたからだ。シャンは確かに、ローラの考えていることが分かるようになっていた。

人気のない街路を2つの足音が進んでいく。夜であるためか、肌を冷たい風が撫でた。

「あら、明日は雨かしら。星が全然見えないわ」

ローラは顎を傾けて頭上を見ていた。シャンもそれに倣う。確かに星は一切確認できず、漆黒が広がっているだけだった。雲ひとつない夜空だ。

シャンは空を仰ぎつつも言葉を紡ぐ。下あごが引っ張られてうまく発音できなかった。

「真っ暗、です、ね」

「そうねぇ。残念だわ」

ローラが顎を正常な位置に置いて返答する。真上を向きながらも一生懸命に言葉を繰るシャンを見て笑いをかみ殺しているようだった。シャンは自分が何故笑われているのが気づいたようで、顎を引いて顔を赤くした。

ふと、シャンの脳裏に先日の出来事が浮かんだ。墓地での出来事だ。喪服の淑女の言葉が想起される。

『空を仰ぐといいでしょう』

シャンは、再度夜空を仰いでみた。迷いが晴れる兆しは無い。見えるのは漆黒だけ。淑女の言葉を借りるなら、”迷宮”から抜け出せる予兆など一切見当たらない。

（空を仰いでも、何も無いのに……）

シャンは諦めたかのように顎を引いた。傍らではローラが不思議そうにシャンを見ている。
「どうかしたの？」
「いえ、何でもありません。本当に真っ黒だなぁと思って――」
はた、とシャンの脚が歩むのを止めた。
ローラもそれに倣う。シャンが目を見開いて眺めている先には初老の男が立っていた。彼もまた呆然とシャンを眺めている。ローラは状況が読めずにそれぞれを見比べるしかできずにいた。
「せ、先生……」
「ん……？　君は……まさか――」
まるで引き裂かれた恋人同士が再開でもしたかのような雰囲気だった。二人はしばらく見つめ合ったまま立ちつくし、声も発しなかった。ローラは状況が飲み込めずに目をしばたたいている。その茶色がかった目に映っているのは、どこか焦燥している風なシャンの姿だった。
先生――と呼ばれた初老の男が目線を泳がす。そしてどこかよそよそしく口を開いた。
「シャ、シャロン……！　まさかこんな所で会えるなんて……。あの後どうなった？　先生はずっと主に祈っていたんだ、どうかシャロンが無事でいられますように……って。無事でよかった。君を守ってやれなかった先生を許しておくれ、シャロン」
シャンは俯いていた。暗がりでは表情も満足に確認できない。ただ、小さな手が拳を為し、あまつさえぶるぶると震えているようだった。仮面のような笑みを固めている”先生”は、あくまで平和的に事を進めるつもりらしい。
ローラは”先生”の貼り付いたような笑みに嫌悪感を露わにしつつも、横槍を入れようとはしなかった。
「どうしたんだい、シャロン。そちらの方は今養ってくださっている方かな？　よかったじゃあないか、シャロン。孤児院のみんなも、話を聞いたら喜ぶよ」

「――もういません」
”先生”のつくり笑顔が目に見えて崩れた。崩れて露見した素顔は、腫れ物でも見るかのように歪められている。
シャンは俯いたまま、続きを紡いだ。
「みんな、死にました。売られて、殺されました。――先生、私は先生を信じていたんです。私たちを守ろうとしてくれていたんだと、そう思っていたんです。せめてこの場に居なかったのなら、オーストリアのあの地でみんなを守って亡くなったと、嘘でもいいから聞かされていたなら、私は一生先生を信じていられたのに。――先生、何故こんな所にいるんですか。……孤児院はどうしたんですか」
「な、何を言っているんだ、シャロン。先生はちょっと用事があってこっちに来ているんだよ。みんなは生きてる。君は悪夢でも見たんだよ、シャロン。――君の家族は生きているよ」
シャンの表情が崩れた。”家族”という単語が引き金となるのはヤオだけではない。シャンも同じだ。ふいに弱げな表情へと変転してしまったシャンを見るが早いか、”先生”は道化のような笑みでもって虚言を並べ立てた。
「あの恐ろしい人達に引き取られていって、ツラい目にあったのかい？　苦しかったろう、痛かったろう、悲しかったろう。先生はずっと心を痛めていたんだよ。しかし主は見ていてくださった。シャロンは生きている！　みんなもよろこ――」
刹那、澄んだ闇夜に銀色の光沢がきらめいた。
ローラが、耐えられないと言わんばかりの表情で銃を構えたのだ。無論、銃口は”先生”を向いている。
「ねえアナタ。悪いけど不愉快極まりないわ。その安っぽいつくり笑顔、そろそろやめにしたらどうなの？」
”先生”は当初、銃を突き付けられたことに狼狽していた。しかし、ローラの言葉全てが闇に溶けてしまうと、忌々しげに眉をひそめる。そこにあるのは慈愛でも穏健でもない。物事がうまく進まないことに苛立っている”悪党”の顔だ。

ローラはシャンに一瞥くれると、再度”先生”を睨め付けて言った。
「あら、素顔の方はなかなか素敵なのね。小悪党って匂いがぷんぷんするわ。――アナタ、分かってて言ってるんでしょ？　シャンの家族はもう……。――理由なんて言わなくても分かっているわよね？　アナタが売り飛ばしたからよ。自分自身の懐を暖めるために、ね。違うかしら？」
シャンは俯くことしかできないでいた。ローラは自分でも残酷なことを再確認させていると分かっていながら、口が塞がらずにいた。それほどまでに”先生”を嫌悪していた。
一方”先生”は肩をすくめて返答を並べ立てる。
「――シャロン？　保護者の方は選んだ方がいい。そちらの褐色肌の方は頭に少々問題があるようだ。そんなことだから君まで変なことを言い出したんだよ、シャロン。今ならまだ間に合う、先生と一緒に孤児院へ戻らないかい？」
「面白い冗談だわ、ミスター。そんなこと真顔で言えるなんてサイコーね。――そろそろ指も限界だわ、引き金を引いてもいいかしら」
茶色の瞳と青色の瞳が闇夜を隔てて対峙する。
”先生”は焦燥を隠し切れてはいないようだったが、まだ勝算があると思っているらしい。彼の言う勝算とは”シャンを丸め込むこと”に他ならないのだが。
その上っ面だけの勝算を頼りに、”先生”は慇懃無礼とも言える返答を並べた。
「ああ、お嬢さん。僕は暴力が嫌いなんだ。仮に脅迫だとしても、そんな危なっかしいものは下げてもらいたい――」
――バン。
銀色は闇夜を翔ながら”先生”の肩口をかすった。それは服に僅かな傷を残す程度で済んだが、撃たれた当人の表情は尋常でないほ

ど怯えている。驚愕と狼狽が一度に訪れた、そんな表情でローラを注視していた。
銃声が宵闇に吸い取られた刹那、唖然としていた男は糸が切れたように捲し立てる。
「な、な、何をするんだ君は！　ここはダウンタウンか？　違うだろう！　ひ、人を殺せば大変なことになるんだぞ！　もし当たったらどうしてくれるんだ！」
「――人を殺せば大変なことになる……ねぇ。分かっているじゃない。分かっているのに何故、アナタは子供を売ったりできたのかしら。ダウンタウンのチンピラだって少しは道理をわきまえてるわ。少なくとも偽善者ではない。――アナタはそのチンピラ以下よ、”先生”さん」
ローラの銃口がしっかりと”先生”を捉えたとき、恐怖に顔を歪ませた男は背後を振り返って走り去っていった。ひぃひぃとわめき立て、時折つんのめったりしながらも、背中は夜の暗がりに溶けていく。
ローラは銃を仕舞い込んでシャンに視線を置いた。シャンは泣きも怒りもせず、ただ複雑な心境に眉をひそめるしかできないでいた。

LOOK UP TO BLACK-13-

受話器からはうんざりするような怒声が漏れていた。一度電子にまで分解され、再構築された音声とて不快を与えるのには十分の音量だ。男は受話器を耳から遠ざけて眉をひそめていた。

『ど、どういうことなんだ！　アンタは全員死んだって……売り払ったガキは全部死んだって言ったじゃないか！』

男は片眼鏡の奥で目を細めていた。眉間には皺が刻まれている。目周りの小じわが少し目立つ。端正な顔立ちは苛立ちを隠そうともしなかった。

質素な室内には直立不動の部下達が並んでいる。受話器超しの怒声は彼らの耳朶さえ明確に打った。

『今さっき出くわした……！　マザー・ピッドの所に売り払ったガキだ！　なんで生きているんだ……どうして！　聞いているのか、ミスター・ベイリアル！』

「――そう怒鳴らないでくれたまえよ、ミスタ・ホフマン。先ほどから耳が痛いのだ。……私が”死んだ”と言ったのは先日一掃した12人の話だよ。それ以前に売却した子供が生きていようが、それは私のあずかり知らぬ所だ。まあ君が遭遇した少女についてはこちらも情報を持っているのだがね」

受話器の奥で、男が引きつったような声を漏らした。その真意は定かでない。大方、クラウン＝ファミリアの情報網に驚愕した、といったところだろう。片眼鏡の男――ベイリアルは男の動向などお構いなしに話を続ける。

「シャルロッテ＝アーベルという少女ではないのかね？　貴公が遭遇したのは」

『な、何故それを知っているんだ！　一体どこで……いや、何故……！』

「ああ、少し落ち着きたまえ。私はエスパーでも何でもないのだよ。

もちろん、貴公の記憶を覗き見するといった芸当もできるわけがない。私が少女のことを知っているのはね、ミスター。彼女が所属している組織の情報を持っているからなのだよ。貴公の経営していた孤児院での人身売買……それを指揮していたのもファミリアだ。商品の安否くらいは理解しているつもりだよ。アフターサービスの一環だな」

『そ、組織……？　何だそれは。ミスター、もったいぶらないで教えてくれ』

受話器の向こうで男が落ち着きを取り戻したようだった。ベイリアルにとっては久方ぶりの静寂が室内に充満する。片眼鏡の奥で目が細められる。まるで無音のオーケストラに耳を傾けているかのようだ。その海色の瞳に陰謀の色が見え隠れしていることなど、受話器の向こう側にいる人物が知る由もなかった。

ベイリアルはきらびやかな金髪を弄びながら、男の催促に返答した。

「レディ・シャルロッテは強運だったのだよ。マザー・ピッドの元を抜け出し、あまつさえ彼を暗殺しに来たミスター・アサシンと出くわした。レディはそのまま暗殺組織に加入。現在は修行中のようだね、どうも。――聞いたことはあるかね、ミスター？　ＢＢクラブという組織だ」

『き、聞いたことがない……。アメリカに来たのは数日前の話だからな。ミスター・ベイリアル、あなたのおかげで衣食住には不自由していない……むしろ十分すぎるほどだ。それには感謝している。ただひとつ言わせてくれ。ミスター、あなたは言ったはずだ。アメリカは絶対に安全だし、人身売買が明るみにでて摘発されることもない。――だというのに、証拠そのものがアメリカにいるじゃないか。これはどういうことなんだ。その上暗殺者だって？　あのガキは僕を殺しに来るかもしれない！　どうしてくれるんだ、ミスター！』

「ＢＢクラブは情報の漏洩を許さない。レディ・シャルロッテが自

身を証拠として貴公を摘発することは有り得ない。彼女には戸籍がないのだしね。――ただ」
　室内は再度静寂に包まれた。受話器の向こう側では男の荒い息づかいが聞こえている。激昂しているのかもしれない。しかし男は声を発さずにベイリアルの返答を待っていた。一方ベイリアル当人は暇な左手を顎に添え、何やら思案している風だ。ふと考えついたように一息吸い込むと、心持ち高めのトーンで話を再開させる。
「ただ、レディ・シャルロッテが貴公を暗殺しにいく可能性は否めないな。彼女にとってみれば仲間……いや、この場合家族かな？　その仇だ。ＢＢクラブは依頼のない者を殺さないのが規則だが、感情の高ぶりは規則など簡単に食い破ってしまうものだ。貴公の居場所を突き止めるのも、ＢＢクラブの情報網ならば容易いだろうな」
『か、簡単に言ってくれるなよミスター！　一大事だ、どうしたらいい？　ガキが来る前にどうにかしないと……！』
「落ち着きたまえよミスタ・ホフマン。何のための収益かね？　貴公には財産がある。身辺警護くらいは雇えるだろう？　それともファミリアで手配した方が都合がいいのかね？」
『い、いや、それには及ばない。なるほど、ボディーガードか。思いつかなかった。さすがだミスター・ベイリアル！　あのガキを始末すれば、もう証拠なんて何も残らない。今回のこと、ある意味幸運だったのかもしれないな。――重ね重ね感謝するよミスター』
「なに、これくらいのこと……。こちらとしてもお役に立てて嬉しく思うよ、ミスタ・ホフマン。貴公に幸運のあらんことを。――ではＧｏｏｄ　ｅｖｅｎｉｎｇ（良い夜を）」
　受話器は静かに定位置へと舞い戻った。
　ベイリアルはしばらく顎を撫でながらほくそ笑んでいた。悪戯っぽい笑みだ。今しがたまで口にしていた内容が全て妄言であったことを示唆するかのような表情だった。しばらくして、背後の部下達を振り返る。そして穏やかな声音で「首尾の方は」とだけ言った。
「上々です、首領。――それにしても」

立ち並んでいる部下のうち、とりわけ背の高くがたいの良い男が返事をした。まるで騎士のように毅然としている。語尾に付け加えられた一言はつなぎと離別したまま彷徨っていたが、ベイリアルが一言も発さないことを確認したのか男は申し訳なさそうに続きを述べた。

「――精巧な罠ですな。首領もお人が悪い」

ベイリアルは目を伏せると、ため息と共に笑みを湛えた。肩をすくませて首を振る。その一連の動作はやはり淀みが無く優雅だ。張り詰めた雰囲気の中、ベイリアルの声がゆっくりと流れ出した。

「人が悪いなど……私はただ”機会”を与えているだけだよ、違うかね？」

「その通りです。ホフマンには少女抹殺の機会を、そして少女にはホフマン暗殺の機会を……。依頼をしたのでしょう、ＢＢクラブに」

「ふん、どのみちヤツは生かしておかぬよ。我々のことを知りすぎている。それに私の最も嫌いな人種だ。――さて、ちょっとした推理だ。少女はヤツと十数年間共に暮らしていた。その間、少女はヤツを先生と崇め慕っていたわけだ。そして今回、少女はその思いを裏切られた。加えて少女は暗殺者として修行中だ。しかしだな、ワディム君の提供してくれた情報が最新だと仮定するなら、少女は未だに満足な任務をこなしていない。このことを無慈悲な教官になじられていてもおかしくはないな。さて、そんな少女の元に都合良く”自分を裏切った男の暗殺依頼”の話が舞い込んでくる。この辺は多少運任せだが、まあ事はうまく運ぶだろう。――で、だ。少女はどの選択肢を選ぶと思うかね？」

ベイリアルは、それこそ道化師（クラウン）のような笑みを部下に向けている。心底楽しげに喉を鳴らしている。部下達は畏怖の念をひしひしと感じながらも、首領の問いに対する答えを導き出していた。

一番に口を開いたのは、話題を振ったがたいの良い男だ。

「少女は、任務としてホフマンを暗殺しようとする」

「Ｔｈａｔ'ｓ　ｒｉｇｈｔ（そのとおり）。ヤオ君には少女に伝えるようにと言

っておいたのだが、信用性には欠けていた。むしろ伝わらないものだろうと踏んでいた。だからホフマンと少女が出くわしたのは運が良かった。――これで少女は全てを知ったわけだ。ホフマンを殺す理由ができた。しかし問題はまだあるのだよ、分かるかね？」

「少女がホフマンを殺せるとは限らない……そう言いたいのでしょう、首領」

ベイリアルは目を細めた。三日月に歪んだ海色の目は、さながら悪魔のようだ。部下達から視線を外すと、顎に手を添えたまま宙を眺めやる。視線の先には窓があるが、海色の瞳は景色を見ようとしているわけではない。ただぼんやりと視線を泳がせているだけだ。

海色の瞳がゆっくりと伏せられる。ベイリアルは一息つくと、スーツの胸ポケットから煙草のパックを手に取った。優雅な手つきで一本取り出すと、そのまま唇へと運ぶ。部下がひとり歩み寄り彼の煙草に火をつけた。

「そうだ。少女にとってみればホフマンは家族のようだものだった。暗殺者とは言え、まだ少女だ。世の中を知らなくとも善悪は判断できる。果たして少女はホフマンを暗殺できるのか、そこまで冷酷になれるのか。――これは私にも判断できない。いわば賭だな。ギャンブルだよ」

「ホフマンが少女を抹殺した場合の対処はいかがなさいましょう」

「あの男が生き汚くも傭兵を雇い、か弱い少女を蜂の巣にした場合……か？　その時はファミリアでホフマンを始末する。そうならぬようにも、少女には頑張っていただきたいものだ。――せいぜい、結果を待つとしようか」

整った唇は白い煙を吐き出す。

首領（ベイリアル）の残酷な笑みに、部下の誰もが戦慄していた。屈強な男達は表情こそ機械のようだが、瞳の奥には確かに恐怖の色がある。煙る室内に不敵な笑い声が響く。ベイリアルは口元を押さえ、心底楽しげに笑っていた。

LOOK UP TO BLACK-14-

シャンの表情はすこぶる硬かった。空色の瞳が捉えているモニターは例によって砂嵐のみを映し込んでいる。室内にはシャンただひとり。まるで水中を思わせるような重く冷たい空気が立ちこめている。

電子的な音声はためらいがちに発せられた。

「――確かにアルフレッド＝ホフマンの暗殺依頼は受けている。標的の情報についてもある程度は把握している。――しかしだな、シャルロッテ君。できるのか、君に」

艶のある黒髪を微かに揺らしてシャンは頷く。

昨日出くわした”先生”と呼ばれる男、アルフレッド＝ホフマン。シャンはその男を許すことができなかった。ホフマンはシャンにとって家族と平和をズタズタに引き裂いた張本人だ。たとえ彼が同じく家族であったとしても、少女の心を焦がす憎悪はそんなものを凌駕してしまっている。

空色の瞳は澄んではいなかった。少女らしいあどけなさは微塵も感じられず、ただ凍り付いたような表情がモニターと対面していた。

シャンは呟くかのように唇を開く。

「できます。それに私はまだひとりで”任務”を遂行したことがないのです。良い機会です」

「そうか。ならばアルフレッド＝ホフマンの暗殺はシャルロッテ君、君の受け持ちとしよう」

「――ありがとうございます」

スピーカーから断続的に流れていたノイズがブツ、と言う音を伴って聞こえなくなった。モニターもいつしかノイズではなく漆黒を映している。どこまでも続いていそうな黒にはシャンの姿だけが映り込んでいた。黒髪を双方に結い上げ、黒いスーツを着込んでいる。いつもと何一つ変わらない。ただ、その表情が強ばっているだけだった。

シャンはモニターに背を向け、防音処理の為された重たい扉を開く。無機質な部屋から廊下へと一歩を踏み出したとき、温度のない声がシャンの耳朶を打った。
シャンは声の主を確認するやいなや息を呑む。そして視線を泳がせてしまった。
「言うことがあった」
廊下の壁にもたれ掛かって腕を組んでいる青年はシャンを見てなどいない。大層不機嫌そうな表情を惜しげもなくさらし、その上眉間には皺が刻まれている。殺気すら垂れ流しになっているが、シャンは逃げるわけにもいかなかった。”言うこと”の内容を確認するためにも、口を閉ざして立ちつくす。
――しばらくの間痛々しい沈黙が立ちこめたが、青年――ヤオは気だるげに内容を連ね出す。
「お前を売り払った人間……”先生”だったか。それがアメリカに来ている。殺す殺さないはお前の自由、だそうだ」
シャンは話が伝聞調であったことに疑問を持ったが言及はしなかった。
ヤオはシャンとは反対方向に視線を置いており、そのため表情もロクに確認できない。シャンは、致し方ないので返答だけはしておこうと思い立った。
「今、その暗殺依頼を受けたところです。教えてくださってありがとうございます」
「お笑いぐさだな。家族家族、と壊れたジュークみたいに喚いていた人間が、今度は元家族を暗殺か。さすがは暗殺者。冷酷なものだ。――せいぜい情に流されないように努めろよ。標的は元家族だからな」
「はい」
シャンは棘を含んだ嫌味にも反応しなかった。コンクリートの壁に舌打ちの音が反響する。ヤオはいよいよ不機嫌極まってきたのか、得物を狙うような目つきを宙に向けていた。やはりシャンに視線を

置こうとはしない。かといって立ち去るわけでもなかった。――むしろ、シャンが自ら立ち去るのを待っているのか。
棘のような沈黙に押しつぶされながらも、少女の姿が廊下から無くなることなはい。スーツの裾をしっかりと握りしめ、俯き、唇を噛んでいる。お定まりのスタイルだ。シャンが不安がっている証拠でもあった。
ふと、低い声が再度静寂を破る。
「どうした、さっさと消えろ。こんな所で油を売っている暇なんて無いだろ」
「はい。今すぐ消えます。――あの、ひとつだけ」
「聞く気は無い。今すぐ消えろ。目障りだ」
静寂が余計に重さを孕んだ。併せて、近寄りがたい威圧感がヤオを包含する。
しかしシャンは逃げ出さなかった。大男すら裸足で逃げ出すような雰囲気の中、ヤオの命令すら無視して話を切り出す。差し迫ってくる恐怖を無理矢理に押しのけて。
「先日は、その、ごめんなさい。私――」
「俺が今お前の脳天に風穴を空けないだけ感謝してもらいたいものだな。次は無い。今すぐ消えろ」
蛇の目はやはりシャンを捉えてはいない。しかしそれはシャンにとって幸運だった。殺気を湛えた蛇の目を直視したが最後、まるでメドゥーサに睨まれた人間のように凍りついてしまうだろうからだ。凍りついていないからこそ、シャンは何とか恐怖を押し込めることに成功している。
細い足が竦む。走り去ろうと躍起になっている。しかしシャンはそれを許さない。可愛らしい唇を微かに上下させて言葉を並べた。
「――わ、私、あの、ヤオの気持ちも考えずにひどいことを……。ホントに、ごめんなさ――」
刹那、少女の幼顔が色を失った。
まるでシャンの存在を否定するかのように背けられていた蛇の目

が、はっきりとシャンを捉えたからだ。虹彩は漆黒だが、尋常ではない殺気がその奥に存在している。併せて銃口もシャンの額に焦点をあてていた。

「ガタガタとうるせぇな。消えろと言ったら消え――」

はたとヤオの目が細められる。その先には泣くことすら出来ないほど恐怖しているシャンの姿があったが、ヤオが見ているのは真っ青な顔ではなく胸の前に置かれている手の方だった。軽く首を捻って片眉を上げる。端正な唇から吐き出される言葉は依然として怒りを孕んでいたが、その内容はあまりにも唐突だった。

「その右手、何かやらかしたのか」

シャンは錆び付いた鉄骨が擦れ合うかのような鈍い動きでもって顎を引いた。胸の前に置かれていた右手に視線を落とす。黒革の手袋を嵌めている右手は目もつけられないほど震えていた。痙攣と言った方が正しいかもしれない。継続的に震えては時折跳ねるかのように大きく動く。もちろんシャンが意図していない動きだ。

シャンは恐怖から来る震えだろうか、と推測した。しかし左手は震えていない。右手だけが不自然な痙攣を続けている。

「あの、わ、分かりません……」

「そうか、まあ興味もない。――もう話すこともないだろ？　俺もない。黙って消えろ」

銃口の向こうでは蛇の目がシャンを睨め付けているが、殺気はある程度削がれたようだった。それはヤオの唐突な質問が原因なのだろうが、シャンにはその質問の意味も、意図も出来てはいなかった。

すくみ上がった少女は今度こそ踵を返して場を去った。まるで逃げるかのように。結い上げられた黒髪が角を曲がって見えなくなったとき、ヤオは銃をホルスターに差し込んだ。

LOOK UP TO BLACK-15-

「おい、射撃場は禁煙だぜ。引火したらどうしてくれるんだ」
「誰も撃って無いんだ、いいだろ」
ヤオは射撃台の上に腰掛け、煙草をふかしていた。その傍らでリガッチが渋い表情をしている。腕を組んでぶつぶつと文句を垂れていたが、返答が無いことを確認すると諦めたかのようにため息をついた。煙が場を席巻する。
ヤオの整った唇が――煙を吐き出すついでとでも言うように――質問を浮かべた。
「あのクソガキ、自分の右手について何か言っていたか？」
「クソガキってな……お嬢ちゃんのことだろ？　――あー、そうだな。言ってたわけじゃあねぇが、さっきここで銃ぶっ放してた時に庇ってたかもしれねぇな。右手を、よ。相当キツいメニュー組んでたしなぁ……痛めたんじゃねぇのかな」
「――いや、そうじゃない」
漆黒の瞳が床を眺めている。何やら思案しているかのようだ。リガッチは片眉を上げて問いつめたが返答は無い。ヤオはしばらく硬直していたが、突然自身の右手を視線の先に置いた。黒い革手袋を嵌めた右手は不規則に震えている。シャンと全く同じ症状だった。
リガッチは狼狽を隠そうともせず、だみ声で問いつめる。
「お、おい！　お前もかよ！　何だって――」
「落ち着け、俺は何でもない。よく見ろリガッチ。こういった震え方、記憶にないか？　さっきから気になって仕方がない」
「記憶にないかって……その震え方はアレじゃねぇのか、骨がヤバい時の症状。そうだよ、ひび入ったりしたらそんな震え方するぜ、確か。痛みは無い代わりに神経に異常がでちまってる。その症状が出てるってことは近いうちに手が言うこと聞かなくなるだろ……っておい！　お嬢ちゃんがソレでちまってたのかよ！　ヤバいだろう

がよ！」
　リガッチの怒声は容赦なくヤオに降りかかったが、物憂げな美顔は一切の動きを絶っている。漆黒の瞳はただ自身の震えている――もとい、震わせている右手を眺めやるだけだった。まだ納得いかないと言いたげな表情だ。
　リガッチはヤオの右腕を掴みあげると噛みつくように怒鳴った。
「おい、聞いてんのか！　お嬢ちゃんは任務行っちまったんだぞ！　途中で右手動かなくなったらどうすんだよ！」
「あいつは2挺使いだろ、どうとでもなる。――それより、本当に訓練のやりすぎが原因か？　痛めるのは肩だろ、普通。骨にひびが入るなんてのはよっぽど強い衝撃だ。それも手だぞ。あのクソガキ、何かやらかしたんじゃ――」
　続きは結ばれなかった。リガッチが混乱している思考に苛立って髪を掻き荒らしている。
ヤオは再度右手に視線を落とした。リガッチに掴みあげられているそれは震えていない。ただ手の平を視線にさらしているだけだ。
　ヤオは答えを導き出したかのように目を見開いた――と思いきや空いている左手で額を押さえる。ため息混じりの声が煙の後に吐き出された。
「――そうか、俺か」
「ひとりで納得するんじゃねぇ、頭がパンクしちまう！　俺にも説明しろ、ヤオ！」
「そう怒鳴るな。あと放せ。――クソガキの手が痙攣してた原因は、俺だ。俺がやったんだ、多分な。ひびくらいは……入ってるだろうな」
　リガッチは言われたとおりヤオの右腕を解放したが、再度掴みあげてしまいそうな勢いで激昂した。最早言っていることすら認識できない怒声を吐き出している。ヤオは煙草を手にしている左手で耳を覆って顔をしかめた。
　リガッチが勢いに任せてヤオの肩を揺らしたので、煙草の灰が折

れて落下した。
「どういうことだよお前！　どんだけ鬼畜なんだよ、おい！」
「だから怒鳴るな。揺らすな。落ち着け。――紆余曲折あってクソガキと銃を突き付け合う事態になった。その時――俺の記憶が正しければ――クソガキの右手を盛大に踏み付けた。それだろ、多分」
「多分、じゃねぇよ！　とりあえず色々言いたいけどな、一番言いたいのはこれだよｓｔｒｏｎｚｏ（ろくでなし）！　”お嬢ちゃんは今から仕事”なんだ、分かるか鬼畜野郎！　右手使い物にならないんじゃ色々危ねぇだろうが！」
「だから何度も言ってるだろ。クソガキは2挺使いだ。片方使い物にならなくなってどうにでもなる。それに標的は素人だろ？　返り討ちにあう心配もない温い仕事だ。これでしくじったら救いようがない」
　リガッチは声をつまらせた。ヤオの突き放したような口調はさておき、今回の標的が素人であることは揺るぎない事実だった。だからこそシャンは自己申請にもかかわらず任務を受けることができたのだ。
　ヤオは剃刀のような視線を宙に泳がせたまま、煙草の煙を吐き出した。
「それに、クソガキ本人が殺りたいって言ってるんだからそれでいいだろ。どうせ一発撃てば終わるんだ」
「――確かにそうだけどよ、何か話ができすぎてる気がしねぇか？　お嬢ちゃんがようやっと認可試験をクリアしたと思ったら、標的と依頼がいっぺんに舞い込んできたんだもんな。確かにお嬢ちゃんにとっちゃあ仇討ちだし、楽な仕事だよ。だがよ、何か飲み込めねぇよな」
「何がだ。勘ぐりすぎるのは野暮だぞ、リガッチ。――ん、ちょっと待て。”標的と依頼がいっぺんに舞い込んできた”とはどういう事だ」
「どうもこうも額面通りだよ。標的の男……お嬢ちゃんの元先生か

？　それがアメリカに来た途端に暗殺依頼も来たんだよ。ま、その男は孤児売っぱらった金で好き勝手してるみてぇだし、憎まれても仕方がねぇとは思うんだが……その男、マフィアと繋がってるなんて噂もあるからな。勘ぐりもしたくなるぜ、まったく」

ヤオは煙草の煙を吐き出すと、顎に手を添える。今までバラバラになっていたピースをひとつひとつつなぎ合わせていく。標的の渡米に併せて入ってきた依頼。標的と繋がりのあるマフィア。ワディムが買った１２人の孤児。ベイリアルの言葉。そしてその裏に隠されていた真意。

「――なる、ほど……これは一発撃てば、じゃ済まされないな」

「おいおい、俺を置いていくなって。どういうこったよ」

「要するにな、リガッチ。クソガキは罠に嵌められたんだ。標的の裏にはマフィアがいるんだろ？　クラウン＝ファミリア……多分ヤツらだ。――ヤツらが何がしたいのかは知らないが、標的は素人ひとりでは済まされない。恐らくはボディーガードが居るだろうな。それも並みの数じゃない」

ヤオの目が細められた。ぼんやりと虚空を眺めたまま煙草をふかすが、傍らではリガッチが耳に痛い怒声でヤオを糾弾している。本日のうちでは一番の狼狽えぶりだ。全身で感情を表している。憤怒と心配の混じり合った妙な感情だ。

「簡単に言うなよ、ヤオ！　ど、どうすんだよ！　お嬢ちゃんはもう行っちまったんだぞ！　簡単な仕事だと思ってるだろうし、下見はしねぇでいきなり殺るに決まってる！　このままじゃ蜂の巣じゃねぇか！」

「――知るか。クソガキが蜂の巣になろうが俺には関係ない」

「ふざけんじゃねぇぞ、ｓｔｒｏｎｚｏ（ろくでなし）！　お前がお嬢ちゃんのことをどんなに嫌ってるか知らねぇけどな、お嬢ちゃんはお前のことを純粋に慕ってんだぞ！　陰気で鬼畜でちょっと上等な人の皮被った化けモンだとしてもな、お嬢ちゃんはお前を師匠だと思って尊敬してるんだ！」

「生憎だが俺は”尊敬する師匠”のお役は解かれたんだ。面倒を見るつもりは毛頭無かったが、晴れて面倒を見る理由すら無くなったわけだ」
　ヤオはそう言い捨てると、面倒くさいとでも言いたげに頭を掻いた。リガッチはとうとう我慢の限界を感じ、射撃台に腰掛けているヤオの胸ぐらを掴んだ。蛇の目がリガッチを睨め付ける。しかしリガッチも負けてはいない。
「お前とお嬢ちゃんの間に何があったのかは知らねぇ。ああ、俺は知らねぇよ。だがよ、お嬢ちゃんは家族を失ったんだぜ。その上家族だと思ってた人間に裏切られた。ひとりぼっちなんだよ。――お前なら分かるだろうがよ、ヤオ。嫌いなんだろ、家族って言葉が」
「ああ、そうだ。嫌いだよ。虫酸が走る。だからこそ家族家族と喚いてるあのクソガキに我慢ならない。鬱陶しいんだよ、あいつは」
「それはお前が何よりも家族を渇望していたからだろ、ヤオ」
　――ごり、と鈍い音がした。
　リガッチのこめかみを銃口が捉えている。蛇の目は鋭さを増し、憎しみさえ孕んでリガッチを睨み続けている。
　憎悪と憤怒に歪んだ美顔から、地獄の怨嗟にも似た低い声が吐き出された。
「どいつもこいつも余計なことばかり言いやがる。――俺がクソガキを助ける理由なんて何一つ無い。クソガキが死んで困ることも何一つ無い」
「ああそうかい。じゃあ違う話をしようじゃねぇか。――お嬢ちゃんの手を怪我させたのはお前だぜ。落とし前はつけやがれ」
　浅黒い肌の上を冷や汗が流れる。リガッチは表情こそ毅然としているが内心は焦燥に駆られていた。ヤオにとって”家族”は禁句だ。これは組織内での暗黙の了解でもある。言えば簡単に首が飛ぶ。だからこそ、こめかみにあてられている銃口がいつ火を吹いても不思議ではなかった。
　ヤオはしばらく呆気にとられたような表情を見せていた。リガッ

チの呼吸音が室内に響き渡る。煙草の灰がポロ、と落ちた刹那、浅黒い肌を捉えていた銃はホルスターへと舞い戻った。

「――ちっ。面倒ごとばっかりだ」

ヤオは大層忌々しげに吐き捨てると、リガッチの傍らを通り過ぎて訓練場を後にした。

LOOK UP TO BLACK-16-

あまりにも、呆気ない。

少女は結い上げられた黒髪をたなびかせて、橙色の灯りが立ちこめる廊下を歩いていく。人の気配は一切無い。ひたすらの静寂が場を支配している。その上――玄関を含む――どのドアにも鍵は掛かっておらず、わざわざ持参した解錠セットはただのアクセサリーに成り下がってしまった。

黒光りしている革靴が踏み進めていく豪奢な絨毯も、煌びやかな装飾が美しい壁も、高価そうな絵画も、照明も何もかもが歪だ。これらの全ては孤児の命と引き替えに得られたものだ。シャンはそれを考えると息をすることにすら嫌悪感を感じていた。苛立ちと憤怒が歩む速度を加速させる。

ふと、右手に視線を置いた。小さな手はやはり痙攣している。シャンは一旦首を傾げたが、それきりだった。今はそれどころじゃない、と言い聞かせる。

――はたとシャンの脚が歩むのを止めた。立ち並ぶドアの中ひとつだけ開け放たれているものがある。その部屋に標的は居た。アルフレッド＝ホフマン。シャンの恩師であり家族であった人物。その人物は確かに部屋の中に居る。

ドアの方へ背を向けており、何をしているかは不明だ。ただ凍り付いたように動かないでいる。シャンは息を潜め、両の太股にあるホルスターからハンドガンを取り出した。壁に身を隠して室内の様子を伺う。

ホフマンは微動だにしない。椅子に座っているようだが、かといって何かをしているわけでもない。ただ座っている。そんな風だ。

シャンは生唾を飲み込むと、決して音を立てないように部屋へと侵入する。右手のハンドガンは銃口を天井へと向け、咄嗟の事態にも対処できるようにしている。空いた左手の銃はしっかりとホフマ

ンを捉えていた。
――シャンがトリガーにかけた指を強ばらせたとき、穏やかな声が室内にこだました。
「来ると思っていたんだ、シャロン」
「――……っ！」
白髪の交じった頭は振り向かなかった。シャンに対して背を向けたままだ。しかしホフマンの言葉は明らかにシャンへ向けられたものだった。
「シャロンは先生を憎んでいるんだね。殺したいんだね。確かに、先生はみんなを助けられなかった……憎まれても文句は言えない」
小さな唇が返事を繕おうとして踏みとどまった。今返答してしまえばシャンの立っている位置がばれてしまうからだ。標的に自身の正確な位置を伝えるのは避けなければならない。ホフマンはシャンに背を向けている以上、その正確な位置は把握できない。気配を感じる程度が関の山だ。
張り詰めた静寂が室内にはびこる。ホフマンは二の句を継いだ。
「みんなを助けたかったんだ。しかし先生は無力だった。みんなが連れて行かれるのを見ているしかできなかった。ごめんよ、シャロン。シャロンもつらい思いをしたんだろう？」
銃を持つ左手が震える。原因はおそらく憤怒だった。シャンは、デタラメばかり並べ立てる偽善者に我慢ならなくなっていたのだ。
小さな唇はとうとう返事を並べてしまった。
「――先生が、売り払ったんです。自分の利益のために。先生がみんなを殺したんです」
「それは違うよ、シャロン。先生はいつだってみんなのことを考えていたんだよ。みんなを救いたかったんだ。信じてくれ、シャロン」
「信用なんてできるわけがないです。――だって、先生は嘘をついているんですから。先生は、みんながまだ生きていると言いましたね？　ですが、みんなは死にました。私の目の前で。殺されました。お墓もつくってあげたんです。もう孤児院にいた子は私以外死んで

しまったのに、先生は誰のことを指して”生きている”なんて言ったんですか」
　返事はすぐに返ってこなかった。時計の音が静寂を彩る。ホフマンは肩を震わせているようだった。笑っているのか泣いているのかは判断が付かない。しばらくすると、動揺の色を見せない声色が返事を繕った。
「シャロンは、みんなのことや先生のことを家族だと思っていたのかい？」
「――はい、思っていました」
「そうだ、家族だよシャロン。先生とシャロンは家族なんだ」
「先生のことを家族だとは認めていません。少なくとも今は」
　シャンの脳裏に昨日の記憶が蘇る。
『いや、それは家族じゃない。他人だよ、クソガキ』
　ヤオの言葉が今更になって真実味を帯びてきた。シャンは原因不明の痙攣が止まない右手を何とか押さえ込み、純粋に憤怒と恐怖からくる震えが止まない左手に力を込めた。カタカタと小刻みに聞こえる音が煩わしい。
　――刹那、ホフマンがシャンを振り向いた。その表情こそ穏やかだったが、瞳の奥にはどす黒い何かが渦巻いている。しかし、シャンはそれに気づけなかった。記憶の中にある大切な思い出と、ホフマンの笑顔が一致する。
「悲しいな。先生は家族とは認めてもらえないのか」
「せ、先生は私たちを売ったんです……自分のためだけに……！そんな人は家族なんかじゃありません！」
「そうか……でも、先生はいつだってシャロンを家族だと思っているよ。大切な家族だ。――ひとりぼっちで寂しかったんじゃないのかい？　暗殺組織になんか入ってしまって……」
「わ、私は……。――っ！」
　シャンは突然弾けたかのように動揺すると、ホフマンのこめかみに銃口をあてがった。しかしホフマン当人は動揺せず、依然にこに

こと笑みを絶やさない。
「どうして、私が暗殺組織に入ったことを知っているんですか。組織の情報は門外不出のはず。私の身なりから想像したんですか？それにしては確信を持っているようでした。……先生、何を隠して――」

LOOK UP TO BLACK-17-

――ガキッ！

悲鳴にも似た音が部屋に響いた。

ホフマンを威嚇していたハンドガンは美しい弧を描いて部屋の隅へと落下した。シャンの左手はびりびりと痺れている。咄嗟に空色の瞳で辺りを見回す。絵画の奥で不自然な光沢が見え隠れしている。

シャンはホフマンの首筋を掴みあげると椅子から引きずり落として背中から地面に叩きつけた。痙攣の治まらない右手で銃を突き付ける。筋張った喉元を捉えている銃口は不安定だった。

「シャロン、手が震えているよ。人を殺すのは大変なことだよ。怖いんじゃないのかい？」

「こっ、これは怖いのではなく――」

――ただ痙攣しているだけだ。そう口にしかけたが音は発せられなかった。ただ、空気の塊が喉から漏れた。

シャンの右手は依然ガクガクと痙攣していた。先ほどから違う点を上げるとすれば、ハンドガンを持っていなかった。シャンの愛銃はホフマンの胸元で、橙色の灯りを受けて光っている。

「え……な、何で……――」

刹那、シャンの視界が反転した。背中から床に叩きつけられ、その衝撃でひどく咳き込む。両手に何も持たないシャンの体は、初老の男によっていとも容易く踏み敷かれた。

「実際、ちょっと焦ったよ。まさか至近距離で狙ってくるなんて思わなかったんだ」

バタバタと騒々しい靴音が部屋を埋める。壁や廊下から数え切れないほどの男達が姿を見せた。全員が全員銃を携帯している。そのせいで靴音に併せてガチャガチャという耳障りな音も部屋を席巻した。

「最初から、知っていたんですね……！」
「ああそうだ。不慮の事故で生き残った薄汚いガキが僕を殺しに来ると聞いたときは焦ったよ。怖かったさ。それ以前に、偶然出くわした時も焦ったんだ。何で生きてるんだって思ったよ。お前は死んだはずだったのに」
「――先ほどまでの話も嘘ですか」
「当たり前だろう！　もしかしてお前は本当に僕やガキ共を家族だと思っていたのかい？　血も繋がっていない捨て子の集まりが家族だって？　コメディもいいところだ！　お涙頂戴な感動秘話かもしれないな。どっちみち、有り得ないんだよ。お前はいつだって独りだっただろう？　今だってそうだ。それともアレかな、死ぬ間際くらいは夢を見ていたいかな？　大丈夫だよ、シャロン。先生は家族だ――なんちゃって！　あはははは！」
　笑い声がシャンに降りかかる。空色の瞳が映し込んでいるのは、家族だと信じていた”先生”の殻を被った醜悪な生き物だった。それは腹を抱えてまで笑い続けている。体を動かすたびに踏み付けられているシャンの体も振動した。
「お前はね、シャロン。そのちょっと頭の良いところがダメだったんだ。それさえなきゃ僕がちょっと遊んであげたのに。顔も悪くないし、ホントは結構狙ってたんだ。でも喚かれたりしたら商売あがったりだからさ、手を出さないでおいたんだ。最終的に無傷のままで売り払ったけど、変態には何かされたのかい？　詳しく聞かせて欲しいなぁ！　はははは！」
　可憐な顔は目一杯に悲愴を湛えていた。悲しみ、怒り、悔しさ、惨めさ。その全てが一斉にシャンを襲う。小さな唇はギリギリと噛みしめられ、いつしか血まで流れ出していた。目縁から涙が零れる。
「ホント、馬鹿なガキだよお前は。家族なんてもの、お前が手に出来るはずがないだろう？　最後の最後でひとつ勉強したね、シャロン。頭が良いのは自慢できることだよ。――さぁ、あの世で”家族”さん達に会ってきなさい、シャロン。先生が手伝ってあげるよ」

ホフマンは周囲をものものしく囲んでいる男達から銃を受け取ると、一切躊躇わずにシャンを捉える。黒々と穿たれた銃口が空色の瞳に映り込んでいた。

「じゃ、”元家族”の先生がシャロンの願いを叶えてあげるよ。家族に会っておいで。Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ（さようなら）――」

ガチッという機械的な音が部屋に響くのと、シャンの意識が闇に落ちるのはほぼ同時だった。意識を手放す直前、聞き覚えのある声がシャンの耳朶を打ったが、その情報は脳に伝わらずに霧散してしまった。

LOOK UP TO BLACK-18-

「――おい、胸くそ悪いんだよお前」
ホフマンをはじめとする全ての男が声の主を捜した。しかし影ひとつ見当たらない。誰かが侵入してきた形跡すら認められなかった。
ホフマンは今まさにトリガーを引き絞る、と言ったところで興をそがれたのが腹立たしいのか忌々しげに顔を歪めては周囲を見渡している。部屋に詰め込まれたボディーガードも訝しげに首を回していた。
ふと、ホフマンが足下を確認する。
踏み敷いていたはずの少女が忽然と居なくなっていた。
「なっ、何だとぉ！　お前、どこにいるんだ！」
「どこって、ここに居るだろうが。お前等の目は節穴以下か」
場の全員が振り向いた先には、美麗な東洋人が壁を向いて立っていた。漆黒のスーツをそれらしく着こなしている。その男は気を失っている少女を壁際に放り投げると、背後を振り向いた。
「初めて反省というものをした。なるほど……確かに鬱陶しいな、お前の言っていることは。癇に障るし耳障りだ。俺も同じ事を言っていたんだと思うと鳥肌が立つ」
「な、何言ってるんだ！　誰なんだよお前は！」
「――誰でもいいだろ。簡潔に答えれば暗殺者だよ、アルフレッド＝ホフマン」
ホフマンは悪寒に背筋を舐めあげられたような錯覚さえ覚えた。
温度のない蛇の目が、焦燥を隠せずにいるホフマンを睨め付けている。光のない、漆黒の瞳が。まるで暗黒をなみなみと注いだかのように平淡で機械的な眼光だ。
侵入者は完全にホフマンを振り返ると、右太股にあるホルスターからハンドガンを取り出した。それを真っ直ぐに構える。黒々とした銃口は淀みなくホフマンを捉えていた。

「ば、馬鹿だろお前！　これだけのボディーガードが居る中で堂々と暗殺だと！　無理に決まってるんだろ！」
「そうでもない。――ひとつ、お前は勘違いをしている。ここでのびているクソガキは新入りなんだ。多勢には敵わないだろうさ。ただな、俺は新入りじゃないんだ」
「な、んだとぉ……っ！」
ホフマンの怒声を合図に、物々しいボディーガード達が一斉に銃を構えた。
針山のように至るところから飛び出している銃口は、しっかりと侵入者を捉えている。その四面楚歌にも動揺の色を見せず、侵入者はため息に合わせて頭を掻いた。
「はー……。よくもまぁ集めたもんだ」
「余裕だなｚｉｅｒｌｉｃｈｅｒ　Ｍａｎｎ（優男）。これから蜂の巣になるってのに」
「勘違いしてもらっちゃ困る。蜂の巣になるのはお前のほうだろ」
――漆黒が、跳んだ。
影ともつかない”黒”は銃弾の雨をいとも容易くかわし、空を裂く。途端、数人の男が涎を垂らして頽れた。
侵入者はまるで羽のようにふわりと着地する。その足下では壊れたスプリンクラーよろしく血を噴きだしている男が並んでいた。豪奢な絨毯がみるみるうちに染まっていく。
銃弾は侵入者の姿を捉え直すが早いが、鉛の雨を喰らわせる。
――しかし、標的の姿などとうに消え失せていた。
「まさかこれで終わり、じゃないんだろ？」

――トッ。

ボディーガードのひとりが構えていたショットガンに重みが加わる。
沈み込んだ重心の上には、漆黒の暗殺者が――

「ぎゃあっ！」
ショットガンが床に落ちる。持ち主の体は、首から上が後ろを向いていた。
銃声が止む。ホフマンが諌めたのだ。右腕を肩と水平に挙げ、今にもトリガーを引き絞りそうな男達を牽制している。
焦燥を湛えたホフマンの眼前には、作り物めいた白い顔が。その美しい暗殺者は口を開こうとはしなかった。代わりにホフマンの唇が言葉を並べる。
「お、お前……名前はなんて言うんだ」
ホフマンの唇は震えていた。口を開くたびに歯がカチカチと音立てている。
一方、暗殺者は何がおかしいのかくつくつと喉を鳴らし始めた。眉をひそめて、耐えきれないとでも言うように笑っている。その暗殺者を除く場の人間全てが息を呑んだ。美しさと紙一重に存在していた魔性を、目の当たりにしてしまったからだ。
「く、ははっ……ふは、ははは っ！　金持ちっていうのは暗殺者の名前でもコレクションしているのか？　まるでお約束だな。聞いてどうするっていうんだ。――ああダメだ、腹が痛い。ふ、ふふ、ははは！」
「な、名前くらい聞いたっていいだろう。何がそんなにおかしいんだ！」
ホフマンの怒声が悪魔のような笑い声を遮ったとき、場が静まりかえった。そして、直後に馬鹿みたいな笑い声が響く。漆黒の暗殺者はその美顔を目一杯に歪ませて笑い出した。
「は、ははっあはははははは！　ひ、ぁ、くく、ふ、は、はは、あはははっ！　”名前くらい”？　くく、”名前くらい”だと？　その”名前くらい”がどれほどの重みを持っているのか分かっているのか？　ああ、いいんだ、知っている。どうせは金で釣ろうと思っているんだろ？　交渉に名前は必要だしな。くっ、ふふ……どいつもこいつも、俺を買えると思ってやがる」

侵入者は依然として笑い続けている。ホフマンは為す術もなく、一緒になって苦笑いを浮かべることしかできなかった。乾いた笑い声が漏れだしたとき、悪魔のような笑い声はピタリと止んだ。

「お前に買われたら、俺は”家族”の仲間入りか？　笑わせるなよ。言ったはずだ、胸くそ悪いってな。――俺もクソガキも捨て子なんだよ。お前の言うように家族なんて居るわけがない。じゃあ何が胸くそ悪いのか。それはな、お前が”家族”を語ることだよ王八蛋（クソ野郎）。今にも後にも、それだけがうぜぇ。――いいよ教えてやるさ”先生”。俺の名前はヤオ。２度目のどぶ沼で考えついた、２つ目の名前だ」

「す、捨て子……？　まさか、お前は……まさか！　そ、卒業生はひとりだけじゃないのか！　何だってアメリカに――」

「ひとりだからこそ、だ。――なるほど、お前は口先だけの偽善者野郎だと思っていたが、そこそこの情報網も持ち合わせていたんだな。どうせ死ぬんだ。どこまで知ってるか話してもらおうか？」

「は、話すかよ……！　お前ら、撃て！　撃っちまえぇぇぇぇえ！」

布を裂くような怒声を合図に、銃声がオーケストラよろしく重なり合う。

しかし暗殺者――ヤオの姿は無い。

姦しい銃声が絶え間なく発せられている中、トンッ、と軽い音が数回聞こえる。場の人間が訝しげに音を振り返ったがもう遅い。自分のうなじに音を確認した者は白目を向いて倒れ込んだ。男達のうなじには細い針が刺さり込んでいる。その体は電流でも流されたかのように痙攣し、口から泡を吹いていた。

残った人間が我を取り戻してトリガーを引き絞る。しかし、遅かった。

男達の筋張った首筋に不自然な赤い線が伸びていく。丁度喉仏からうなじへ、首を一周するように。鮮やかな色の線が首に円を描くやいなや、頭がごろんと音立てて落下した。数秒遅れて天井が朱に染まった。

「ひ、ひぃ、ひぃぃぃぃぃ！」
ホフマンが腰を抜かしてもなお逃げ延びようと後ずさる。
返り血を浴びた美麗な暗殺者は、隈の穿たれた目を三日月に歪ませる。その顔は道化にも悪魔にも見える。ヤオはダガーナイフの血糊を払うと、赤い水滴の貼り付いている足を一歩踏み出した。情けない声を出して慌てふためいているホフマンに近づくためだ。
すっかり深紅に席巻された場は、ホフマンとヤオ、そして気を失っている少女以外に生きている人間は居なかった。

LOOK UP TO BLACK-19-

「呆気ないな。人数も実力も全然足りていない。金をケチるからこういう結果になるんだ。命はひとつ。金で買えると思っているなら全額をはたいたほうが身のためだ。――まあ、もう遅いか。あの世でまた暗殺者に追われたら思い出せ」

「ひ、ひぃっ、ひぃいいっ！　じょ、情報なら全部話す、話すからっ！　た、た、助けてくれぇぇえ！　頼むよぉおお！」

「――いいぞ？」

ホフマンは肩透かしを喰らった。

恐怖に歪み目も当てられないほど狼狽していた表情がそのままで硬直する。口は何か音を発しようとしたままだらしなく開かれていた。

ヤオはダガーナイフを握った左手で肩を数回叩いた後、気だるげにため息をついた。

「ほら、言えよ。それとも死ぬか？」

「は、はは、ははは！　助かった、助かったぁあ！　ぼ、僕が知ってるのは”あの”組織の存在と、その実態。あとは卒業生のことだ。――お、お前のことだよ。それだけだ！」

「――どこで知った？」

「ま、前に中国人の金持ちにガキを売ったことがあったんだ。そ、そのとき仲介してたチャイニーズマフィアが話してたんだよ！　な、名前は確か……”黒龍公司”ってとこだ！それで知ったんだ！　べつに探ったりしたわけじゃない！」

深い深いため息が、ヤオの整った唇から吐き出された。

硝煙の臭いと血の臭いが入り交じった室内では、時計の音とホフマンの荒い呼吸音だけが聞こえている。ヤオは心底面倒くさそうに肩を叩いていた。ホフマンはその様子を期待の眼差しで見ている。口の端がいやらしく吊り上がっていた。

「言った、言ったぞ！　助けてくれよぉ！　な？　な？」
「――お前は、親兄弟が居たか？」
その声は、低く冷たかった。もしホフマンが冷静に物事を考えられる状態だったなら、声の奥深くに”憎悪”が籠められていたことに気づいただろう。しかし愚かな初老男性は自らの保身で頭がいっぱいだった。何の疑いも抱かず、質問に返答する。
「あ、ああ、居たよ。両親は死んだが、弟は生きてる。どこで何やってるのかは知らないが――」
「それは、家族か？」
「そ、そうだな、家族だ。ああ、家族だよ」
「じゃあ、お前が売り払っていたガキ共は何だったんだ？」
「何だって、”商品”だよ。農家のヤツらだって牛とか豚とか世話して、最終的に売るだろ？　それと一緒さ。売り物だよ、売り物。――ああでもガキ共は僕を家族だと思ってたらしいしなぁ。ヤツらも家族だったのかなぁ」
静寂に時計の音が浮く。
ヤオの目はホフマンを向いてはいるものの、捉えてはいなかった。ただぼんやりと視線を向けている、そんな風だ。なみなみと注がれたような漆黒が、黒髪の下で”殺気”を孕んでいる。
一方ホフマンは依然としてにやにやと笑いながらヤオを見上げていた。
「お前は、知ってたか？　”家族”っていうのはとんでもなく醜悪で汚らしい賤胚子の集まりなんだ。あいつらは簡単に人を捨てる。簡単に人を売る。人を煉獄に突き落としておきながら、その様子を見て楽しんでやがる。――分かるか？　煉獄の炎に焼かれてもなお生き続けた人間が何を思うのか。”家族”を語るお前になら分かるだろ？　あそこでのびてるクソガキと同じだ」
ホフマンは、やっと気づいた。――もとい、気づいてしまった。自分の置かれている状況と、自分の言葉によって引かれてしまったトリガーと、眼前で美しい顔をさらしている暗殺者の”闇”に。漆

黒の瞳はまるで窓の代わりを為しているかのようにヤオの内部を覗かせている。憎悪、殺意、悲哀、憤怒――そんなものが渦巻いている底のない闇を。

震える唇は言葉を紡ごうとしたが、叶わなかった。

「知ってのとおり、俺は彼処の出身だ。捨てられたんだよ、家族にな。――クソ溜めみたいな場所でずっと思っていた。”ぶち殺してやる”ってな。――俺もクソガキも同じ事を考えている。お前をぶち殺したと思ってるんだよ這個騙子（偽善者野郎）」

蛇の目が、見開かれた。まるで悪魔だ。収縮した黒目が、ヤオの放っている殺気に拍車をかけている。

ホフマンはどうすることも出来ないまま、涎を垂らしている。その眼はぼんやりと開かれているだけだった。

――悟ってしまったのだ。生きて帰れるなど有り得ないということを。

「俺は薬（ヤオ）。意味は”毒する者”。俺が俺自身につけた名前だ。生まれながらにして人殺しだった俺にはぴったりの名前だろ？　――だから、何とも思わないんだ。お前みたいな賤胚子（クソ野郎）を殺しても、な」

血曇りしているダガーナイフは、顔の筋肉をだらしなく緩めた男を映し込んでいる。

ヤオは口の端を吊り上げて、言った。

「あの世で”家族”にでも会ってこい。――再見（じゃあな）」

LOOK UP TO BLACK-20-

重い瞼を無理矢理にこじ開けると、塗りつぶしたような黒が視界を染め上げていた。まだ目が慣れてないものだと認識し何回かしばたたく。視界が回復するにつれて、全身の感覚と思考も体に戻ってきた。

少女――シャンは、妙な浮遊感を感じた。

（あれ……私、浮いてる？）

腰からかっくりと折れるような体勢で、シャンは浮遊していた。よく分からない振動が一定のリズムを刻んでいる。視界の回復が追いつかず、目に映るのは依然として暗闇ばかりだった。

シャンはふと、自分は死んだのではないかと考えた。最後に見たのは黒々とした銃口だ。撃たれたに違いない。シャンは穏やかな心境で納得してしまうと、諦めたような笑みを浮かべた。

（意外と何にも無いんだなぁ、地獄って……。それにしても何で浮いてるんだろう）

脇腹が痛む。何かに吊り上げられているかのような、正体不明の負荷が加わっている。

シャンは、思考が明瞭になるにつれて溢れかえってくる感情にため息をついた。

――刹那、一気に落下した。

「――……いたっ！」

ドテ、と重々しい音が暗闇に消える。どうやら浮遊していたすぐ真下は地面だったらしく、シャンの小さな体は顔から地面と衝突した。踏まれたカエルの如く伸びていたシャンの耳朶をノイズのような音声が打った。

「気づいてるなら自分で歩け」

ふと、垢抜けない顔が声の主を仰いだ。

闇夜を背に受けて佇んでいるヤオが、眉間に皺を寄せてシャンを

見下ろしている。その表情は鬱陶しげだったが、殺気は感じられなかった。
「ヤ、ヤオ……？」
「そうじゃなかったら何に見えるんだ。蛇か？」
「いえ、あの、そうじゃないんです。ど、どうしてここに？」
「それは――」
整った唇は続きを紡ごうとして口ごもった。真っ直ぐに見上げているシャンから目線を外し、バツが悪そうに首の後ろを掻いている。しばらくして聞き取りにくい音声が静寂に流れた。
「右手、やったのは俺だからな。後からゴチャゴチャ言われても鬱陶しい。それだけだ」
シャンは、首を傾げながらも右手に視線を置いた。痙攣して動かなくなったはずの右手には、破かれたようにボロボロの布が巻かれている。どうやら水分を含んでいるようで、ひんやりとしていた。少女の頭はどんどん傾いていったが、とりあえずひとつの答えを導き出した。
「この手当て、ヤオがやったんですか？」
「気にくわないならとればいいだろう。骨にひび入ってるんだ。冷やすくらいしないとまずいんじゃないのか」
「いえ、あ、あの、ありがとうございます。――あ、そういえば、あの、まだきちんと謝ってませんでした。その――」
可愛らしい唇がもごもごと言葉を連ねていたとき、漆黒の暗殺者がその目前にしゃがみこんだ。シャンの空色の瞳には男とは思えない美麗な顔が映り込んでいる。しかしその美顔は不服そうに歪んでいた。端正な唇もへの字に曲がっている。
ヤオはしばらく目を見開いている少女を睨み付けていたが、しびれを切らしたのか左手を少女の額に掲げる。黒い革手袋を嵌めた細い指は、親指と人差し指で輪を作り、そして――
――バチッ！

「い、いたっ！」
「ゴチャゴチャうるせぇ。任務ひとつ満足にこなせないクソガキは黙ってろ」
空色の瞳が潤む。少女は額を抑えて泣きそうな表情をヤオに向けた。デコピンとは到底思えない衝撃がシャンの額を襲ったからだ。
「あ、あの、痛いです」
「それでチャラにしてやるよ白痴。分かったら金輪際生意気な口叩くなよ」
そう言うが早いか、ヤオは立ち上がってさっさと足を進めた。
シャンはうまく状況が飲み込めずにあたふたとしていたが、このままでは置いて行かれることを悟って漆黒の背中を呼び止める。数歩進んだ先にいる蛇の目をした暗殺者は、特に何の表情も湛えずに振り返った。
「――何だ、さっさとしろ。置いていくぞ」
「――……っ！」
つぶらな瞳が精一杯に見開かれる。
ふと、シャンの脳裏をとある一節が通り過ぎた。
『空を仰ぐといいでしょう』
シャンの頭上には漆黒の夜空が広がっている。その闇と同化している漆黒の暗殺者。優しさや思いやりなんて一切持ち合わせていないだろうと思っていたその人が、シャンを待つために足を止め、あまつさえ振り返ってシャンを見ている。
――その美麗な顔立ちを、シャンは見上げている。仰ぎ見ている。
（空じゃ……なかったけど――）
空を見上げるように尊敬している師匠。雲に手を伸ばすように追いかけ続けている命の恩人。それはこの世の何よりも恐ろしく、傲慢で、自分勝手で、冷酷だ。他人を、命を何とも思わない殺人鬼めいた暗殺者。
――しかし、シャンはひたすらにその暗殺者を仰いでいた。

「なんだ、俺の顔がそんなにおかしいか」
「違うんです。あの、その――私、やっぱりヤオのこと尊敬しています。尊敬する師匠です」
「――ふん」
ヤオは鼻で笑って背を向けてしまった。一瞬口の端が上を向いていたことを、シャンは知る由もない。コツコツ、と明朗な靴音が夜に響く。
シャンは慌てて立ち上がると、漆黒の背中を追って走り出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5913i/

パンドラ - lateral -

2010年10月10日17時15分発行